

258.

258. 2-101



1200501346615

×  
複写

成田山事業年報

成田山新勝寺編

昭和十五年度

〔自昭和十五年四月一日  
至同十六年三月卅一日〕



始





258.2 -101

258  
10

2/10  
7

# 成田山事業年報

昭和拾五年度 (自昭和拾五年四月一日  
至同拾六年三月卅一日)



目次

寫真

例言

一 總說

挨拶……………一頁

……………成田山貫首 荒木 照定

……………成田山事業概要……………六

……………成田山六和會に就て……………八

……………三橋 金太郎

……………成田山六和會規則……………九

二 事業狀況

(各事業に關する細部の目次は各事業の始めに掲ぐ)

成田中學校……………二頁

成田高等女學校……………完

成田幼稚園……………三

成田學園……………七

成田圖書館……………三

新更會……………二

所在地並ニ電話番號

成田中學校

(千葉縣印旛郡 成田町成田 二十七番地)

左記新勝寺電話番號ニテ接続

(電話成田)

二 番

成田高等女學校

(同町成田 十五番地)

二 八 番

成田圖書館

(同町成田 三百十二番地)

一 〇 二 番

成田幼稚園

(同町成田 六百四十七番地)

五 九 番 (電話成田)

成田學園

(同町成田 四百二番地)

一 〇 三 番 (同)

新更會

(同町成田 一 番地)

二 三 四 番 (同)



勅語

皇祖考曩ニ聖勅ヲ降シタマヒテ國體ノ精華ヲ闡明シ國民道德  
ノ大本ヲ昭示シタマヒシヨリ茲ニ五十年ナリ而シテ爾臣民克  
ク聖勅ノ趣旨ヲ體シ夙夜振勵文ヲ經トシ武ヲ緯トシ教化爰ニ  
洽ク學風以テ振ヒ國運ノ隆昌克ク今日アルヲ致セルハ朕ノ深  
ク憚フ所ナリ

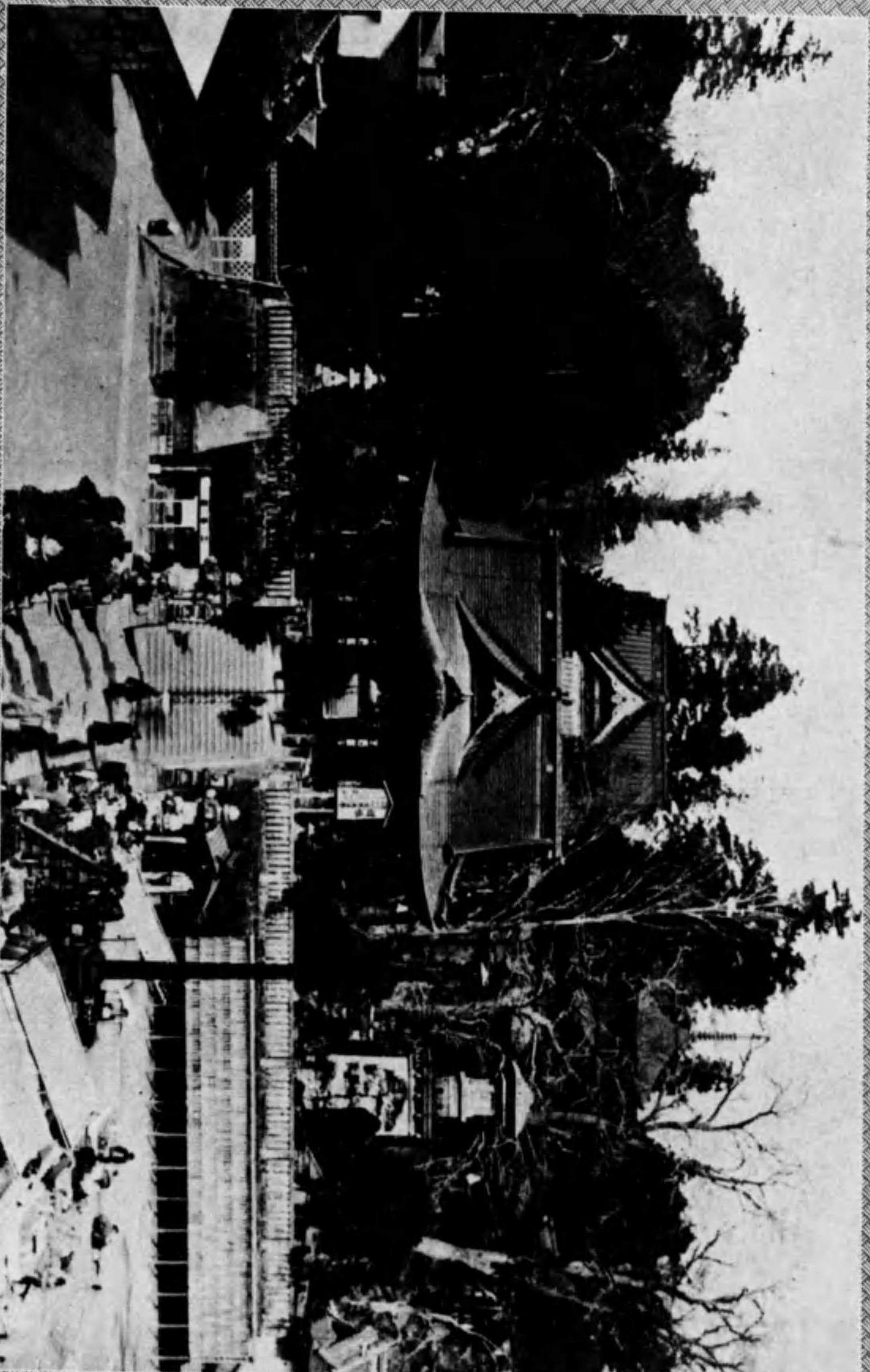
今ヤ國際ノ情勢ハ曠古ノ大變ニ際會セリ爾臣民其レ世局ニ鑒  
ミ億兆心ヲ一ニシ時艱ヲ克服シテ大訓ノ聖旨ニ副ヒタテマツ  
リ以テ德輝ヲ四表ニ光被センコトヲ期セヨ





下 祝 定 照 木 荒





景 全 山 田 成



例 言

成田図書館 寄贈本

一 本年報は成田山の經營に屬する各事業中に於て、成田山公園を除く以外の教育教化事業たる、成田中學校・成田高等女學校・成田幼稚園・成田學園・成田圖書館・新更會に就いて、昭和十五年度(自昭和十五年四月一日至同十六年三月三十一日)の狀況を記述したものである。

一 本年報は昭和十六年三月末現在調に依つて編纂したものであるが、内、職員並びに生徒等に關する事項は、大體同十六年四月末現在調に依つて記述した。

一 記述は大體前年の例に則り、總説並びに事業狀況に大別して各事業の概要、當該年度共通事項、各事業の當該年度狀況等を列記した。

一 目次は二様に之を設けた。即ち全體的一覽の目次は、其の主題を卷頭に列記し、次に各事業に關する細部の目次は、各事業毎に之を掲げ、而して該目次は各事業を通じて連絡統一を保たしめることにした。

一 更に各事業を總括し、其の狀況を一目瞭然たらしむる爲め、各事業の始めに昭和十五年度狀況一覽表を添附した。

一 記述の資料は勿論各事業主任者より報告されたものに據つたのであるが、編輯の都合上編者に於て若干の取捨、選擇又は増補した箇所もあり、又成田山史を參考とした處も多いのである。



一  
總  
說

八田國太郎



# 挨拶

成田山貫首 荒木照定

一國國運の隆昌を圖る爲めには、學術・法律・政治・經濟・産業・國防等各般に亙る充實改良に俟たざるべからざること、今更多言を要しないことであるが、其の何れの分野に於ても根幹は人の問題であり、國民素質の向上といふことに歸着する。而して此の國民素質の向上は結局するところ眞の教育の普及徹底といふことになる。

眞の教育は一面人類社會の普遍原理に立脚すると共に、他面各國家存立の理想を標目とするものである。従つて我國教育の指針は、肇國の精神を體得せしめ、祖國日本の臣民としての根本態度を培ふにある。教育に關する勅語の首に、皇祖皇宗肇國の宏遠、樹徳の深厚と、臣民の忠孝、億兆一心を



説き給ひ、此の國體の精華を以て教育の淵源なりと仰せ給へるは、實に此の教育の根本義を最も明かに宣文し給へるものである。されば明治以來時の政府が此の聖旨を奉體し、不斷の努力を以てこれが充實徹底に孜めてゐるのは、これ全く國民の教育が國家存亡の岐れるところであり、國家の歴史的生命を永遠ならしめる道が教育を措てこれなきことを示すものである。

然しながら此の教育の大業は、もとより國民の充分なる理解と協力に俟たなければ到底其の眞の徹底普及を期し得ないのであつて、國民の自覺の高まるにつれて、世界何れの國に於ても、先覺者は率先私學を設けて其の不足を補ひ、其の普及に協力してゐるのである。當山亦深くここに鑑みるところあり、明治初年以來淨財を淨所に投じて、地方子弟を中心とする各層各種の教育教化施設を爲し、逐年其の充實改善に微力を注ぎ、現在、中學校・高等女學校・圖書館・學園・新更會・幼稚園の六事業を經營し、地方文化の開発と、

國運の進展とに力めて居る次第である。

今や支那事變を繞る未曾有の難局に直面し、世界的動亂による國際情勢の變遷に對處して、我帝國根本不動の國策は中外に聲明せられ、物心兩面に互る舊來の陋習混迷は日新に更正打開の道を辿り、確固たる國民的信念と全生活力との綜合による高度國防國家體制の建設せられつつあることは實に慶賀に堪へないところであるが、我々は此の超非常時に於て、如上の信念と活力との綜合によつて銃後の護りを固むると共に、更に次に來るべきものゝ爲めに備へ、これを導きこれを育成するといふ二重の大任務を擔ふものであることを忘れてはならない。此の點に於て當山六事業の使命と責務とは從來に比して層一層重且つ大であるのである。

當山に於ては、支那事變勃發後間もなく恰も相約したるが如く、昭和十三年、開基一千年を迎へて記念大祭を奉修し、皇恩祖恩の廣大に酬い奉るゝ共



に、當山開創の根本使命たる鎮護國家の法幢を高揚し、時局に對應して強敵の調伏、障碍の排除に、御本尊明王の靈驗の顯著を讃仰せるは實に不思議な緣由である。轉感慨を深めるものである。これと同時に、此の千載一遇の大祭を契機として益々本分を盡して世人の信嚮を喚起し、更に當山諸事業の充實改善に邁進したいと念願するものである。乃ち大祭と前後して新に「六和會」を組織し、中學校乃至幼稚園諸教育事業の相互關係連絡に一層の緊密を加へ、彼此和衷協力以て其の各の使命の達成を促進し、眞に報國の實を擧げたいと祈念するものである。更に特筆謹記すべきことは、過る昭和十四年五月二十二日 畏くも 天皇陛下には、全國青少年學徒に對して優渥なる勅語を賜り、次で昨昭和十五年輝しき紀元二千六百年の佳節に當り洪深なる大詔を換發せられ、更に同年十月三十日 教育に關する 勅語換發五十年記念式典舉行に際して周渥なる 勅語を賜り、内外の重大時局に對應して、國

民に時艱克服の指標を垂れさせ給ふたことで、聖慮深遠洵に恐懼感激の至りに堪へない次第である。今や聖戰正に四周年、忠勇將兵は懸軍萬里、賊兵の慘毒鬼域に類すと雖も、君國の爲めに命鴻毛よりも軽く、祁寒を凌ぎ酷熱を冒して惡戰苦闘を繼續せられ、既に多數の將兵或は敵彈に斃れ、或は瘡瘍に襲はれて、一死奉公極天護國の衷誓を果し、大東亞建設の礎柱となられたことは實に肝銘感激の至りであり、甚深哀悼の默禱を捧げる次第である。

熟く惟みるに現下の大事艱を克服し、東亞の新秩序を建設し、大義を宇内に宣布するは 皇國天授の使命にして、將來此の大任を荷ふべき青少年學徒を教養する其の責實に重且つ大なりと謂ふべきである。冀くは各事業關係諸氏、謹んで 聖勅を奉體し、審に時局の推移に鑑み、夙夜黽勉躬行啓導薰化の實を擧げ 以て相俱に 聖恩の萬一に酬い奉らんことを。今こゝに當山六事業年報新修に際し一言を卷頭に寄す。



### 成田山事業概要

成田山の事業は、始め中學校・高等女學校・幼稚園・學園圖書館の五事業であつたが、昭和三年六月に至り、新更會が創設され、同十月には公園が生れ、茲に從來の五事業は七事業となつた。

由來成田山は、歴代の貫主進取思想に富み、公共の精神に厚く、一方明王の靈徳を四海に光被して、國家の鎮護、人心淨化の宗教的使命に努められて來たと共に、他方莫大の淨財を公共の爲めに投ぜられ、夙に幾多の教育事業並びに社會事業を起し、既に五事業に關しては、大なる實績を擧げてゐるのであるが、更に進んで二事業を加へ、ますますこれが成果を收めつゝあるのである。今各事業の概要を示せば次の通りである。

**一 成田中學校** 本校の前身は舊成田英漢義塾である。明治二十年、前々貫主故三池僧正には、夙に此の地に中等教育機關の設備なきことを頗る遺憾として、英漢義塾なるものを設立したが、明治三十一年時の貫主故三池僧正は其の組織に改善を加へ、英漢義塾を廢し、成田中學校設置を文部大臣に申請して、其の認可を得たのである。本校の教育方針は、一に教育勸語の聖旨を奉戴し、特に實

踐要目として剛毅・禮讓・報恩・規律を重んじ、且つ勤勉にして勞作を厭はない習慣と、實力の養成とを以て主眼とす。設置以來四十三年、卒業生數千五百四十名に達し、現在生四百二十五名を算してゐる。施設多き中に、特に生徒用圖書室備付の學科綜合檢索カードの完成せしが如きは、他に類例を見ない施設である。

**二 成田高等女學校** 同校は中學校の設立に對し、女子中等教育機關の必要を痛感された結果、明治四十四年二月前貫首故石川僧正時代に設置されたものである。

教育方針は、教育勸語の聖旨を奉戴し、飽くまでも其の實行を期し、學業を勵み淑徳を修め、女子の本分を盡すこと即ち實用的才藝に秀でた良妻賢母たるの人格を完成することを目的としてゐるものである。

如上の趣旨に基き、正科の外、隨意科として手藝・插花・茶の湯・按摩を課し、體操科に薙刀を加へ、更に弓道部を設置し形式を通じて武士道的精神を體得せしめようと努めてゐる。現在生徒數二百二十六名。

**三 成田幼稚園** 幼児保育の教育機關として、明治三十八年設置されたもので、我國では最古のものに屬してゐる。現在

園兒數百六十九名。保育課目は、唱歌・遊嬉・手藝・談話・觀察等、年齢に應じて適當にこれを課してゐる。特に保育方面以外、衛生・體育・運動方面には最も注意を拂つてゐる。

**四 成田學園** 不遇なる少年の感化救護を目的として、明治十九年五月千葉縣下各宗合同發企の下に、千葉町に創立された千葉感化院の後身である。明治二十一年四月成田山の經營に移管され、其の後四十一年三月千葉町より現地に移轉、成田山感化院と改稱、昭和三年三月成田學園と改稱したが、成田山へ移管以來、三池・石川・荒木の三貫首、相踵いで銳意事業の發展に努められ、以て今日に至つてゐる。現在生二十名修了生二百九十四名、創立以來五十五年を経過し、斯種の社會事業としては最古のものに屬してゐる。

教育の方針は、教育勸語の聖旨を奉戴し、信仰を中心として、學科の教授並びに訓育に當つてゐるが、其の團樂的、家族的な教育は本園の特徵である。

**五 成田圖書館** 明治三十四年一月前貫首故石川僧正の設置されたもので、現在圖書數拾貳萬壹千七百六十七冊、殊に藏書中佛教雜誌の如きは、明治後半期より蒐集したもので、其の數頗る多く、専門學徒に裨益するところが尠くない。

特殊の施設としては、參籠堂文庫・家庭配本・貸出並びに團體文庫・展覽會・讀書獎勵に關する印刷物等がある。閱覽者は毎日平均百四十四人。

**六 新更會** 我國は維新以來時勢の推移に伴ひ、國民的思想に動搖を來し、動もすれば其の嚮ふ所を誤らんとするので、現貫首荒木僧正に見る所あり、時弊を匡救し、人心の不安を除去して健全なる國民精神を作興せんが爲めに、昭和三年六月創設された成人教育の機關である。

其の施設としては講演會・講習會・夏季大學講座・展覽會その他一般の成人教育・社會教育を實施してゐるが、更に青少年の教育機關として、修業一箇年の新更學院がある。現在生徒六十名。

**七 成田山公園** 前貫首故石川僧正在職二十五年記念として大正七年五月起工、前後十一年を費して昭和三年十月現貫首荒木僧正に至つて竣工した。總面積四萬六千九百八十八坪を有する現代的の公園である。

從來成田山五事業の名は、廣く世に知られてゐたが、それは主に教育關係の事業であつた。然るに公園は全くこれと趣を異にし、現代の焦燥に、日夜疲勞を感じる人々の爲めに、家族相携へて此の靈園に悠遊し、以て積日の塵垢を洗ひ、休養慰安をなさしめようとする目的のもので、社會政策上に於ける一つの施設である。

以上は七事業の概要であるが、現貫首荒木僧正にはよく前貫主の後を繼承し、更に時勢の推移に着眼して新事業を起し各事業に對して多大の努力を注がれてゐる。



### 成田山六和會に就て

六和會相談役 三橋 金太郎

成田山新勝寺が鎮護國家の道場として、天下の名刹であることは、何人も異議なく首肯するところでありませぬ。しかし如何に名山大刹であつても、住持に其人を得なければ其の使命の眞の實現は望まれません。幸にも新勝寺は過去一千年間各の時代にそれ／＼好適な名僧碩徳が生まれまして、各時代に即應する施設を爲され、かくして今日の隆昌を致したものであります。今私共がよく承知致して居りまする近代の歴史に就て申しまして、常に淨財を淨所に投ぜられて、地方文化の向上と社會福祉の増進とに努められて居ります。中にも教育又は社會事業に就きましては、殊に大なる關心を持たれ、範を天下に垂れるの意氣と熱情とを示して居られます。即ち曩に故三池僧正は英漢義塾を興して地方子弟の中等教育機關に充てられ、又社會事業として感化院の經營に協力盡瘁されましたことは今尚ほ記憶に新なところでありませぬ。次で故石川僧正は、前記英漢義塾を改めて中學校に昇格し、感化院を名實共に成田山の一手經營に移され、更に高等女學校、幼稚園及び圖書館を設けられて、地方各層の教養機關を整へ、所

謂成田山五事業の完成を見るに至つたのでありますが、現貫首親下には、社會教育の振興改善等の爲めに滿三ヶ年に互つて歐米各國のそれ等を視察研究致され、御歸朝後、成人教育の必要を認められ「新更會」を新設されまして、逐年其の施設を擴充振興され、茲にこれを先師の御遺業に加へて六事業を經營されてゐるのであります。申すまでもなく、これ等六事業は何れも皆新勝寺の經營に屬して居りますとはいへ、事業の生立、歴史の關係上、動もすれば個々獨立の觀があり従つて其の間に眞の統制と有機的組織を缺く恐れがないでもなかつたのであります。こゝに深く慮るところがあられまして、親下には、この度の御開基一千年祭を好機として、新に「六和會」なるものを組織せられ、これ等諸事業の經營萬端を名實共新勝寺の統制下に纏められることになつたのであります。右につきまして左記のやうな規則を制定せられ、これによつて六事業の内容の充實は勿論、相互連絡融和の圓滿なる統制下に各事業をそれぞれ獨自の使命達成進展を圖られんとするものであります。即ち「六和會」なる會名も親下御躬ら命名なされたものでありまして、事大小となく其の眞の發達は和を以て最先とするといふ聖徳太子の御思召を強調されました次第であります。こゝに我々は新に生れました六和會の名を辱しめず、眞の實を結ぶことに邁進を誓ひますると同時に、六事業關係の諸氏に於かれまして、この御趣旨を體し

て眞に協力一致以て各自の本分を盡されんことを念願やまな  
い次第であります。

### 成田山六和會規則

- 第一條 本會ハ成田山新勝寺ノ經營ニ係ル左記六事業ノ統一  
進展ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 一、成田中學校
  - 一、成田高等女學校
  - 一、成田圖書館
  - 一、成田幼稚園
  - 一、成田學園
  - 一、新更會
- 第二條 本會ヲ成田山六和會ト稱ス
- 第三條 本會ノ事務所ヲ新勝寺内ニ置ク
- 第四條 本會ハ六事業代表者並ニ特別關係者ヲ以テ之ヲ組織ス
- 第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 一、會長 一名
  - 一、副會長 一名
  - 一、相談役 二名
  - 一、委員 五名
  - 一、臨時委員 六名
  - 一、幹事 一名

第六條 役員ノ選任 若干名

- 一、會長ハ成田山貫首之レニ當リ會務ヲ總監ス
  - 一、副會長ハ成田山執事トシ會長ヲ補佐シ會長不在ナル時ハ其任ニ當ル
  - 一、相談役ハ會長ノ囑託ニヨリ其ノ諮問ニ應ジ會議ニ參加スルモノトス
  - 一、委員ハ成田山檀徒總代人トシ臨時委員ハ六事業代表者ヲ以テ之ニ充テ六事業經營ニ關シ協議ニ與ルモノトス
  - 一、幹事ハ會長之レヲ任命シ會長ノ命ヲ受ケ其ノ事務ヲ處理ス
- 第七條 本會ハ二年一回總會ヲ催シ六事業代表者ヨリ豫算決算並ニ經營ニ關スル經過報告ヲ聽取スルモノトス
- 第八條 本會ハ毎月一回例会ヲ開ク
- 第九條 凡テ重要ナル事項ハ會長之ヲ決ス

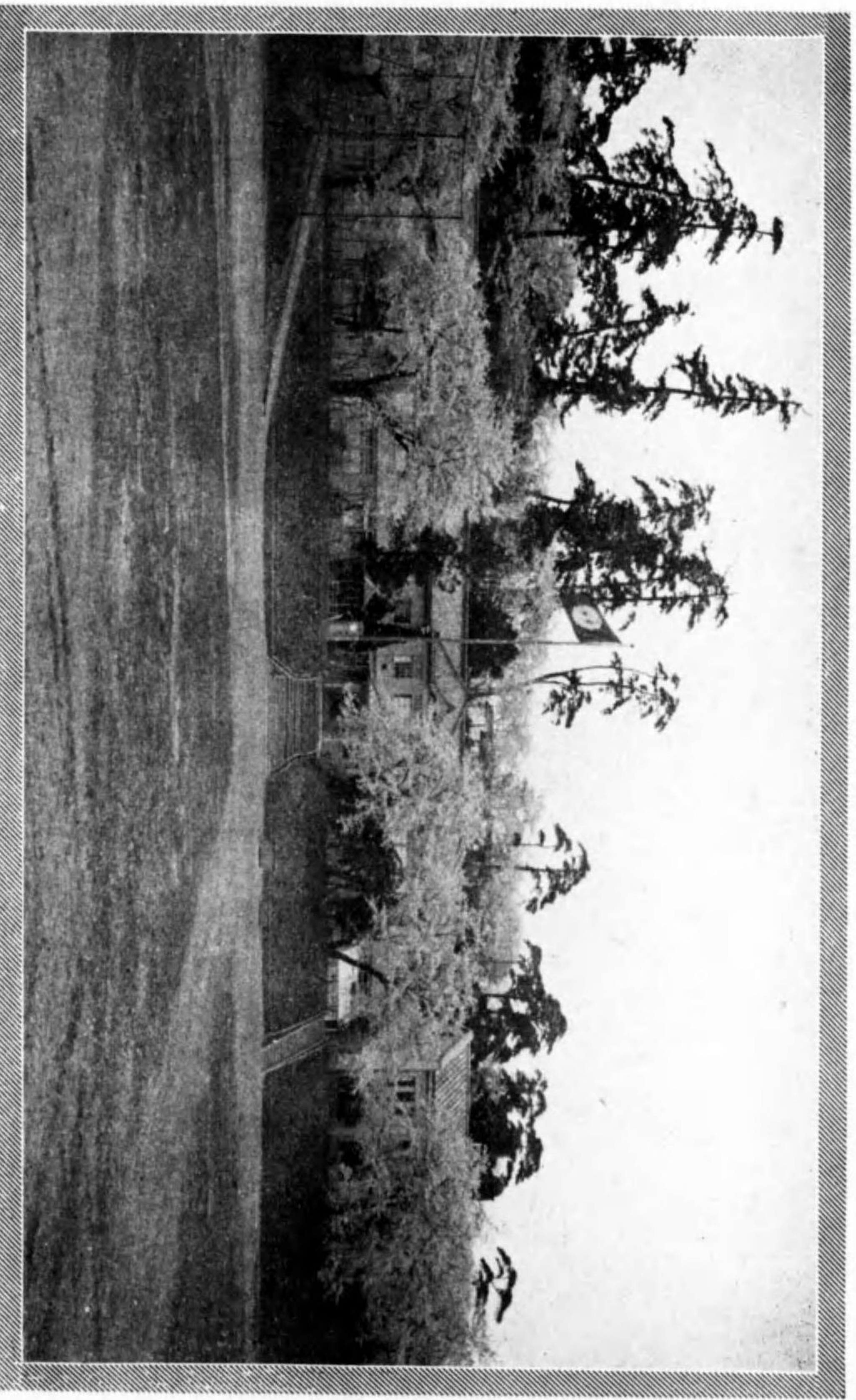


二 事業狀況



成田中學校





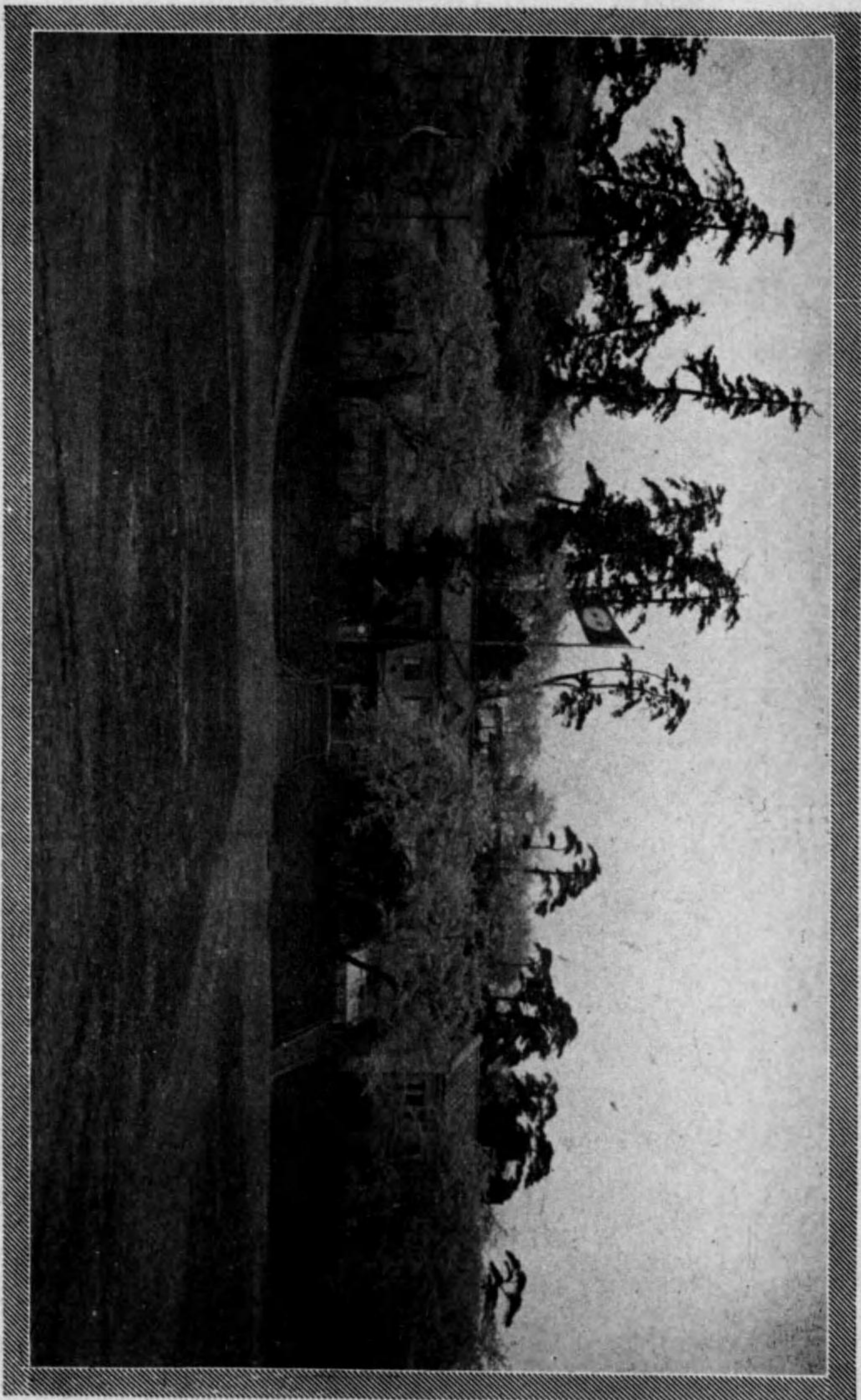
成田中學校

寫眞  
成田中學校々歌  
昭和十五年成田中學校一覽

第一	位置並びに沿革	二頁
第二	沿革	一
第三	設備並びに施設	一
第四	趣旨並びに教育方針	一
第五	昭和十五年度行事概要	一
第六	一般的施設	一
第七	時局對應施設	一
第八	生徒狀況	一
第九	年度別卒業生數	一
第十	本年度(第四十回)卒業生氏名	一
第十一	上級學校入學者調	一
第十二	各學年別生徒氏名	一
第十三	卒業生並びに生徒郡別表	一
第十四	歴代校主・顧問・校長・主監	一
第十五	職員	一
第十六	經費	一



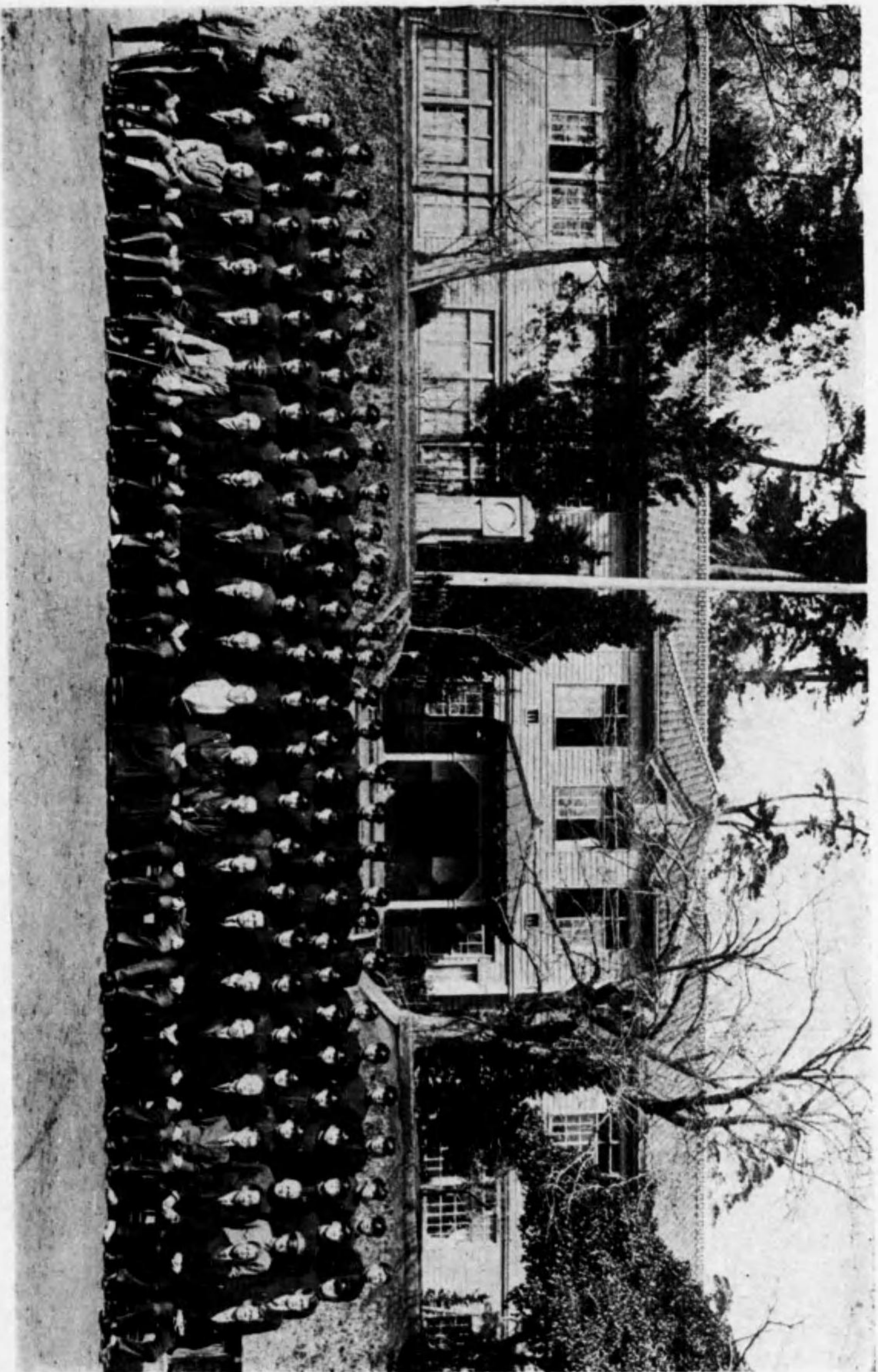
成田中學校



寫眞  
成田中學校  
昭和十五年成田中學校一覽

第一	位置並びに沿革	二頁
第二	沿革	一一
第三	設備並びに施設	二二
第四	施設並びに教育方針	二四
第五	昭和十五年度行事概要	二九
第六	一般的施設	三二
第七	時局對應施設	三五
第八	生徒狀況	三六
第九	本年度卒業生數	三七
第十	本年度(第十四回)卒業生氏名	三七
第十一	上級學校入學者調	三七
第十二	各學年別生徒氏名	三六
第十三	卒業生並びに生徒別表	三六
第十四	歴代校長・顧問・校長・主査	三六
第十五	職員	三六
第十六	經費	三六





(月三年六十和照) 生業祭三十四第

## 成田中學校々歌

尾上 八郎 作歌  
小松 耕 輔作曲

(一) 東の海の夜あけて  
大八洲岸をとよもす

うねりよる思想の怒濤  
さめよさめよ成邱の健兒

(二) 靈域は不落のとりで  
葉牡丹の校旗のもとに

御すがたは降魔の守まもり  
つどへつどへ成邱の健兒

(三) 勤勉と克己と慈悲と  
楯となし劔つるぎとなして

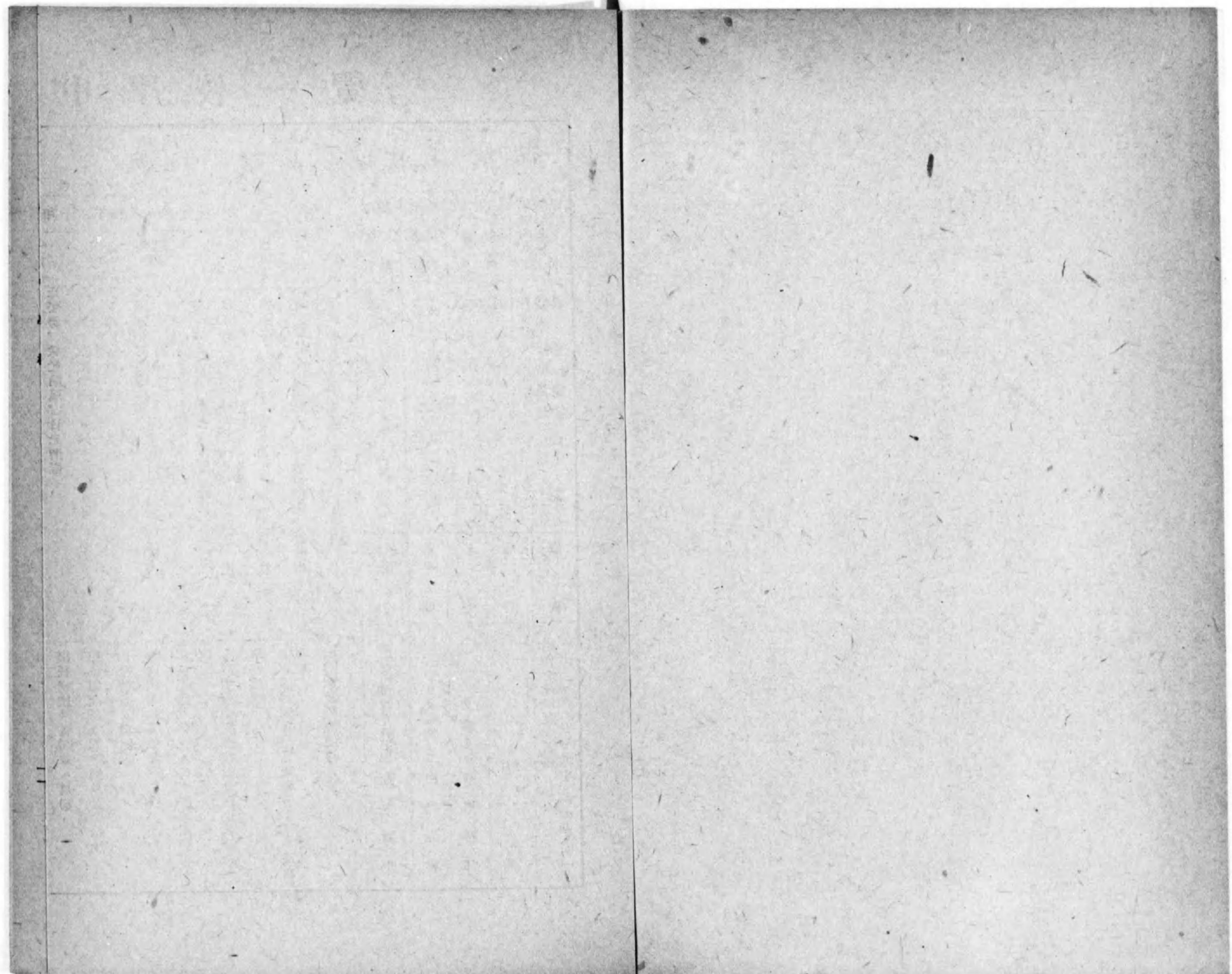
忠勇と剛毅と素朴  
立てよ立てよ成邱の健兒

(四) すさまじき主義のたゝかひ  
國のため勝利の冠

あそろしき智識のいくさ  
とれよとれよ成邱の健兒

(第十八回卒業生寄贈)







# 昭和十五年成田中學一覽

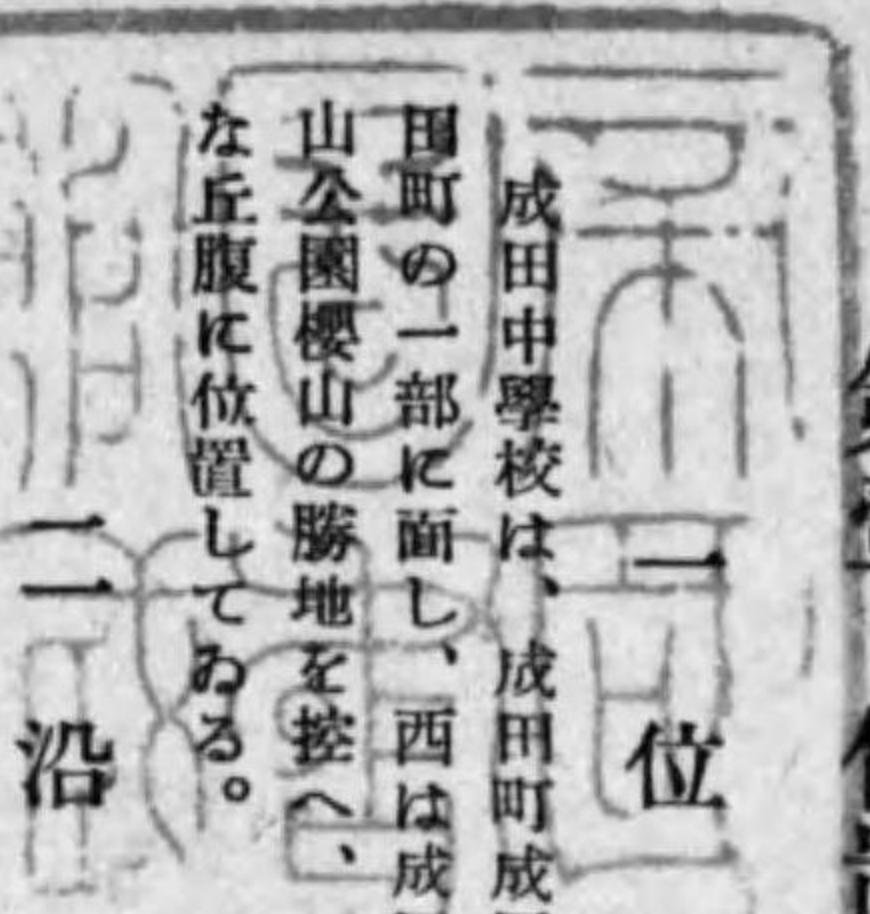
生徒状況				教育施設				方針	設備	沿革	位置
年度内卒業後ノ卒業ノ状況 二二二 三二二 一三七	入年度内卒業者 一八〇 八一 三二	生徒級數 (昭和十六年四月末現在) 四一〇 四四八	總卒業生數 一五、四〇	報國團 國防訓練部 射擊班、國防競技班、銃後奉仕部 保健衛生班、配給班、教護班				教授 教授要目 各學年進度表作成 特別指導 課外教授 上級學校入學指導 學力不進者指導 講話、講習、映畫、視察	校地 三、五〇〇坪、校舍ハ木造二階建(講堂ハ鐵筋コンクリート造)ニシテ普通教室一〇・特別教室八・講堂・校長室・職員室・事務室其他ノ教室アリ、之ニ附屬建物ヲ合シテ其ノ坪數八九〇坪 中學校令ニ據リ高等普通教育ヲ施シ國家ノ要請スル忠良ナル臣民ヲ鍊成シ以テ皇國民タル負荷ノ大任ヲ全クスルコトヲ主眼トス	成田中學校時代 本校ハ成田山ノ經營ニ屬スル教育事業ニシテ英漢義塾ヲ前身トスルモノ、其ノ沿革左ノ如シ 明治二十年十月創立、前々貫首故三池僧正塾主トナリ、同二十一年一月開校、同二十年七月塾主示寂、同年六月前貫首故石川僧正其ノ後ヲ承ケテ塾主トナル、同三十一年廢止、此間塾長交代四名、卒業生ヲ出スコト九回四十八名、外ニ選科履修生六名 明治三十一年十月設置認可、同時ニ前貫首故石川僧正校主トナリ、同年十一月開校、明治三十三年徵兵令第十三條ノ特典ヲ受ク、同年校舍新築落成、大正十三年一月校主遷化、同年二月現貫首荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ校主トナリ、同時ニ名譽校長ニ推戴セラル、創立以來卒業生ヲ出スコト四十回、校長ノ交代十五名	千葉縣印旛郡成田町成田二十七番地、成田山新勝寺境内ノ東部成田山公園櫻山ノ丘腹(電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接続)
				職 員 昭和十五年度決算額 四七、四七五・四一	校 長 文學士 橫田 泰邦	顧問 文學博士 白鳥 庫吉	校長主 成田山貫首大僧正 荒木 照定				



# 成田中學校

## 第壹 位置並びに沿革

成田中學校は、成田町成田二十七番地に在り、東南部は成田町の一部に面し、西は成田高等女學校に接し、北には成田山公園櫻山の勝地を控へ、一望開豁、遠く田園を見渡す閑靜な丘腹に位置してゐる。



沿革

本校は明治三十一年十月七日、其の前身である成田英漢義塾を廢止して、新に成田中學校を設置、其の筋の認可を得て開校したものであつて、成田圖書館・成田高等女學校・成田幼稚園・成田學園・新更會と共に成田山の經營に係る教育事業の一に屬してゐる。今其の沿革の概要を示せば次の通りである。

### 英漢義塾時代

現成田中學校の前身である英漢義塾は、明治二十年十月三日當時の住職 三池僧正が地方中等教育機關の設備なきことを嘆き、故石川甚兵衛氏（正英翁）・故諸岡勝太郎氏（先代）等と謀つて創立、成田區成田字東谷の地、即ち現圖書館敷地の下に校舎を建て、翌二十一年一月五日開校式を挙げた中等程度の學塾で、修業年限三ヶ年、高等小學校卒業以上及びそれと同等以上の學力あるものを收容した。而して開校と同時に、最初の塾長に宮村三多氏を迎へ、明治二十三年第壹回の卒業生を出し、相次いで第九回に及ぶ。其の間別に選科履修生を出すこと貳回。然るに明治三十一年十月七日成田尋常中學校設置と共に、同塾は廢止されたが、創設後實に拾有壹年の星霜を経、多數有爲の士を輩出してゐる。此の間塾長の交迭は、宮村三多氏・濱田義雄氏・福山龜太郎氏・和田玉一氏の四名であつた。同塾に關して當時の事情を知る爲め、當時三橋金太郎氏が成田中學校三十年記念式に述べられた「回顧三十年」の一節を次に掲ぐることにする。



三橋金太郎氏「回顧三十年」の一節

英漢義塾——それは故石川甚兵衛（正英翁）と故諸岡勝太郎（先代）兩氏が、その當時の有志として、まだ汽車もない不便な頃であつたにも拘らず、四方知名の政客と交り、時々名士を招聘して、政談又は學術の演説會を開いたり、或は國會の請願をしたたり、或は教育の普及發達を圖つたりする爲めに、心力を傾注されたのであります。それが因となつてやがて實果を結んだものゝ一つが、即ち英漢義塾であるのです。當時成田山住職は三池照鳳師でありました。さて三池師に於かれましては、石川、諸岡兩氏から申出でられました學校設立のことは、別段異議なく御快諾になられました。明治二十一年に之を實現されたのであります。學科は英漢教を骨子とし、當時千葉中學校及び師範學校の教職に居られた宮村三多氏を招聘し、塾長と致しました。ところが此の宮村氏は資性謹嚴で、而も稀世の雄辯家でありました。さて英漢義塾と命名して今の圖書館の下に建てられましたのが、間口十三間、奥行四間半の二階建て、これは後に中學校の寄宿舎になりましたが、實は其の當時校舎として使用したのであります。一體英漢義塾といふ校名は、其の頃印旛郡久住村土室と申す所に、小倉貞則と云ふ漢學の先生があらまして、五六年前から自分の家を塾に使用し、英漢義塾と名づけ、英語の教師と數學の教師を頼み、なほ自ら漢文や擊劍などを教へて、私塾を經營されてゐたのであります。ところで此の小倉先生と云ふ方は、まことに器量抜群で、其の爲め郡民に推されて縣會議員となり、次いで縣會議長、衆議院

議員などにもなられました。従つて家の方は自然とお留守勝ちになりますところから、遂に塾を閉づるの止むなきに立ち至りました。たま／＼成田に學校が創設されることを聞き、かねて交友の間柄であつた石川、諸岡兩氏に會見し「英漢義塾の名を遺したいからその名を以て呉れるやうに」と懇請されましたので、兩氏は其の希望を容れ、ここに英漢義塾と命名されたのであります。然る所、宮村先生は滿三年にならないで郷里へ歸られることになりました。それは國會に打つて出る爲めの準備であつた。果して衆議院議員に當選し、議政壇上の人となられました。宮村塾長去つて後任に來られた方が濱田義夫氏で、私共は濱田塾長の時代に卒業致しました。濱田先生の後任は福田龜太郎氏でありました。

此の方は鳥根の人で、同縣人和田玉一、同木村銳市の兩氏、それから理科に後藤敬三氏を聘しまして、着々内容の改善に力められました。此の當時の學生は、今日地方樞要の地位を占めてゐられませう。福山氏は現在行政裁判所の評定官、木村氏は亞細亞局長を経て公使になつて居られます。兎に角義塾も漸く學校らしくなりました。福山、木村兩氏去つて和田氏が塾長となられましたが、至つて熱心な方でした。然しどういふものか、學校の實績が餘り振はないので、一時は廢校論など出た様です。恰も其の頃です。貫首三池僧正現下が遷化せられました。石川照勳師が其後を承けられ貫首となられました。私は廢校論に對して石川僧正現下に建白書を捧呈したことがあります。それは單に廢校の不可

なるを論じた許りでなく、最早教育の必要と云ふことが、誰言ふとなく地方にも響き出した折からであり、かたがた是非共學校を維持していただきたいと云ふことを懇願したのであります。親下も亦聊かの御異論がございませぬ。たゞ當時は官學だけが尊ばれて、私學は更に顧みられぬと云ふ世の中の有様でありましたから、「義塾を改めて尋常中學校にしたいと云ふことを切望したのであります。何故と云ふに、尋常中學校の卒業者でなければ高等の學校に進む道が無く、又徴兵猶豫の特典が與へられません。しかもこれが一般の歡迎するところであつたのです。折から石川僧正現下には現代の趨勢を洞察せられ、御自身としても「若し現狀のままでは成田町の前途をどうしよう」と、茲に奮然志を決して歐米漫遊を發表せられました。これを聞いて誰一人として驚愕しないものはありません。固より種々の議論もありましたさうですが、遂に内議も一決して御出發になられました。

（昭和三年二月、成田中學校友會誌第二十三號、三橋金太郎氏より）

成田中學校時代

英漢義塾が成田中學校と改稱されるまでの経緯は、大體上述の如くであるが、其の後の模様を「成田中學校沿革史」其の他によつて記せば、

明治三十一年八月十三日少僧正峯川（後服部と改姓）照和師は當時在歐中の塾主石川僧正の命を受け、英漢義塾を廢し

て中學校を新設の件に就いて、其の筋へ稟請し、同年十月七日を以て認可された。

かくして同年十一月舊英漢義塾を現在の講堂に移轉し、喜田貞吉氏を聘して初代の校長とし、十一月一日から中學校としての授業を開始した。しかし當時の生徒數は一年級五十五名、二年級三十五名、三年級十二名、計百二名であつた。越えて同三十二年六月十三日校舎改築の件が認可となつたので、すぐ淺井造氏・宮田半左衛門氏・諸岡市郎左衛門氏・飯倉郁太郎氏・三橋金太郎氏等が委員となつて、校舎改築に着手したが、喜田校長には同年八月退職され、本校の顧問となつた。而して同三十三年には徴兵令第十三條による、徴兵猶豫の特典に浴し、且つ改築中の校舎も同年六月に至つて竣工した。時恰も石川僧正は外遊を終へて歸朝せられたので、同月二十七日盛大な落成式を舉行し、文部大臣樺山資紀閣下並びに朝野の名士が多數參列された。其の後同四十二年に至り武道場（四十坪）を運動場の北側に新築する外、銃器庫（十八坪二五）の新築生徒控場の改築（七十二坪）を行ひ、大正三年十月には生徒定員二百五十名に増加の件認可、同十二月三日には定員二百九十名に増加の件認可、昭和二年九月には同定員四百五十名と、五學級増加の件認可となり、十學級となつた。

尙ほ昭和三年五月には、講堂理科教室の新築並びに普通教



室の増築が竣成し、又運動場の擴張を行ひ、武道場を増築して現在の所に移轉した。更に同六年には工作室、金工室完成同七年十二月には武道場表玄関の完成、同八年九月には博物教室(四十坪)の新築が完成した。

しかして明治三十一年創立以來昭和十六年三月に至るまで四十回の卒業生を出し、其の數千五百四十名に及んで居る。此の間文部次官奥田義人氏・商工局長木内重四郎氏・板垣退助伯・文部省普通學務局長田所美治氏・文部省參政官大津淳一郎氏・陸軍大將福島安正閣下・文科大學長上田萬年氏・千葉縣知事石原健三閣下・同折原己一郎閣下等の諸名士が或は卒業式に、或は實況視察に來校せられ、當山の文化事業に對する努力に深甚の敬意を表せられた。明治二十年英漢義塾創立以來昭和十六年三月に至る迄、年を閲すること五十四年(滿五十二年六月)に及んで居る。

昭和七年創立三十五周年記念式を舉行。故三池・石川・服部僧正・故石川正英翁・故諸岡勝太郎氏に、墓前報告を行ひ、理事三橋金太郎氏に感謝狀を贈つた。

本校に理事を置き、三橋金太郎氏は創立當初から、石川甚兵衛氏は昭和三年四月から共に其の任に當られてゐたが、昭和十三年三月十九日「成田山六和會」の組織せらるゝに及んで理事制は廢止となつた。尙ほ石川氏は、同年四月十七日病

氣の爲め遂に他界せられた。

### 第貳 設備並びに施設

#### 一 設備

校地坪數	三、五〇〇坪	講堂	一	坪數	八〇〇
校舍建物坪數	六五〇坪	職員室	一	坪數	一九〇
設備(校舍) 木造二階建、但し講堂は鐵筋コンクリート造ニシテ其ノ内譯左ノ如シ		圖書室	一	坪數	九〇〇
室名	數	休養室	一	坪數	六〇〇
勸學奉安室	一	理化教室	一	坪數	三〇〇
校長室	一	博物標本室	一	坪數	三〇〇
事務室	一	及準備室	一	坪數	三〇〇
應接室	一	金工室	一	坪數	三〇〇
普通教室	二〇	機械室	一	坪數	三〇〇
博物教室	一	寫眞暗室	一	坪數	一〇〇
圖書手工室	一	會議室	一	坪數	九〇〇
理化準備室	一				
天秤室	一				
藥品室	一				

昇降口	一	生徒控室	一	坪數	七〇〇
武道場	一	銃器庫	一	坪數	一八〇
便所	一	物置	一	坪數	一〇〇
小使室	一	湯飲所	一	坪數	四〇〇
薪炭庫	一	體操器具置場	一	坪數	四〇〇
階下倉庫	一	階下階段等	一	坪數	二五〇
計				坪數	八〇〇〇

### 一 趣旨並びに教育方針

#### 設立の趣旨

本校は成田山新勝寺經營六大教育事業の一にして、皇國の道に則り、専ら中學校令に據る中等教育を施し、以て國家の要請する忠良なる皇國民を鍊成せんが爲めに設立せしものなり。

#### 教育方針

本校の教育方針は本校設立の趣旨に基きて、先づ「皇國民を鍊成」するにあり。換言すれば皇國の道に則りて、自我功利的觀念を放擲し、献身報國の生活に精進する眞の皇國民即ち「負荷ノ大任ヲ全クスル」忠良の臣民を鍊成するにあり、從つて訓練の核心は、一に御詔勅の聖旨を奉體し、實踐要目としては質實剛健の氣風を振勵し、剛毅、禮讓、報恩、規律

の諸徳を重んじ、勤勉にして勞苦を樂しむ實力と良風の養成に邁進せしむることに存す。

### 三 校則

#### 成田中學校校則

##### 第一章 總則

- 第一條 本校生徒定員ハ四百五十名トス
- 第二條 本校ノ修業年限ヲ五箇年トシ一年ヲ以テ一學年トス
- 第三條 但學年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル
- 第一學期 四月一日ヨリ八月三十一日ニ至ル
- 第二學期 九月一日ヨリ十二月三十一日ニ至ル
- 第三學期 一月一日ヨリ三月三十一日ニ至ル
- 休業日左ノ如シ
- 各日曜日、開校記念日(毎年十月七日)大祭日、祝日、夏季休業(七月二十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル)冬季休業(十二月二十五日ヨリ一月七日ニ至ル)學年末休業(三月三十日ヨリ同三十一日)



- ニ至ル) 學年始休業(四月一日ヨリ同五日ニ至ル)
- 第二章 學科課程及授業時間
- 第五條 各學科ノ配當並ニ每週ノ時間表ハ別表ニ依ル
- 第三章 課程ノ選修
- 第六條 生徒ハ第四學年以後ニ於テハ第一種課程若シクハ第二種課程ノ何レカヲ選修スルモノトス
- 第七條 課程ノ選擇ハ第三學年ノ終リニ保證人連署ノ上願ヒ出デ學校長ノ許可ヲ受クベシ
- 第四章 考査
- 第八條 各學年ノ課程修了又ハ全學年ノ卒業ハ平素ノ學業成績並ニ操行ヲ考査シテ之ヲ定ム
- 第五章 入學退學休學賞罰
- 第九條 生徒ノ入學ハ每學年ノ始メトス但缺員アル時ハ第二學期ノ始メニ於テ募集スルコトアルベシ
- 第十條 本校第一學年ニ入學ヲ許可スベキ者ハ國民學校第六學年卒業ノ者及ビ入學資格檢定ニ合格セル者ニツキ入學考査ノ上銓衡ス
- 第十一條 入學資格檢定ハ國民學校卒業程度ニヨリ全學科ニ就イテ之ヲ行フ
- 第十二條 第二學年以上ニ入學ヲ許可スベキ者ハ相當年齢ニ達シ其ノ學年ニ相當スル學力檢定ニ合格シタル者ニ限ル

- 第十三條 他ノ中學校ヨリ轉校セント欲スル者アル時ハ缺員アル場合ニ限リ入學ヲ許可スルコトアルベシ但全學科ニ就キ檢定ヲ行フ
- 第十四條 本校ニ入學セント欲スル者ハ體格檢査ニ合格スルヲ要ス
- 第十五條 入學ヲ希望スル者ハ本校所定ノ用紙ニ必要事項ヲ記入ノ上願出ヅベシ
- 第十六條 入學ノ許可ヲ得タル者ハ一週間以内ニ左式ノ在學證書並ニ戶籍謄本ヲ差出スベシ(在學證書雛形省略)
- 第十七條 保證人ハ二名ヲ要シ其ノ一名ハ親權者、後見人又ハ親族トシ他ノ一名ハ成田町在住ノ一家計ヲ立ツル男子トス
- 第十八條 保證人ノ資格上不適當ト認ムル時ハ之ヲ變更セシムルコトアルベシ
- 第十九條 左ノ場合ニ於テハ退學ヲ命ズ
  - 一 品行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者
  - 二 學力劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタル者
  - 三 引續キ一箇年以上缺席シタル者
  - 四 正當ノ理由ナクシテ引續キ一ヶ月以上缺席シタル者
  - 五 授業料怠納ニヶ月以上ニ互ル者

學科課程每週教授時間表

科目	學年		第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	第五學年
	數時	第一種					
修身	一	一	社會生活	國家生活	國際生活	道徳原理 社會生活 國民生活	一
公民科			國家生活	國際生活	國家生活	道徳原理 社會生活 國民生活	二
國語漢文	七	六	國語講讀 作文習字	國語講讀 漢文習字	國語講讀 漢文講讀	國語 漢文	六
歷史地理	三	三	外國地理	外國史	外國史	外國史	三
英語(英語)	五	五	聽力理解 讀取 作文	聽力理解 讀取 作文	聽力理解 讀取 作文	聽力理解 讀取 作文	三
數學	三	三	綜合數學	同	同	同	三
理科	二	三	一般理科	博物物理化學	同	同	四
實業						綜合實業	四
圖畫	一	一	自由畫	自由畫	自由畫	自由畫	四
音樂	一	一	歌曲樂典	同	同	同	四
作業科	二	二	園藝及工作	同	同	同	四
體操	五	五	體操教練 遊戲武道	同	同	同	五



計	三〇	三〇	三二	三四	三二	三四	三二
---	----	----	----	----	----	----	----

- 六 疾病事故ニ因リ學業ヲ履修シ能ハズト認メタル者
- 七 出席常ナラザル者
- 第廿條 中途退學セント欲スル者ハ保證人連署ヲ以テ其ノ理由ヲ具シ願出ヅベシ
- 第廿一條 生徒兵役ニ服スル場合ハ休學ヲ許可ス
- 第廿二條 品行方正學術優等ノ者ニハ賞品賞狀ヲ授與ス但特ニ優秀ナル者ニ對シテハ一學年間ノ授業料ヲ免除スルコトアルベシ
- 第廿三條 規則命令ニ違反シ又ハ校規ヲ紊ル者ハ戒飭謹慎停學放校ノ罰ニ處ス
- 第廿四條 學校ノ建物器具器械標本ヲ毀損又ハ亡失シタル時ハ相當ノ賠償ヲナサシムルコトアルベシ
- 第六章 授業料及入學料
- 第廿五條 授業料ハ一ヶ月金三圓五十錢トス
- 第廿六條 生徒在學中ハ出席ノ有無ニ拘ラス毎月五日迄ニ納ムベシ但毎年八月ハ納ムルヲ要セズ
- 第廿七條 授業料納付期日ヲ經過シ尙ホ五日以内ニ納メザル者ハ納付済マデ停學ヲ命ジ保證人ヲシテ之ヲ納メシム

- 第廿八條 入學志願者ハ入學考査料金壹圓ヲ納メ入學ノ許可ヲ得タル時ハ更ニ入學金壹圓ヲ納ムベシ
- 第廿九條 左ノ各項ニ該當スル者ハ授業料ヲ減免ス
  - 一 學力優等品行方正ニシテ他生ノ模範タルベキ者
  - 二 戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタル者ノ子弟
  - 三 貧困ニシテ資力ナク學力品行共ニ佳良ナル者
- 但第三項ノ場合ニ於テハ父兄又ハ後見人ヨリ特ニ願書ヲ差出サシメ又本人ニ對シテハ相當ノ義務ヲ負ハシム
- 第卅條 休學ヲ許可シタル場合ハ授業料ヲ徴收セズ
- 第七章 服 制
- 第卅一條 生徒登校ノ際ハ必ズ、制規ノ服裝ヲナスベシ
- 制帽ノ地質、型ハ全國中等學校ノ規格ニ從ヒ本校ノ徽章ヲ附スベシ
- 制服ノ地質、型ハ全國中等學校ノ規格ニ從フ
- 靴ハ黑色編上ゲヲ用フ、但シ許可ヲ得テ代用履物ヲ用フルコトヲ得
- 外套ハ全國中等學校ノ規格ニヨル

但一二學年ハ調製セザルモ可ナリ  
制服ヲ汚損シタル者若シクハ身體上ノ故障ニヨリ着用不能ナル者ハ許可ヲ得テ代用服ヲ着用スルコトヲ得

代用服ハ筒袖ニシテ袴ヲ着用スベシ  
新入生徒ニ限リ指定ノ期間中代用服ヲ許可ス  
本校則ハ昭和六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス  
本校則施行ニ關スル細則並ニ生徒取締ニ關スル規定其ノ他必要ナル内規ハ學校長之ヲ定ム

### 四 昭和十五年度行事概要

- 四月
- 六日 午前八時始業式、今澤校長退任式
- 八日 新入生對面式、不動尊、三宮神社參拜
- 十日 新校長横田泰邦先生就任式
- 十六日 中山陸軍少將來校教練ノ視察アリタリ
- 廿三日 小池教官退任式、上田正威教官新任
- 廿五日 靖國神社臨時大祭
- 五月
- 一日 興亞奉公日、令旨奉讀、不動尊、三宮神社參拜
- 三日 身體檢查(三・四・五年)

- 四月 身體檢查(一・二年)
- 六日 口腔檢查
- 七日 甲斐先生告別、江中先生就任
- 八日 四年興亞道路ノ勤勞奉仕
- 九日 五年興亞道路ノ勤勞奉仕
- 十日 五年興亞道路ノ勤勞奉仕
- 十一日 一年興亞道路ノ勤勞奉仕
- 十二日 三校(女學校、新更學院、本校)聯合體操大會
- 十三日 海軍記念日線上講演講師澤田中佐
- 十七日 二年鎌倉方面(日歸)三年日光方面(一泊)修學旅行ニ出發
- 十八日 明治神宮外苑ニテ開催ノ國防競技大會ニ出場ノタメ選手出發
- 廿日 一年筑波へ日歸旅行ニ出發
- 廿二日 青少年學徒ニ下シ賜リタル勸語奉讀式舉行
- 廿七日 中間考査開始(四日間)
- 六月
- 一日 興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜
- 三日 三・四・五年佐倉方面ニ野外教練
- 四日 三池僧正命日ニツキ一・二年募參
- 四日 一・二年野外教練



十日 天皇陛下皇紀二千六百年、伊勢ノ皇大神宮へ御親拜ノ御時刻ニ遙拜式ヲ行フ  
 十七日 本日ヨリ五日間農繁期自宅手傳組ト興亞道路勤務率仕組トニ分ケテ實施

七月

一日 興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜  
 七日 支那事變三周年記念式ヲ行フ  
 九日 期末考查開始(五日間)  
 十六日 一・二年野外教練  
 廿日 一學期終業式  
 廿一日 本日ヨリ月末マデ夏季鍛鍊行事(武道夏稽古)ヲ行フ

八月

一日 興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜  
 本日ヨリ十日間夏季行事トシテ授業、興亞道路勤務率仕組作業ヲ行フ

九日 防空訓練實施(二日間)五年富士野裾野廠營訓練

九月

一日 興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜  
 二日 始業式、木村教諭告別、西野先生新任  
 十四日 父兄會開催  
 廿五日 毎月第四水曜日午後全校マラソンヲ行フコトニ決定

十月

一日 防空訓練實施(四日間)  
 七日 創立記念式舉行  
 八日 第四十二回運動會開催  
 十二日 同窓會主催同窓戰死者、現職物故職員慰靈祭施行  
 十六日 體力檢定ヲ行フ  
 十八日 靖國神社臨時大祭  
 十九日 縣下中等學校聯合演習ニ五年參加(二日間)  
 廿四日 中間考查開始(五日間)  
 卅日 教育勅語發給五十周年記念式舉行  
 卅一日 江中先生退職

十一月

一日 興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜  
 三日 明治節式典舉行  
 六日 講演、講師海軍大尉石原薰氏  
 八日 細矢先生歸還セラレンニツキ出迎ス  
 十日 紀元二千六百年記念式典舉行  
 十六日 教練查閱施行、查閱官北村九郎少佐  
 廿日 學藝大會開催  
 廿五日 國民體力法ニヨル體力檢査ヲ施行(二日間)  
 一日 防火演習ヲ行フ

四日 五年炭焼ヲナス

六日 三・四年法華塚方面ニテ野外教練ヲ行フ

八日 校内庭球大會開催

十三日 學期末考查開始(五日間)

十四日 終業式、式後大祓ノ式ヲ舉行

廿五日 本日ヨリ一週間受験科生徒ノタメ特別授業ヲナス

卅一日 五年五十名ハ午後五時ヨリ片山、堀口兩先生引卒ノ下ニ新勝寺へ奉仕ニ赴ク

一月

一日 新年拜賀式、川瀬信雄先生新任、四年五十名ハ西原西野先生引卒ノ下ニ午前七時ヨリ新勝寺ニ奉仕ス

八日 始業式

九日 寒稽古開始

十七日 上田教官退任

十八日 寒稽古終了、武道大會

廿四日 五年東京一泊見學旅行

卅日 入學考查ニ關スル附近小學校長トノ連絡會議開催

卅一日 石川照勤師命日ニツキ職員、生徒墓參

二月

一日 興亞奉公日、不動尊、三宮神社參拜  
 十日 全校生徒多古農學校トノ對抗野外演習ヲ行フ  
 十一日 紀元節式典、式典ノ後町主催ノ健國祭ニ參列シ街道

行進ヲナス

十二日 卒業考查開始(五日間)

三月

三日 卒業式  
 八日 入學考查開始(四日間)  
 十六日 三學期末考查開始(五日間)  
 廿五日 全校生徒松崎、公津方面へ行軍  
 廿八日 終業式

五 一般的施設

學校長は職員を統率して、事務の分擔を定め、校務遂行の圓滑を圖り、併せて生徒の訓育、智育、心身の鍛鍊、向上に資する爲、施設として左の部門を置く。

一 校務部

- (1) 教務(重要會議・監督・時間割統計)  
 教務主任(首席教諭) 教務係四人(教諭)  
 生徒監三人(教諭)
- (2) 事務(庶務・會計)  
 學級主任・學科主任  
 書記

二 報國團



在來の校友會を發展的改組し、學校を皇國民の基礎的修養の道場として、師弟相携へて具學具進し、以て戰時非常時局下に於ける銃後青少年學徒の教導薰化の徹底を期するため、成田中學校報國團を組織して、昭和十六年四月二十九日の天長節の佳節をトし結團式を舉げた。役員として團長は學校長が當り、部長班長理事は教諭より、幹事は生徒より、團長が任命することになつてゐる。

(1) 總務部

各部の事業の企畫・連絡・統制に當り、庶務會計及び各種團體との折衝を取扱ふ。

(2) 鍛鍊部

- (イ) 勤勞作業班
  - (ロ) 劍道班
  - (ハ) 柔道班
  - (ニ) 野球班
  - (ホ) 庭球班
  - (ヘ) 競技班
- 事業(1)指導・練習・競技・體力大會此の外尙武並に剛健の氣を涵養する爲め毎年寒氣凜冽の期に校長以下職員生徒毎朝五時より七時半まで十日間の武道寒稽古を行つて居る。

(3) 學藝部

- (イ) 藝能班
  - (ロ) 圖書班
  - (ハ) 講演映畫班
  - (ニ) 科學班
- 事業(1)生徒の教化思想の表現郷土文化の研究等の發表機關として毎年「成田の光」を發行す。
- (2)時々斯界の大家を招聘して講演會を開催したり名映畫を鑑賞してゐる。
- (3)毎年一回學藝大會を開き修得した學科並に研究を發表せしめてゐる。
- (4)夏季休暇を利用して圖畫手工等を指導製作せしめ休暇後展覽會を開く。
- (5)受験參考書偉人傑士の傳記等毎年數百冊を購入

し、生徒の自學自習を獎勵すると共に精神の修養に資せしめてゐる。

(4) 國防訓練部

- (イ) 射撃班
  - (ロ) 國防競技班
  - (ハ) 銃後奉公班
- 事業(1)非常時局に鑑み國防競技射撃の指導練習に力を入れてゐる。
- (2)一週間一回四キロの駆足を行つてゐる。
- (3)興亞奉公日に一人一品供出させてゐる。その賣却金にて慰問袋を獻納したり出征家族の慰問をしてゐる。

(5) 生活部

- (イ) 保健衛生班
  - (ロ) 配給班
  - (ハ) 教護班
- 事業(1)救護室の設備を完備し不時の病人の救護に萬全を期してゐる。
- (2)生徒の服、帽子、ゲートル、その他學用品の圓滑なる配給を計つてゐる。
- (3)交通機關を利用して通學する者に對して自治會

が組織され通學生徒の指導、教護並に交通道德の實踐強調を圖つて居る。

三 課外教授

上級學校に進む者に對しては、毎週放課後英語・數學及び國語・漢文の特別指導をなし、日曜には模擬試験を行ひて學力の向上を圖り、成績不良の者に對しては、夏期冬期の休暇を利用して特別指導を行つてゐる。

四 カード作製

各學科を連絡綜合して智識を確實にする爲め、其の教育手段として、カード作製

五 修學旅行

校外監督

六 校外監督

映畫館・飲食店等風紀上面白からざる場所に立入ることを防止する爲め、教諭二名に校外監督を委嘱し、嚴重に取締らしめてゐる。

七 家庭連絡

毎年父兄會を催して、父兄との懇談を遂げ、必要に應じて父兄の來校を求め、尙ほ機會ある毎に家庭を訪問して學校と家庭との連絡を圖る。

八 朝禮

毎朝始業前、校庭或は雨天體操場に集合し、校長訓話後ラヂオ體操をなす。



九 參拜・年賀・募參  
 毎月一日並に大祭日には、埴生神社に参拜し、毎月一日並に學期始業日には不動尊に参詣する。  
 年頭始業日には不動尊に参詣後校主親下（現貫主）に年頭の挨拶をなす。  
 三池・石川僧正の御命日には職員生徒一同募參焼香をなす。

一〇 謝恩會  
 報恩感謝の微衷を表する爲め、卒業式終了後卒業生一同は主任引率の下に、不動尊に参詣し、歸校後謝恩會を開く。

### 六 時局對應施設

- 一 訓話、揭示
- 一 國民精神總動員講話聽講
- 一 不動尊並に埴生神社参拜（毎月一日参拜）皇軍必勝武運長久祈願
- 一 小御門神社参拜
- 一 陸海軍恤兵部慰問袋献納
- 一 佐倉陸軍病院慰問
- 一 出征家族慰問並に幫助

- 一 出征家族農繁期手傳及勤勞奉仕
- 一 出征將兵ノ歡送迎
- 一 町内戰歿者町葬参列
- 一 學校々舍内外集團勤勞奉仕
- 一 學校用製炭作業
- 一 本縣主催中等學校聯合發火演習参加
- 一 防空演習
- 一 富士山麓、三里塚佐倉方面ニテ軍事教練

### 第參 生徒狀況

#### 一 年度別卒業生數

年度別	回数	卒業者數	年度別	回数	卒業者數
明治二十三年	一	三	明治二十八年	八	一一
明治二十四年	二	二	明治二十九年	七	一
明治二十五年	三	六	明治三十年	八	六
明治二十六年	四	四	明治三十一年	九	七
明治二十七年	五	四	計		四八
外ニ選科履修生		六			

#### 成田中學校年度別卒業生數

年度	回数	卒業者數	年度	回数	卒業者數
明治三十四年	一	六	同 三十五年	二	八
同 三十六年	三	一八	同 三十七年	四	二二
同 三十八年	五	二二	同 三十九年	六	二二
同 四十年	七	二二	同 四十一年	八	二二
同 四十二年	九	二二	同 四十二年	一〇	二二
同 四十四年	一一	二二	同 四十四年	一二	二二
大正 二年	一三	二八	同 四十五年	一四	二八
同 四年	一五	三五	同 四十六年	一六	二八
同 六年	一七	三五	同 四十七年	一八	三七
同 八年	一九	三四	同 四十八年	二〇	三六
同 十年	二一	三八	同 四十九年	二二	三八
同 十二年	二三	三四	同 五十年	二四	四五
同 十四年	二五	四五	昭和 元年	二六	四八
昭和 二年	二七	三九	同 三年	二八	六二
同 四年	二九	四八	同 五年	三〇	五五
同 六年	三一	五五	同 七年	三二	五六
同 八年	三三	四九	同 九年	三四	四七
同 十年	三五	五八	同 十一年	三六	五〇
同 十二年	三七	四二	同 十三年	三八	五五
同 十四年	三九	六一	同 十四年	四〇	八一
計	一、五四〇				

#### 二 本年度（第四十回）

##### 卒業生氏名（昭和十六年三月卒業）

氏名	原籍	入學上級學校名・就職先
相川主計	印旛、富里	千葉師範學校
淺野守	印旛、中郷	千葉稅務署
足立芳文	印旛、成田	新宿豫備學校
石井正三	印旛、成田	府立七中補習科
石井正三	印旛、成田	遞信省工務局
石川恒雄	印旛、大森	無線電信學校
糸川真雄	印旛、富里南	千葉稅務署
石橋愛治	印旛、成田	三菱重工業株式會社
岩澤延光	印旛、遠山	三菱重工業株式會社
内田重信	山武、千代田	明治大學
岡本武夫	山武、千代田	京城齒科醫學專門學校
押田吾道	山武、千代田	陸軍技術廠
小川脩造	山武、千代田	
小川邦輔	香取、滑河	
小川秀平	香取、滑河	
小川好平	印旛、遠山	
	山武、千代田	



新藤健	篠田幸雄	齋藤一平	小泉太雄	桑田象信	栗原廣信	木村貞一	木原茂一	木內正三	河崎美津留	神崎輝雄	勝田英朗	加藤尚武	加藤順三	大友成彦	大川幸一	大竹仁一	大隅忠義	小川俊雄	小川弘	
印旛成田	印旛安食	印旛公津	印旛久住	香取高岡	印旛遠山	山武千代田	印旛成田	山武千代田	印旛成田	印旛安食	印旛遠山	印旛安食	印旛成田	印旛中郷	印旛成田	印旛富里	香取小御門	東京今戸	山武千代田	印旛八生
日本水産株式會社	實業	農事試驗所	橫須賀海軍航空技術廠	立川飛行機製作所	實業	實業	實業	實業	駿台豫備學校	千葉稅務署	駿台豫備學校	內務省土木局	三菱重工業株式會社	橫濱下ツク	東京區役所	府立五中補習科	遞信省航空局	千葉師範學校	城北豫備學校	東京電燈株式會社

根本敏雄	根本俊郎	成毛勘一	中村茂	成澤昇	富澤太郎	鶴山俊郎	大德省	谷武夫	高木保治	田中末治	立花文男	關部稱次	關野一雄	清宮浩	關谷忠雄	關川正誼	諏訪原健吉	鈴木和夫	鈴木敏雄	鈴木功一
印旛八生	印旛豐住	印旛八生	印旛成田	印旛八生	香取滑河	印旛成田	香取小御門	印旛公津	印旛公津	山武千代田	印旛富里	香取高岡	印旛成田	印旛八生	印旛成田	印旛成田	印旛八生	印旛遠山	印旛成田	印旛成田
法政大學			遞信省工務局	遞信省工務局	法政大學	三菱重工業株式會社	橫濱下ツク	東京豐島師範學校	千葉稅務署	橫須賀海軍工廠	東京地方專賣局	大泉師範學校	遞信省工務局	朝鮮總督府	早稻田豫備學校	遞信省工務局	千葉中補習科	中央大學		

三 上級學校入學者調

(自昭和十五年三月至昭和十六年四月)

早川邦男	古川英一	藤崎保	藤本時造	藤崎民也	紅谷宇吉	堀越秀一	松本義雄	丸本義一	宮內千秋	宮橋喜重	三橋良二	宮崎良一	村岡明也	諸岡壽一	山田輝一	山崎孝男	山田幸吉	山田重衛	吉澤正夫	龍崎恒
印旛遠山	印旛成田	印旛成田	印旛成田	印旛成田	印旛成田	茨城縣金江津	印旛木下	印旛公津	印旛八生	印旛成田	香取佐原	福岡縣八幡	印旛成田	印旛成田	印旛成田	印旛成田	印旛成田	印旛成田	印旛成田	山武千代田
日進豫備學校		滿蒙學校	實業	三菱重工業株式會社	橫濱下ツク	拓殖大學	日本大學	東京地方專賣局	鐵道省	中央大學	駿台豫備學校	鐵道省	鐵道省	駿台豫備學校	駿台豫備學校	滿蒙開拓義勇軍	千葉中補習科	陸軍造兵廠		

千葉高等園藝學校	日本大學高等師範部	第一高等學校	法政大學豫科	日本大學工科	千葉師範學校	東京齒科醫學專門學校	千葉師範學校	千葉師範學校	京城齒科醫學專門學校	中央大學豫科	中央大學豫科	中央大學豫科	專修大學豫科	專修大學豫科	東京豐島師範學校	千葉師範學校二部	千葉師範學校二部	明治大學專門部政經	大泉師範學校
36	37	38	38	38	38	38	38	39	39	40	40	40	40	40	40	40	40	40	40
芹山嘉兵衛	青柳武	岡田富美也	梶谷正一	石井源祐	石井源祐	櫻井克衛	武藤秋民	秋山好夫	內田重信	諏訪原健吉	鈴木俊雄	小川俊雄	立花文男	谷川武夫	相川主計	大竹仁一	岩澤延光	關野一雄	



### 四 各學年別生徒氏名

(昭和十六年四月現在)

◎印は特待生 △印は正副級長 級長以下身長順

#### 第五學年A組(三十四名)主任(西原鹿之助)

淺野 勉	香取高岡	栗山 次雄	同	豐住
林 允夫	印旛八生	丸 正明	同	印旛津
長谷川 良三	同	加藤 辰雄	同	成田
伊藤 和一	同	山田 紀男	同	成田
石橋 幹司	同	邊田 文男	同	香取高岡
郡司 行雄	同	木村 嘉明	同	同
今仲 鐵雄	同	戸村 信行	同	同
幡谷 好松	同	石井 一行	同	同
佐久間 好雄	同	△高木 善一	同	同
青柳 靜雄	同	野々宮 毅	同	同
山田 神一	同	岩 瀨 隆	同	同
郡司 喜三郎	同	角河 勝美	同	同
△佐藤 正夫	同	生駒 重太郎	同	同
篠原 喜好	同	香取 利昌	同	同
丸 一郎	同	鈴木 正一	同	同
伊藤 進	同	渡邊 能邦	同	同
加藤 源進	同	石井 康夫	同	同

#### 第五學年B組(四十一名)主任(西原鹿之助)

池田 壯吉	山武千代田	小島 和文	同	成田
岩田 昌喜	香取滑河	諸岡 中	同	成田
古岡 丈夫	印旛中郷	伊藤 嘉幸	同	同
後藤 浩	同	山本 昌良	同	同
高柳 健	同	黒田 嘉逸	同	同
三須 行雄	同	青柳 恭	同	同
◎大野 一郎	同	松本 哲	同	同
伊藤 喜久治	同	湯淺 幸平	同	同
伊藤 幸雄	同	遠藤 祥平	同	同
吉岡 幸雄	同	伊藤 春重	同	同
鶴田 慎一	同	△鈴木 傳之	同	同
石原 重固	同	伊藤 幹司	同	同
松岡 久夫	同	林田 幸雄	同	同
△一銀田 忠	同	桑原 榮	同	同
岩 澤 宏	同	萩原 一夫	同	同
高石 雅男	同	長谷川 操佑	同	同
伊達 敏夫	同	吉川 洋一	同	同
荒木 幸榮	同	大木 禮二	同	同
澤田 功	同	武士田 泰一	同	同
高野 忠大	同	香取多古	同	同

#### 第四學年A組(三十八名)主任(三門健一)

山口 茂雄	印旛木下	山田 毅	同	公津
大木 永夫	山武二川	湯淺 和	同	印旛八生
△加藤 進	印旛遠山	青柳 和男	同	同
相京 定一	同	京須 廣司	同	同
市川 榮一	同	丸 善雄	同	同
加藤 岱山	同	高橋 智龍	同	同
秋山 正訖	同	高見 徳衛	同	同
伊達 甚一	同	小宮 正夫	同	同
伊藤 源衛	同	成田 誠	同	同
小宮 敬雄	同	林 義孝	同	同
伊藤 和夫	同	下山 豊	同	同
長谷川 正躬	同	寺内 毅	同	同
小梶 孝夫	同	押尾 廣之	同	同
甲田 幸男	同	吉田 和	同	同
村田 弘光	同	平澤 和一	同	同
中島 昭夫	同	戸村 晃	同	同
弘海 堯光	同	藤崎 光彌	同	同
鶴澤 敏夫	同	鈴木 邦夫	同	同
圓城寺 敏夫	同	△岩 館 武	同	同

伊藤 廣敏	印旛中郷	廣瀬 武夫	同	成田
長澤 清	同	小川 徹男	同	同
櫻井 良	同	瀧澤 元	同	同
川野邊 茂	同	梶谷 潤一郎	同	同
大三川 園夫	同	村上 方之	同	同
栗原 政敬	同	小川 英	同	同
鈴木 嘉信	同	鹽澤 繁男	同	同
成 毛 平	同	相川 義男	同	同
高橋 三郎	同	坂田 順	同	同
大里 竹次	同	石橋 利男	同	同
關谷 忠雄	同	小島 照男	同	同
山本 明	同	篠田 正平	同	同
伊藤 彰爾	同	古矢 穂美雄	同	同
五木 榮藏	同	◎△木内 隆	同	同
蛙田 耕平	同	石井 小十郎	同	同
大木 政勝	同	諸岡 政富	同	同
加登 幸雄	同	服部 保民	同	同
國本 蒼生	同	△鈴木 廣通	同	同
萩原 正義	同	佐分 清介	同	同
赤尾 照次	同	竹田 榮男	同	同
◎河合 功	同	愛知名古屋	同	同
根本 金二	同	印旛成田	同	同



第三學年A組(三十九名) 主任(寺内一勇)

大谷家清	印旛久住	佐久間猛夫	印旛成田
岡崎昭次	同安食	小關勇	同富里
尾高正男	同成田	押尾繁	同成田
△本橋文夫	同酒々井	木川康夫	香取滑河
十九浦庸吉	同本埜	水津照良	印旛成田
飯島守	香取神崎	鈴木勘一	同成田
瓜生彦重	山武千代田	飯倉泰	同成田
石井章	印旛酒々井	藤崎忠明	同成田
後藤義雄	同成田	人見敏郎	同成田
齋藤昇	同成田	小林陽一郎	同成田
江上英二	同成田	岩館美佐男	同成田
高橋清	同成田	根本廣司	同成田
小川三郎	同成田	寺内和雄	同成田
林田隆	同成田	鶴澤猛	同成田
士屋恒二	同成田	大野孝夫	同成田
士井昭一	同成田	後藤晃雄	同成田
菅澤健一	同成田	平山軍治	同成田
增村雅英	同成田		
松本康	同成田		
◎淺井聰明	印旛成田		

第三學年B組(四十名) 主任(寺内一勇)

加藤金彦	印旛八生	平山庄一	印旛遠山
稻川隆博	同成田	淡路林造	香取滑河
戸田金司	香取須賀	△高橋俊吉	印旛成田
角河武雄	印旛成田	岩澤浩	山武千代田
白石佳博	同成田	田谷民夫	印旛成田
△石原壽夫	同成田	細井長郎	同成田
小川孝	山武千代田	福田敏雄	同成田
山崎廣	印旛遠山	石橋俊夫	同成田
小高博	同成田	金子信	同成田
澤田介忠	同成田	石橋弘吉	同成田
藤崎英司	同成田	鈴木宗治	同成田
門倉彌	同成田	岩田照慶	同成田
内田仁	同成田	正木光雄	同成田
齋藤宥	同成田	飯田廣	同成田
神崎秀夫	同成田	椎名毅	同成田
寺内昭	同成田	畑耕作	香取小御門
寺内正次	同成田	飯塚信吉	印旛成田
吉岡和己	同成田	加藤哲男	印旛成田
寺内正次	同成田	神崎好信	同成田
野宮均	同成田		

第二學年A組(五十三名) 主任(松山俊雄)

村上三郎	香取小御門	藤崎博雄	印旛八生
大木秀雄	印旛成田	關口誠一	同久住
◎龍崎利夫	香取多古	磯山忠雄	同公津
三橋哲郎	印旛成田	石井秀男	山武千代田
藤崎五郎	同成田	新橋幸一	印旛成田
高柳滋	同成田	勝田嘉夫	同成田
武田金治	同成田	△齋藤喜雄	同成田
山田之	同成田	桑田貢	同成田
武井利男	同成田	藤崎馨	香取高岡
渡邊龍正	同成田	山田太一	印旛遠山
杉本舜嶺	同成田	瓜生成一	同成田
荒井三郎	同成田	三須恭夫	同成田
野平和也	同成田	櫻井春孝	香取小御門
渡邊敏	同成田	石井寬一	印旛遠山
小川晴	山武千代田	林井茂	同成田
一銀田昭	印旛中郷	小倉英一郎	同成田
後藤晋二	同成田	向後秀夫	同成田
秋谷義雄	同成田	飯田馨	山武二川
高柳正平	同成田	渡邊公馨	印旛遠山
澤田章	同成田		

第二學年B組(五十三名) 主任(松山俊雄)

諸岡和男	印旛成田	太田家廣	同公津
諸岡正己	同成田	高橋三郎	同公津
青木吏	同成田	加納輝治	同公津
海老原良介	同成田	山口龍四郎	同公津
秋葉武	山武千代田	土屋廉夫	印旛成田
藤本順三	印旛成田	足立邦彦	我孫子
本橋忠	同成田		
富澤英雄	香取滑河	木村實	山武千代田
渡邊光宏	印旛中郷	井上裕	印旛本埜
宮内俊雄	同成田	渡邊淳一	同成田
林田榮司	同成田	齋藤滋	同成田
駒林俊英	同成田	篠田匡也	同成田
大久保昭一	香取高岡	山内崇之	同成田
木川忠	印旛中郷	戸村登	山武二川
鈴木三郎	同成田	越川榮里	印旛遠山
京須春雄	同成田	安原吉治	同成田
大竹清介	同成田	粉名佐吉	同成田
寺内昭	同成田	龜谷照雄	同成田
寺内照稔	同成田	内田寅雄	同成田
野口吾郎	同成田	日暮義重	印旛成田



第一學年A組(五十四名) 主任(片山辰雄)

武藤吉仲	同	永治	高橋久雄	山武千代田	武田勇	同	中郷	加藤昌男	同	成田
石井菊次郎	山武千代田	伊藤遠山	鈴木秀男	印旛遠山	廣瀬多津郎	東葛飾布佐	印旛成田	岩澤富次郎	同	成田
細野三千雄	同	安食	伊藤顯一	同	江上三郎	印旛成田	中郷	齋藤辰男	同	成田
增淵伊一	同	安食	卯之木三基天	同	加藤嘉明	同	中郷	多田昭雄	同	成田
戸村進	山武千代田	△竹村元良	大谷裕康	同	椎名昭之助	同	富里	沼崎慎二	同	成田
塚本昭	印旛久住	小武龍夫	日暮龍夫	同	湯淺喜久男	同	八生	重田憲	同	成田
關川欣治	同	菊地正	川邊春光	同	村田照賢	同	成田	石井憲	同	成田
石井重治	同	山田晃平	山邊春光	同	渡邊光一	同	成田	本多晃	同	成田
木内八郎	同	岡田比露思	岡田比露思	同	內藤昭三	同	成田	海保喜雄	同	成田
萩原剛	山武千代田	山本茂	山本茂	同	山田昭之助	同	成田	神崎政明	同	成田
岩井正躬	印旛安食	岡田比露思	岡田比露思	同	渡邊勇	同	成田	小川喜平	同	成田
池田喜久男	同	岡田比露思	岡田比露思	同	潮田光四郎	同	成田	相川喜博	同	成田
石橋英	同	岡田比露思	岡田比露思	同	小島竹夫	同	成田	後藤忠司	同	成田
浮島正美	同	岡田比露思	岡田比露思	同	清宮與一	同	成田	竹井昭一郎	同	成田
					岩間榮八	同	成田	日暮喜一	同	成田
					伊藤義健	同	成田	戶村義男	同	成田
					根本明	同	成田	鈴木明	同	成田
					一銀田和	同	成田	川嶋和二	同	成田
					大竹和	同	成田			
					京增芳雄	同	成田			
					青柳茂治郎	同	成田			
					實川恒男	同	成田			
					石井昭三	同	成田			

第一學年B組(五十四名) 主任(片山辰雄)

堀木佑介	印旛成田	小川正義	同	遠山	香取道雄	同	船穂
堀木政夫	香取米澤	三橋哲彌	同	成田	飯島和治	同	印旛大森
米井昭治	印旛船穂	大野昭一	同	成田	高橋一照	同	同
石井光夫	同	鶴山茂夫	同	成田	齋藤清五郎	同	同
田中五郎	同	高橋愈	同	成田	青野新平	同	同
伊藤實	同	加藤光雄	同	成田	鹽田邦雄	同	同
木村信夫	同	加藤幸吉	同	成田	伊藤實	同	同
多田保	同	京須德彦	同	成田	篠田幸男	同	同
椎名治四郎	同	郡司清四郎	同	成田	山田光一	同	同
吉澤和	同	加勢武德	同	成田	飯田輝男	同	同
小川久夫	同	小石川昭三	同	成田	石井市郎	同	同
小島鑑	同	後藤肇	同	成田			

五 卒業生及生徒郡別表 (昭和十六年四月現在)

學年級	郡		計
	A組	B組	
第五學年	三四	三	四一
	三〇	三	三四
	山武	一	
	千葉		
	市原		
	東葛		
	匝瑳		
	海上		
	長生		
	夷隅		
	君津		
	安房		
	他府縣		



卒業生	計	第一學年		第二學年		第三學年		第四學年	
		B組	A組	B組	A組	B組	A組	B組	A組
一、三〇一〇三	三八〇	四六	四七	四四	四二	三四	三四	三五	三四
九二	二六	二	一	二	五	四	三	二	一
八	三二	五	三	七	四	二	一	三	三
四									
三	三		二		一				
五									
一									
五									
四									
四									
七									
一〇三	七	一	一		一		一	二	
一、五四〇	四四八	五四	五四	五三	五三	四〇	三九	四二	三八

### 第四 歷代校主・顧問

#### 校長・主監

一、校主  
 石川照勤(明治三十一年七月—大正十三年一月)  
 校主兼名譽校長

荒木照定(大正十三年二月—現在)  
 二、顧問  
 白鳥庫吉(明治四十一年九月—現在)  
 三、校長・主監  
 喜田貞吉(明治三十一年十一月—三十二年八月)  
 竹內楠三(明治三十二年八月—三十四年七月)  
 石川照勤(明治三十四年七月校主自ラ學校長ヲ兼ネ、

以後大正十三年笹川氏就任マデ、實務代理又ハ主監ヲ置キテ統督ス  
 栗根鐵藏(校長事務代理)——(明治三十五年七月—四十年九月)  
 葛原運次郎(校務主監)——(明治四十一年九月—大正二年七月)  
 佐竹元二(同)——(大正二年七月—大正五年三月)  
 佐藤禮云(同)——(大正五年三月—大正八年七月)

濱田丑之助(同)——(大正八年七月—大正九年九月)  
 名川彦作(同)——(大正九年九月—大正十三年一月)  
 笹川種郎(學校長就任)——(大正十三年一月—同十四年三月)  
 小林力彌(同)——(大正十四年三月—昭和三年五月)  
 增田榮(同)——(昭和三年五月—同九年五月)  
 今澤慈海(同)——(昭和九年五月—同十五年四月)  
 横田泰邦(同)——(同昭和十五年四月—現在)

### 第五 職員

(昭和十六年五月末現在)

受持學科	職名	氏名	原籍	就職年月
修身・英語	校長兼教諭	横田 泰邦	愛知縣	昭和十五年四月
修身・英語	教諭	川瀬 信雄	岐阜縣	昭和十六年一月
國語・漢文・實業	教諭	片山 辰雄	長崎縣	昭和十四年四月
國語・漢文・實業	教諭	三門 健一	千葉縣	大正十五年四月
博物・一般理科	教諭	久住 雅治	靜岡縣	昭和七年二月
地理・公民	教諭	寺內 保	千葉縣	大正十四年四月
	名譽校長	荒木 照定	千葉縣	大正十三年二月
	顧問	白鳥 庫吉	千葉縣	明治四十一年九月



數學 ・作業	圖畫 ・作業	柔道	英語	數學	數學	歷史	英語 ・實業	國語 ・漢文 ・實業	教練	英語 ・支那語	體操	劍道 ・習字 ・園藝	音樂	漢文	物理 ・化學	物理 ・化學	劍道	教練			
教諭	教諭兼書記	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭		
西野	土屋	榎田	堀口	齋藤	原	國枝	伊藤	松山	細山	西原	成原	邊田	岡田	大石	川崎	横田	南井	白石	高川	萩原	
正人	己勇	重己	龜正	半重	雄六	重雄	一重	俊雄	末吉	之助	忠助	郎忠	郎忠	郎次	武次	哲親	榮助	利通	直三	治郎	
山口縣	靜岡縣	千葉縣	千葉縣	埼玉縣	埼玉縣	靜岡縣	東海府	千葉縣	千葉縣	千葉縣	千葉縣	千葉縣	廣島縣	福岡縣	福岡縣	愛知縣	千葉縣	千葉縣	千葉縣	千葉縣	千葉縣
昭和十五年九月	昭和八年四月	昭和七年一月	昭和十二年九月	昭和九年十月	昭和十五年四月	昭和十五年六月	昭和十五年九月	昭和九年十月	昭和三年四月	昭和四年四月	昭和四年六月	昭和十五年四月	昭和十六年四月	昭和十六年九月	昭和十六年五月	昭和十六年五月	昭和十六年五月	昭和十四年四月	昭和十四年一月	明治三十三年九月	昭和十五年五月

體操 教諭 (島田政治) 千葉縣 昭和十三年四月

第六經費

年度	費目	俸	給	雜	給	需用費	雜費	賞與	營繕費	計
昭和十五年	算額	二六、一八〇	〇〇	二、二五〇	二、二五〇	二、九〇〇	五、三三〇	八、二七〇	二、五〇〇	四七、四七五



成田高等女學校



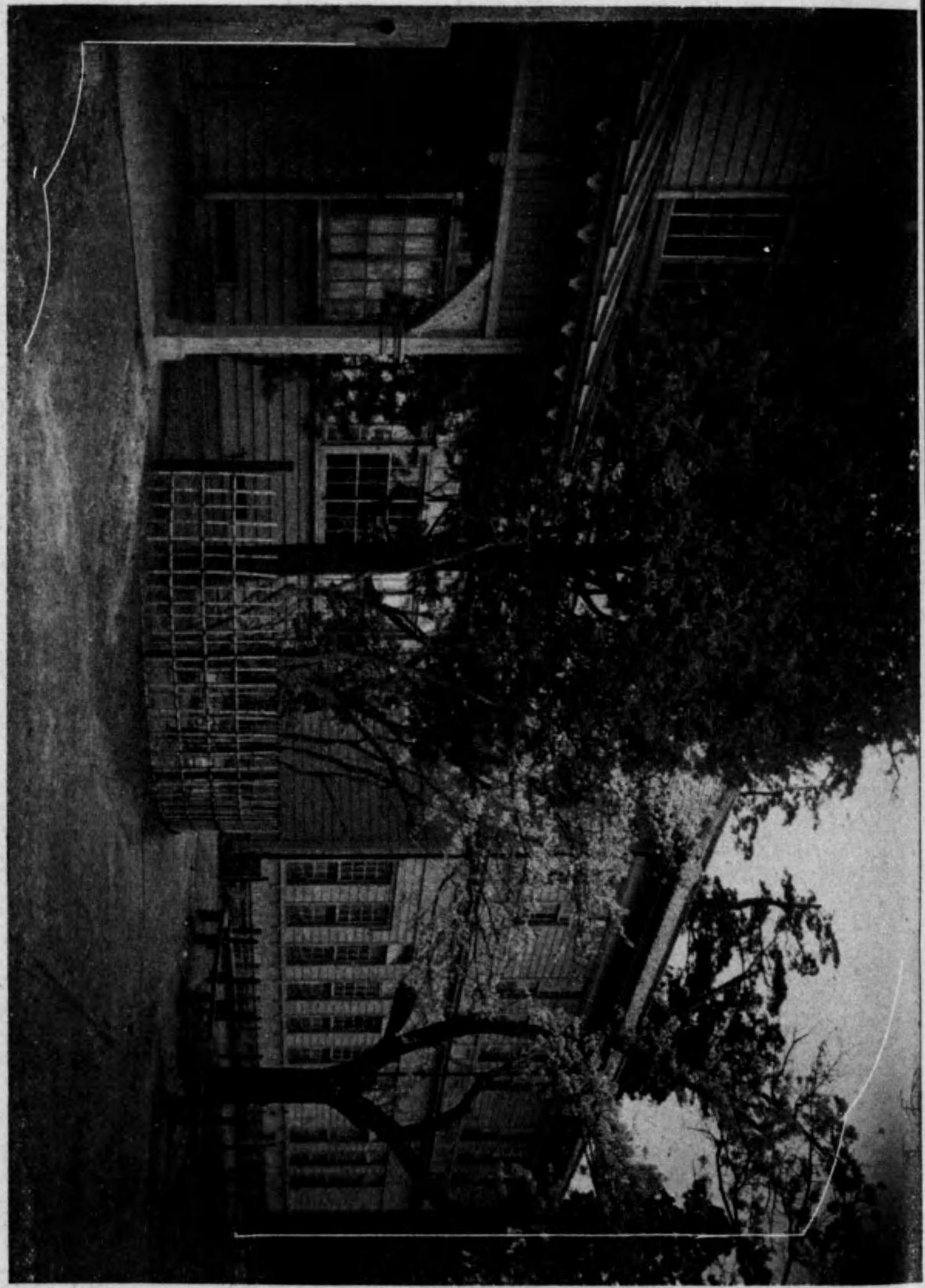


成田高等女學校

寫眞  
成田高等女學校々歌並びに創立記念日唱歌  
昭和十五年成田高等女學校一覽

第一	位置並びに沿革	三九頁
第二	沿革	三九
第三	設備並びに施設	四〇
第四	施設	四〇
第五	教育方針	四一
第六	校則	四一
第七	昭和十五年度行事概要	四二
第八	一般的施設	四九
第九	時局對應施設	五〇
第十	生徒狀況	五一
第十一	年度別郡別卒業生數	五一
第十二	本年度(第三十回)卒業生氏名	五二
第十三	本年度卒業生の卒業後狀況調	五三
第十四	本年度卒業生の各種學校入學調	五四
第十五	學級並びに生徒數	五五
第十六	各學年別生徒氏名	五五
第十七	生徒出身地方別調	五八
第十八	生徒家庭職業別調	五九
第十九	歴代校長・顧問・校長・主監	六〇
第二十	職員	六〇
第二十一	經費	六一



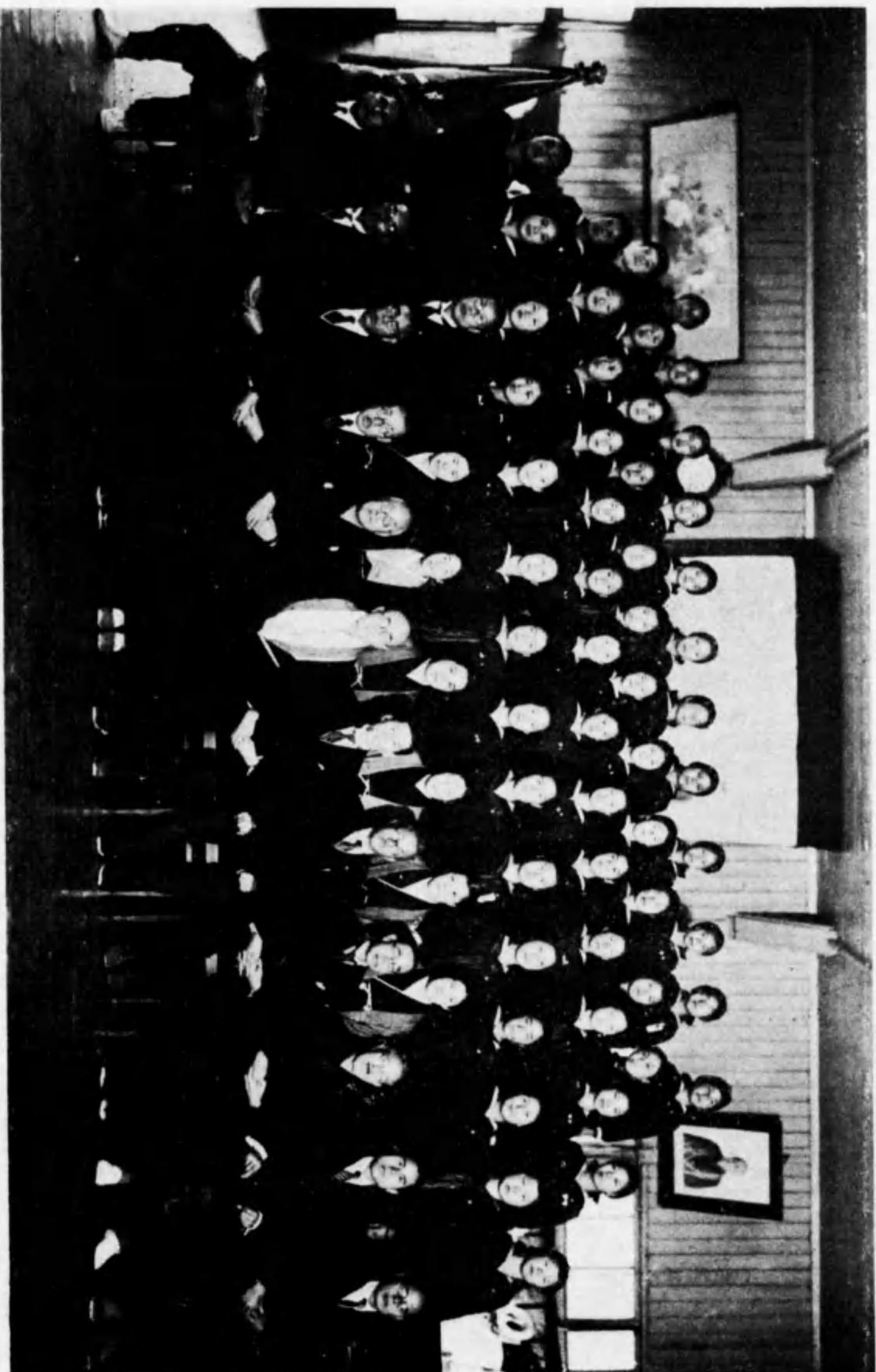


校學女等高田成

寫眞  
成田高等女學校々歌並びに創立記念日唱歌  
昭和十五年成田高等女學校一覽

第一	位置並びに沿革	三九頁
第二	沿革	三九頁
第三	設備並びに施設	四〇頁
第四	教育方針	四一頁
第五	昭和十五年度行事概要	四二頁
第六	一般的施設	四三頁
第七	時局對應施設	四四頁
第八	生徒狀況	四五頁
第九	一 年度別郡別卒業生數	四六頁
第十	二 本年度(第三十回)卒業生氏名	四七頁
第十一	三 本年度卒業生の卒業後狀況調	四八頁
第十二	四 本年度卒業生の各種學校入學調	四九頁
第十三	五 學級並びに生徒數	五〇頁
第十四	六 各學年別生徒氏名	五一頁
第十五	七 生徒出身地方別調	五二頁
第十六	八 生徒家庭職業別調	五三頁
第十七	歷代校主・顧問・校長・主監	五四頁
第十八	職員	五五頁
第十九	經費	五六頁





(月三年六十和昭) 生業卒回十三第

## 校歌・記念日唱歌

### 成田高等女學校々歌

笹川種郎作歌  
山田耕筈作曲

(一) 曉の榮ある光  
眠より覺めし乙女ら  
美しき望は満てり

(二) 成田なる岡の邊に咲く  
雪霜を凌ぎ堪へつゝ  
清き香は四方に漂ふ

(三) 鐘の音は朝な夕なに

永の夜の闇を破る  
なれの世ぞ今日の前に  
學びの窓は樂しき園生  
幸ある前途いざことほがん  
千枝五百枝萬枝の梅  
ささがけし色匂やかに  
學びの窓は樂しき園生  
幸ある前途いざことほがん  
御堂より森へと響く



怠るな勤めはげめと  
澄み渡る心耳に冴えて

我等をば教へ導く  
學びの窓は樂しき園生  
幸ある前途いざことほがん

### 成田高等女學校創立記念日唱歌

佐藤國二作歌

(一) 君が代の榮ある光浴みて

松の緑そよ成田丘邊

幸先ゆたけく産聲高く

生れし園生に學ぶ我等

祝ひて歌はん嬉しき此の日

(二) 梅が香のけ高き望胸に

清く潔き操もちて

長へに榮えん學びの窓の

開けし其の上今日にぞある

喜びしのばんゆかしき此の日

(三) 春來れば櫻の雲の臺

秋は萩の花匂ひこほれ

懇に少女の若やぐ心

導き教ゆる美しき園生

歌ひて祝はん樂しき此の日

### 位置

千葉縣印旛郡成田町成田十五番地、成田山新勝寺境内ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘腹、(電話成田二)



# 昭和十五年成田高等女學校一覽

生徒状況				教育施設			方針	設備	沿革	位置	
年度内卒業後ノ状況	入年度内卒業者	生徒級數	卒業生總數	校務	校友會	訓練	教授	本校ハ成田山經營ニ屬スル教育事業ニシテ私立成田山女學校ヲ前身トスルモノ其ノ沿革左ノ如シ 明治四十一年二月成田山女學校設置認可、同時ニ前貫首故石川僧正校主トナル、同四十四年二月成田山女學校廢止、成田高等女學校設置認可、同時ニ前貫首石川僧正校主トナル、大正十三年一月校主遷化、同年二月現貫主荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ校主トナル、昭和二年三月荒木校主名譽校長ニ推戴セラレ、明治四十五年三月第一回卒業生ヲ出シテヨリ昭和十六年三月ニ至ル迄三十回ノ卒業生ヲ出ス、此間校務主監ノ交迭五名、校長ノ交迭二名	校地一、〇六八坪、校舍ハ木造二階建ニシテ普通教室四・講堂一・特別教室七・外ニ職員室・校長室其他各室アリ、其ノ坪數計四一一坪	本校ノ教育方針ハ教育勸語ノ御趣旨ヲ奉戴シテ其ノ實踐ヲ期シ、學業ヲ勵ミ、淑徳ヲ重ンジ、將來健全ナル一家ノ主婦タリ母タルベキ人格ヲ完成スルコトヲ主眼トス	千葉縣印旛郡成田町成田十五番地、成田山新勝寺境内ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘腹、(電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接続)
各種學業ノ從事者	卒業生	(昭和十六年四月末現在)生徒級數	一、一八〇	校務 教務 衛生 統計 事務 庶務 會計	文藝部 學藝會 講演會 展覽會 圖書 閱覽會 映畫會 雜誌發行	要目 貞淑 明朗 節制 感謝 勤勞 訓練 施設 朝禮 禮拜 參拜 募參 護摩 修業 慰問 奉仕 自彊會 來客接待 新聞雜誌 郵便物整理 校舎内外清掃 貯蓄組合 勤勞奉仕團	各學年教授ニ據ル 學習的施設 課外教授 別指導 劣等生特別指導	校舎一・〇六八坪、校舍ハ木造二階建ニシテ普通教室四・講堂一・特別教室七・外ニ職員室・校長室其他各室アリ、其ノ坪數計四一一坪	本校ハ成田山經營ニ屬スル教育事業ニシテ私立成田山女學校ヲ前身トスルモノ其ノ沿革左ノ如シ 明治四十一年二月成田山女學校設置認可、同時ニ前貫首故石川僧正校主トナル、同四十四年二月成田山女學校廢止、成田高等女學校設置認可、同時ニ前貫首石川僧正校主トナル、大正十三年一月校主遷化、同年二月現貫主荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ校主トナル、昭和二年三月荒木校主名譽校長ニ推戴セラレ、明治四十五年三月第一回卒業生ヲ出シテヨリ昭和十六年三月ニ至ル迄三十回ノ卒業生ヲ出ス、此間校務主監ノ交迭五名、校長ノ交迭二名	千葉縣印旛郡成田町成田十五番地、成田山新勝寺境内ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘腹、(電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接続)	
其職業ノ從事者	卒業生	(昭和十六年四月末現在)生徒級數	一、一八〇	校務 教務 衛生 統計 事務 庶務 會計	文藝部 學藝會 講演會 展覽會 圖書 閱覽會 映畫會 雜誌發行	要目 貞淑 明朗 節制 感謝 勤勞 訓練 施設 朝禮 禮拜 參拜 募參 護摩 修業 慰問 奉仕 自彊會 來客接待 新聞雜誌 郵便物整理 校舎内外清掃 貯蓄組合 勤勞奉仕團	各學年教授ニ據ル 學習的施設 課外教授 別指導 劣等生特別指導	校舎一・〇六八坪、校舍ハ木造二階建ニシテ普通教室四・講堂一・特別教室七・外ニ職員室・校長室其他各室アリ、其ノ坪數計四一一坪	本校ハ成田山經營ニ屬スル教育事業ニシテ私立成田山女學校ヲ前身トスルモノ其ノ沿革左ノ如シ 明治四十一年二月成田山女學校設置認可、同時ニ前貫首故石川僧正校主トナル、同四十四年二月成田山女學校廢止、成田高等女學校設置認可、同時ニ前貫首石川僧正校主トナル、大正十三年一月校主遷化、同年二月現貫主荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ校主トナル、昭和二年三月荒木校主名譽校長ニ推戴セラレ、明治四十五年三月第一回卒業生ヲ出シテヨリ昭和十六年三月ニ至ル迄三十回ノ卒業生ヲ出ス、此間校務主監ノ交迭五名、校長ノ交迭二名	千葉縣印旛郡成田町成田十五番地、成田山新勝寺境内ノ東部、成田山公園舊花園ノ丘腹、(電話成田二番・二八番・一〇一番・一〇二番ニヨリ接続)	
經費	職員	校長	校譽校長	局長	顧問	校譽校長	校長	職員	校長	顧問	校譽校長
昭十五年決算額 二二、七一八二二		佐藤國二郎	成田山貫首大僧正 荒木照定	文學博士 佐藤國二郎							

## 成田高等女學校創立記念日唱歌

佐藤國二郎作歌

(一) 君が代の榮ある光浴みて  
幸先ゆたけく産聲高く  
祝ひて歌はん嬉しき此の日

(二) 梅が香のけ高き望胸に  
長へに榮えん學びの窓の  
喜びしのばんゆかしき此の日

(三) 春來れば櫻の雲の臺  
懇に少女の若やく心  
歌ひて祝はん樂しき此の日

松の緑そふ成田丘邊  
生れし園生に學ぶ我等  
清く潔き操もちて  
開けし其の上今日にぞある

秋は萩の花匂ひこほれ  
導き教ゆる美しき園生



# 成田高等女學校

## 第壹 位置並びに沿革

### 一 位置

本校は成田町成田十五番地にあり。東に中學校を控へ、西に圖書館を擁し、背部即ち北方は、成田山公園舊花園の丘腹に接して、亭々たる古松、巨木は鬱蒼と茂り、南は成田の街衢を展望し、夏は涼しく、冬暖かに眞に女子教育の場所として好適の所である。

### 二 沿革

本校は成田山經營に屬する女子教育事業にして、もと「私立成田山女學校」として創立し、後「成田高等女學校」と改稱せられたものであるが、創立當時前貫首故石川大僧正校長兼校長となりてこれが經營の任に當られ、大正十三年一月同

師遷化後は、現貫首荒木大僧正校長兼名譽校長として其經營を繼承し、逐年發達益々其の實績を向上されつゝある。  
本校には、校主の補佐として理事を置く。理事中石川甚兵衛氏、三橋金太郎氏は創立當初より其の任に當り、石川氏は専務理事となる。(石川氏は、昭和十三年四月十七日他界せらる。)

- 一 創立當初よりの沿革を列記すれば、大體次の通りである。
- 一 明治四十一年二月二十一日本縣知事より私立成田山女學校設置の件認可さる。
- 一 明治四十四年二月十三日文部大臣より私立成田山女學校を廢止し、成田高等女學校設置の件認可さる。
- 一 明治四十四年三月二十一日校則を制定す。
- 一 明治四十四年四月一日成田中學校教諭中島喜一校務主監兼教諭に任せらる。
- 一 明治四十四年四月一日、二日の兩日を以て二・三・四年の編入試験を行ふ。
- 一 明治四十四年四月五日合格者八十四名に入學を許可し、



- これを本科第四年以下に編成し、同日始業式を行ふ
- 明治四十五年三月第一回卒業生を出し、千葉縣知事臨席す。
- 大正元年十一月増築の講堂兼雨天體操場・理科教室・普通教室等竣工す。
- 大正二年九月校務主監兼教諭中島喜一休職を命ぜらる。
- 大正二年十月、理學士菅野皆可校務主監兼教諭に任せらる。
- 大正六年十一月菅野校務主監休職を命ぜらる。
- 大正六年十一月文學士中村安之助校務主監兼教諭に任せらる。
- 大正八年十月中村校務主監死去。
- 大正八年十二月文學士矢野太郎校務主監兼教諭に任せらる。
- 大正十二年十二月矢野校務主監依願解職。
- 大正十三年一月校主兼校長石川大僧正御遷化。
- 大正十三年二月成田山貫首荒木大僧正校主の認可を受く
- 大正十三年二月文學士笹川種郎校長に任せらる。
- 大正十三年五月元神奈川縣立横濱第一中學校教諭佐藤國二校務主監兼教諭に任せらる。
- 大正十四年三月笹川校長辭任。
- 大正十四年三月校務主監兼教諭佐藤國二校長兼教諭に任せらる。

- ぜらる。
- 大正十四年四月笹川前校長本校顧問となる。
- 大正十四年七月理事小野寺精三郎死去。
- 昭和二年三月校主荒木大僧正を名譽校長に推戴す。
- 昭和二年四月理事三橋重郎兵衛病氣辭任す。
- 昭和十三年三月理事制を廢止す。
- 昭和十六年三月第三十回卒業生五千三百三名を出す、これを以て卒業生累計一千八百八十名となる。

### 第貳 設備並びに施設

#### 一 設備

校地坪數	一	校舎建物坪數	三	設備(校舎ハ木造二階建)	三
室名	數	坪數	室名	數	坪數
普通教室	四	八一・五〇	校長室	一	八・七五
職員室	一	一一・二五	講堂	一	六〇・〇〇

事務室	一	三・七五	物置	二	一四・〇〇
昇降口	二	一一・五〇	小使室	一	六・二五
家事室	二	二二・〇〇	洗面所	三	三・二五
理科室	一	二二・五〇	便所	三	一〇・〇〇
器械標本室	二	一七・五〇	理裝室	一	三・七五
裁縫室	二	二二・五〇	作法室	一	一五・〇〇
圖書室	一	八・七五	寫眞暗室	一	一〇・〇〇
弓道場	一	一〇・〇〇			

### 二 教育方針

本校の教育方針は、教育勅語の御趣旨を奉戴して其の實行を期し、學業を勵み、淑徳を重んじ、女子たるの本分を遵守せしむるは勿論、特に貞淑・明朗・節制・感謝・勤勞を訓練の要目として、之が良習を養ひ、常に心身の鍛鍊を怠らず、以て將來一家の健全なる主婦たり、母たるの人格を完成することに努めてゐる。

而して生徒の學資に關しては、可成父兄の負擔を軽減することに留意し、學資支辨に困難なる者の爲めには、貸費若く

は補助制度を設け、獎學の爲めには特待生・優等賞・精勵賞等の制をも定め、又學科に於ては、正科の外隨意科目として手藝・插花・茶の湯・按摩を課し、體操科には、薙刀を加へ更に鍛鍊部の一事業として弓道を課して武士道精神を體得せしめ、音楽科にはオルガン數基の外ピアノ二基を備へて、生徒に指導練習せしめ、校歌並びに創立記念日唱歌を制定して本校の理想を明示し、併せて温雅優美の情操を助長せしめることに努めてゐる。

### 三 校則

#### 第一章 總則

- 第一條 本校ノ修業年限ハ本科四箇年トス
- 第二條 生徒定員ハ二百人トス
- 第三條 休日ハ左ノ如シ
  - 一 祝日、大祭日
  - 二 日曜日
  - 三 皇后陛下御誕辰
  - 四 創立記念日二月十三日
  - 五 夏季休業七月二十一日ヨリ八月三十一日ニ至ル
  - 六 冬季休業十二月二十六日ヨリ翌年一月七日ニ



至ル

第二章 學科課程教授時數

本校ノ學科目ニ編物袋物插花按摩茶ノ湯ヲ加ヘ隨

第五條

學科課程及ビ教授時數左ノ如シ

學科目	學年		第一學年	第二學年	第三學年	第四學年
	時數	每週				
修身	二	二	要人倫作法	同上	同上	同上
公民	六	六	講文習字	同上	同上	同上
英語	三	三	讀方譯字	同上	同上	同上
國語	三	三	讀方譯字	同上	同上	同上
歷史	三	三	本邦地史	外國地理	同上	同上
地理	三	三	本邦地史	外國地理	同上	同上
算學	三	三	珠算	代數	幾何	開平
理科	二	二	植物	生理衛生	化學	物理
圖畫	一	一	自在畫	同上	同上	同上
家事	四	四	縫裁	同上	同上	同上
裁縫	四	四	同上	同上	同上	同上
音樂	二	二	單唱	同上	同上	同上
唱歌	二	二	同上	同上	同上	同上

體操	體育	計	備考
普通體操	三	二九	編物、袋物、插花、茶湯按摩ヲ課外ニ於テ志願者ニ課ス
遊戲	三	二九	
同上	三	三〇	
同上	三	三一	
理論の概要	一		

第三章 入學及退學

- 第六條 生徒募集ハ學校長期日及人員ヲ定メ之ヲ公示スベシ
- 第七條 入學志願者ハ本校所定ノ入學願書ヲ差出スベシ
- 第八條 一學年入學志願者 小學校長ノ内申ニ基ヅキ口頭試問及身體検査ニ依リテ之ヲ檢定ス
- 第九條 前條ノ試問ハ國民學校初等科卒業程度ニ依リテ之ヲ行フ
- 第十條 他校ヨリ轉入學ヲ願出デタル者ニハ缺員アル時ニ限り人物學力ヲ檢定ノ上許可スルコトアルベシ
- 第十一條 入學ヲ許可セラレタル者ハ在學證書ニ戶籍謄本ヲ添ヘテ差出スベシ

第十二條

- 第十三條 保證人ノ住所學校所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在ルトキハ一里以内ニ住所ヲ有シ一家計ヲ立ツル者ヲ以テ代理保證人ト定メ保證人連署ノ上之ヲ學校長ニ届出ヅベシ
- 第十四條 學校長ハ必要ト認ムルトキハ保證人又ハ代理保證人ヲ變更セシムルコトアルベシ
- 第十五條 保證人若クハ代理保證人住所氏名ヲ變更シ又ハ改印シタル時ニハ直チニ學校長ニ届出ヅベシ



- 第十六條 生徒退學セントスルトキハ其理由ヲ記シ保證人連署ノ上學校長ニ願出ヅベシ
- 第十七條 生徒病氣其ノ他止ムヲ得ザル事由ニ由リ三ヶ月以上出席シ難キ時ハ期間ヲ定メ休學ヲ願出ヅルコトヲ得  
但シ一ヶ年ヲ超ユルコトヲ得ズ
- 第四章 修了及卒業  
第十八條 各學科ノ課程ノ修了又ハ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ學業成績ヲ考査シテ定ムベシ
- 第十九條 卒業證書及修業證書ハ所定ノ形式ニ依ル
- 第五章 授業料及入學料  
第二十條 一 授業料ハ月額金額參圓トシテ毎月十日迄ニ之ヲ納メ特ニ其期日ヲ指定シタル時ハ其當日納ムベシ  
但シ毎年八月ハ之ヲ徵收セズ  
二 入學志願者ハ入學考査料金壹圓ヲ納付スベシ
- 第六條 賞 罰  
第二十一條 入學料ハ金壹圓トシテ入學許可ノ際ニ之ヲ徵收ス
- 第二十二條 品行方正學術優秀ナル者ハ特待生トシテ授業料ノ全部又ハ一部ヲ免除シ若クハ賞品褒狀ヲ與フ
- 第二十三條 學校長ハ左ノ各項ニ該當スル者ニハ退學ヲ命ズ  
一 品行不良ニシテ改善ノ見込ナシト認メタル者

- 二 成業ノ見込ナシト認メタル者
- 三 出席常ナラザル者
- 第廿四條 規則命令ニ違背シ學校ノ風紀ヲ害スル者ハ其ノ輕重ニ依リ戒飭停學又ハ退學ニ處ス
- 第廿五條 生徒取締ニ關スル規定ハ學校長之ヲ定ム
- 第七章 附 則  
第廿六條 本校則施行ニ關スル細則及ビ其ノ他必要ナル内規ハ學校長之ヲ定ム

### 四 昭和十五年度行事概要

- 四月  
六日 入學式並ニ始業式式後新入生父兄會。伊藤教諭麻生教諭、海寶教諭心得、新任披露式。  
二年級以上級長選舉。  
七日 成田小學校ニ於ケル成田町在郷軍人會令旨傳達式ニ參列。  
八日 三木教諭新任披露。午後本校講堂ニ於ケル新更會主催「花祭」ニ參列  
校友會各部委員選舉  
九日 成田中學校堀口教諭本校囑託トシテ英語ヲ擔任

- 十三日 三里塚ニ遠足雨ノタメ中途ニテ歸校ス
- 十五日 三里塚ニ遠足、牧場見學
- 十六日 種痘施行
- 十八日 午後四年生小學校ニ於ケル母ノ會講演會ニ參列  
聽講
- 二十日 自治會、運動部、文藝部、各委員任命  
全生徒通學地區別ニ編制、地區別委員任命  
課外運動並ニ授業開始
- 廿二日 靖國神社臨時大祭ニツキ休業
- 廿五日 天長節、宮中喪中ニツキ敬休
- 三十日 成田小學校ニ於ケル在郷軍人會ノ講演會ニ參列聽講(午後)
- 五月  
一日 興亞奉公日  
不動尊、埴生神社參拜、戰歿勇士ノ墓參、慰問文發送
- 二日 四年級會
- 三日 校友會、全役員會
- 四日 自治會總會
- 十二日 成田中學校庭ニ於ケル第六回日本體操大會紀元二千六百年奉祝會ニ參加
- 十五日 身體檢査

- 勤勞奉仕隊編制
- 十六日 十八日、廿日、興亞道路工事ノ勤勞奉仕
- 廿一日 午後海軍中佐澤田倉三氏ノ講演アリ全生徒聽講
- 廿二日 青少年學徒ニ賜リタル勅語記念日ニツキ左ノ行事ヲナス不動尊及埴生神社參拜、勅語捧讀式。海軍講話、運動競技會舉行
- 廿四日 二、三年、日光方面修學旅行ニ出發
- 廿五日 二、三年、日光ヨリ歸還
- 廿七日 海軍記念日講話
- 六月  
一日 興亞奉公日、不動尊、埴生神社參拜、戰歿勇士ノ墓參  
本日ヨリ二日間、第一學期中間考査
- 四日 本日ヨリ五日、七日、八日ノ四日間宮内省下總牧場ニ勤勞作業
- 十一日 三年、入隊兵歡送
- 十二日 四年、關西旅行ニ出發  
入隊兵歡送二年
- 十七日 成田小學校ニ於ケル印旛郡聯合青年團主催ノ講演會ニ三年午後參加聽講
- 十九日 四年關西ヨリ歸還  
「ラジオ」ニヨリ



- 秩父宮殿下ノ紀元節ノ勅語捧讀ヲ拜聽ス
- 關西旅行報告會
- 廿一日 一年谷津海岸遠足
- 廿二日 勤勞作業部隊編制
- 廿四日 農家出身生徒自宅ニテ勤勞作業、他ノ生徒ハ道路工事勤勞奉仕
- 廿五日 農繁自宅勤勞並ニ道路勤勞奉仕
- 廿六日 滿洲國皇帝御訪帝都ニ關スル講話、三年以下旅行報告會
- 校內新弓道場開
- 廿七日 農家生徒農繁自宅勤勞、他ハ普通授業
- 廿九日 午後、三、四年生小學校ニ於ケル戦歿兵士ノ町葬ニ參列
- 七月
- 一日 興亞奉公日、不動尊、埴生神社參拜、戦歿勇士ノ墓參
- 三日 興亞道路勤勞作業、農家生徒自宅作業
- 四日 滿洲建設勤勞奉仕隊女子青年隊員出發ヲ成田驛ニテ歡送ス
- 七日 支那事變第三週年記念日  
講堂ニ於テ記念講話  
自治會委員會開催、慰問袋慰問文發送、出征兵士

- 八日 家族並ニ戦歿將兵遺族慰問ニ關シ議定ス
- 十三日 本日ヨリ三日間第一學期末考査
- 十九日 慰問文ノ作製
- 廿一日 第一學期終業式
- 廿二日 本日ヨリ月末マデ學力補充授業
- 廿九日 成田町在郷軍人分會總會ニ參列
- 八月
- 一日 興亞奉公日、不動尊、埴生神社參拜
- 四日 四年級本日ヨリ三日間新更會講習聽講
- 五日 三年以下校外外並ニ公園清掃作業
- 六日 慰問袋ノ調製發送
- 七日 耐熱強行遠足、山口ヨリ公津新田、甚兵衛渡、宗吾、末廣農場日吉倉ヲ經テ歸校
- 九月
- 一日 成田町主催時艱克伏町民大會ニ參列
- 二日 不動尊、埴生神社參拜
- 第十二日 自治總務委員會
- 十七日 午後日本防空婦人會長女子高等學院長松平俊子夫人ノ講演アリ
- 廿八日 日獨伊三國同盟條約成立ニ關シ詔書捧讀並ニ訓話

- 十月
- 一日 興亞奉公日、不動尊、埴生神社參拜、第三次防空訓練實施
- 二日 本校防空組織編制、防空講話
- 四日 四年消火演習
- 五日 全校防空訓練
- 午後成田中學校白石中尉ノ防空講話
- 防空演習實施
- 小學校庭ニ於ケル防火演習見學
- 六日 弓道場新築記念競射會
- 八日 午後赤井嶽常福寺院代上野賴榮氏ノ講演聽講
- 九日 國民進軍歌總練習
- 十日 軍人援護ニ關スル勅語捧讀式並ニ講話
- 十一日 三里塚農村道場見學遠足
- 十二日 講堂ニテ映畫會開催
- 十三日 成田町主催、大政翼賛會三國結盟記念式ニ參列
- 十八日 靖國神社臨時大祭休業
- 十九日 孝明天皇ヲ平安神宮ニ奉祀ニツキ遙拜式舉行
- 廿日 第十四回運動會
- 廿八日 本日ヨリ二日間第二學期中間考査
- 卅日 教育勅語換發五十週年記念式舉行
- 十一月

- 一日 興亞奉公日、不動尊並ニ埴生神社參拜、戦歿勇士墓參
- 三日 明治節祝賀式舉行、體操祭
- 四日 四年就職ニ關スル講話聽講
- 十日 皇紀二千六百年祝典舉行
- 十六日 成田町祝典ニ參加旅行列街頭行進ヲナス
- 成田中學校教練查閱見學
- 東京帝國博物館ニ於ケル正倉院御物拜觀
- 十一月
- 二日 不動尊、埴生神社參拜、戦歿勇士ノ墓參
- 三日 四年生午後新更會講演會ニ臨ム
- 五日 故西園寺公望公國葬ニツキ追悼式舉行
- 六日 四年級、滿洲國義勇軍女子指導員歡送
- 七日 映畫會ヲ講堂ニテ開催
- 十六日 三年、應召兵歡送
- 十七日 二年、應召兵歡送
- 十八日 本日ヨリ三日間學期末考査
- 廿四日 第二學期終業式
- 大祓ノ祭事執行
- 廿五日 戦歿勇士ノ遺骨ヲ迎フ
- 廿七日 午後戦歿勇士ノ町葬ニ參列
- 昭和十六年一月



- 一日 午前十時ヨリ新年祝賀式
- 八日 始業式、不動尊、埴生神社参拜
- 九日 四年、一年入營兵歡送、戦歿勇士募参
- 十日 全校新勝寺ニ年賀ノ挨拶言上、前校主故石川大僧正ノ募参
- 十五日 午後ヨリ成田小學校ニ於ケル讀賣新聞社主催婦人新體制講演會ニ全校聴講
- 十七日 三年入營兵歡送
- 廿三日 同窓會幹事會開催第三十週年記念式ニツキ協議
- 卅一日 午後講堂ニテ映畫會開催、二年入營兵歡送、故石川大僧正ノ募参
- 二月
- 一日 興亞奉公日、不動尊、埴生神社参拜、戦歿勇士ノ募参
- 七日 校友會雜誌配布  
講演會 講師 石田圭秀氏
- 十一日 紀元節祝賀式舉行  
成田町主催建國祭ニ参加
- 十三日 第一時創立三十週年記念式舉行
- 十四日 午後全校種痘施行
- 十八日 一年級入營兵歡送
- 十九日 四年級軍屬歡送

- 廿二日 歩兵學校戰車學校見學
- 廿四日 四年級千葉裁判所見學
- 廿七日 弓道部、稻荷祭ノ弓道會 出場
- 三月
- 一日 興亞奉公日、不動尊、埴生神社参拜、戦歿勇士ノ募参
- 三日 四年級、學年末考査
- 四日 全學年學年末考査
- 五日 四年級、考査終了、四年級、新更會館ニ一夜講習ヲ開ク
- 六日 午前十時半ヨリ地久節祝賀式
- 八日 入學考査、身體檢査、運動能力査定
- 九日 入學考査、口頭試問
- 十一日 陸軍記念日講話
- 十三日 入學許可者六十名氏名發表
- 十四日 四年級豫餞會
- 十八日 第三十回卒業式舉行、卒業生謝恩會
- 十九日 新卒業生及職員不動尊本堂ニ於テ謝恩大護摩修業
- 二十日 本日ヨリ二日間三年級以下學年末考査
- 廿七日 三年級以下終業式  
中野教諭小山囑託辭任ニツキ送別式

### 五 一般的施設

學校長は職員を統率して分擔を定め、校務を執行し、併せて、生徒教養上に効果あらしむる爲め、左の施設を行つてゐる。

- 一、校務
  - 1 教務部 (教授・訓練・指導・監督・調査・研究・衛生・統計等)  
教務主任 教務係・學級主任・學科主任
  - 2 事務部 (庶務・會計)  
書記
- 二、校友會
  - 1 文藝部  
役員 部長(教諭)・委員(各級生徒各二人)  
事業 學藝會・談話會・講演會・展覽會・圖書閱覽・映畫會・雜誌發行
  - 2 運動部
    - イ 庭球部
    - ロ 籠球部
    - ハ 卓球部
    - ニ 弓道部

- 3 園藝部  
役員 部長(教諭)・委員(各級生徒各二人)  
事業 花卉栽培
- 三、自彊會  
訓育を補成し、校風の改善を圖る爲め、職員指導の下に生徒をして之を組織せしめ、學習・運動・清潔・整頓・禮儀規律につき其の改善を圖らしめてゐる。

- 1 總務部  
委員 (第四學年中より十人)  
一般に關する事項の調査立案をなし、學級部に指令してゐる。
- 2 學級部  
委員 (各級各七人)  
總務部の指令により其の實行を期す。委員は報國團長の任命とす。
- 四、課外教授  
第三學年の初に志望を調査し、上級學校進學者及び一般學力不足者には國語・英語・數學の課外教授を行つてゐる。
- 五、遠足旅行



- 六、 每學期中、大小の遠足を行ふ
- 七、 家庭連絡  
主として通知簿を利用し、時に父兄會を催し、必要に應じて父兄の來校を求め或は家庭を訪問してゐる。
- 八、 朝會拜禮  
每朝始業前講堂に於て朝禮の際、先づ正面に奉祀せる皇大神宮に拜禮して、臣子の誠を捧げることにしてゐる。
- 九、 參拜、年賀、墓參  
興亞奉公日には不動尊及び埴生神社に參拜し、戰歿勇士の墓參をし、每學期始業日には不動尊に參拜する。  
年頭始業日には新勝寺に參賀し、當日及毎月末日には故校主石川大僧正の墓前に燒香する。
- 一〇、 大護摩修行及び坊入  
報恩感謝の誠意を表するため、卒業式翌日不動尊に參詣大護摩修行をなし、ついで新勝寺に謝恩の挨拶をなす。

### 六 時局對應施設

時局に關しては、常に訓話・揭示その他により認識を高めて來たが、本年度中實施せる主なる事項を記せば、次の通である。

- 一 訓話・事變寫眞・畫報・ポスター等揭示
- 一 不動尊・埴生神社參拜
- 一 戰車學校・歩兵學校及裁判所見學
- 一 陸軍病院慰問
- 一 陸海軍恤兵部に慰問袋献納、郷土部隊に毎月慰問文を送る
- 一 本校國民貯蓄組合貯蓄金増額
- 一 三里塚御料牧場・成田公園・興亞道路等に集團勤勞奉仕
- 一 公津新田甚兵衛渡、末廣農場に強行遠足
- 一 戰病死者の墓參並に遺族慰問
- 一 出征家族の慰問並に幫助
- 一 縣及郡内戰歿者慰靈祭に參列
- 一 町内戰歿者の町葬參列
- 一 出征入營兵士の歡送
- 一 成田町軍人援護奉公會に金四拾圓寄附
- 一 成田町主催大政翼賛會三國結盟記念式に參列

### 第參 生徒 狀況

#### 一 年度別郡別卒業生數

年度別	郡別											計			
	印旛	香取	山武	千葉	市原	東葛飾	匝瑳	海上	長生	夷隅	君津		安房	他府縣	
明治 四四	一〇														一〇
四五	七		一												一二
大正 二	一九								一						二一
三	二〇	一								一					二八
四	二二	二													二六
五	二五												三		二九
六	二三	一													二七
七	二一														三二
八	二九														三一
九	一九	一													二六
一〇	二八												五		三八







成田町北羽	成田町安食	成田町東町	成田町上町	安食町安食	八生村大竹	成田町奥山	香取郡小御門村	遠山村山ノ作	安食町安食	成田町土屋	成田町土屋	成田町花崎	山武郡千代田村	成田町土屋	成田町仲野	成田町花崎	中郷村野毛	成田町東町	成田町大森	成田町花崎	成田町幸町		
内海幸江	野口八枝	桑原美代子	山内榮子	山田道子	山田春江	丸山綾子	藤崎光子	古川スミ	小石川淑江	後藤君子	江上よね子	寺内陽子	新井綾子	麻生欣	佐久間こ	坂本敦子	櫻井信子	澤田正子	三橋節子	芝倉花子	椎名喜久惠	清水悦子	杉山久江
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一四、三、一〇	一三、二、一五	一三、三、一六	一三、一〇、三	一三、二、一七	一四、三、一六	一四、二、一四	一三、四、一五	一三、八、一七	一四、一、一	一三、三、一	一四、一、一七	一四、三、一〇	一三、一、一	一三、六、一〇	一三、九、一	一三、九、一	一三、二、一	一三、三、一	一三、三、一	一三、一〇、一	一三、二、一	一四、一、一	一三、九、一
進	同	進	同	同	同	進	同	同	同	同	同	進	進	進	進	進	進	進	進	進	進	進	進
學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學	學

### 三 本年度卒業生の卒業後狀況調

(昭和十六年五月末調)

各種學校入學者 三二一  
 職業従事者 八  
 其他 一三  
 計 五三

### 四 本年度卒業生の各種學校入學調

(昭和十六年四月末調)

千葉市 千葉高等女專攻科	伊藤美代
東京市 大森區榮養學校	岩澤な
東京市 渡邊女子專門學校洋服專科	池田百合
東京市 實踐女子專門學校技藝科	市川安子
千葉市 千葉縣女子師範二部	板橋淑子
千葉市 千葉縣教育會教員講習科	板橋眞利
東京市 日本高等洋裁學院	本多ソメ

### 五 學級數並びに生徒數

(昭和十六年四月末現在)

學年	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	計
數	一	一	一	一	四
學級數	一	一	一	一	四
生徒數	六〇	五九	五一	五六	二二六

### 六 各學年別生徒氏名

(昭和十六年四月末現在)

伊藤富子	遠山	池田充富
伊藤芳子	成田	石井富
市川文子	同	石橋敬子
井田妙子	同	石原てる子
磯山敏子	公津	飯塚ゆり
稻垣かつ子	成田	波木保子
井上芳枝	遠山	戸村トシ
		大森古

◎級長 ○副級長 △校友會委員 □自彊會委員  
 第一學年(六十名)  
 主任 齋藤好雄  
 小倉治子

千葉市 千葉縣女子師範二部	大木八重
東京市 代々木山谷町神宮家庭寮	岡野みさ
千葉市 千葉縣女子師範二部	荻原志津
東京市 日本高等洋裁學院	渡邊照
千葉市 千葉縣女子師範二部	渡邊庸
東京市 タイピスト女學校	渡邊良
東京市 實踐女子專門學校家政科	梶谷み
東京市 日本赤十字看護婦養成所	梶谷久
千葉市 土岐裁縫女學校	香取伊
千葉市 千葉縣教育會講習所	海保あ
東京市 日本女子高等商業學校	内海幸
東京市 戸板裁縫學校家庭科	野口八
東京市 東洋音樂學校	山内榮
東京市 日本女子高等商業學校	山田道
東京市 共立女子專門學校本科	山田春江
佐倉町 大石裁縫女學校	古川ス
東京市 日本高等洋裁學院	小石川淑
千葉市 千葉縣教育會教員講習所	後藤君
東京市 中央工學校女子製圖科	江上よ
東京市 中野保姆養成所	新井綾
千葉市 土岐裁縫女學校	櫻井信
千葉市 千葉高女專攻科	三橋節
佐倉町 大石裁縫女學校	清水悦



大増貞子 八生  
大須賀洋子 安食  
小川ヨシ 成田  
小川もと 山代郡  
小川しげ 千代郡  
小川和子 成田  
小倉昭代 成田  
小野寺きく 成田  
若林みつ 富里  
片山愛子 成田  
神尾禮子 成田  
神崎ふみ子 成田  
神崎美奈子 遠山  
吉岡久子 遠山  
谷静江子 中津  
立花美代子 富里  
田谷サト子 成田  
内田孝子 山代郡  
宇井久子 成田  
鶴澤みわ子 成田  
野宮豊子 成田  
山田郁子 成田  
山田和子 八生

山本多英子 安食  
藤江千恵子 安食  
後藤ゆき子 安食  
後藤よ子 安食  
江口あい子 成田  
秋山幸子 遠山  
齋藤幸子 木下  
北澤政代 布下  
木内ふみ子 成田  
金崎瑠璃子 成田  
宮崎瑠璃子 成田  
椎名ミヨ子 大森  
篠田菊子 中津  
島村房子 成田  
東野明子 成田  
平野和子 成田  
平山和子 成田  
關川静枝子 成田  
鈴木昌子 遠山  
鈴木ケ子 遠山  
鈴木清子 成田  
鈴木志津子 成田  
鈴木志津子 同下

第二學年(五十九名)

岩館初代 久住  
岩館とみえ 中郷  
岩澤てる 中郷  
岩井麗子 富里  
伊藤邦子 木下  
石橋てる 成田  
石井千恵子 成田  
石井千恵子 成田  
飯塚芳子 成田  
飯嶋けい子 成田  
幡谷ゆた子 八生  
原俊子 成田  
萩原よし子 成田  
長谷川禮子 山代郡  
堀口文子 成田  
野老あさ子 成田  
小田垣千恵子 成田  
大野節子 成田  
大木住子 成田  
及川澄子 成田

主任

海寶愛次郎 酒々井  
小倉サト子 成田  
渡邊和子 成田  
川島貞子 布下  
河合和子 神代郡  
加藤タカ子 成田  
加藤コト子 成田  
加藤明子 成田  
加藤久子 成田  
加藤昌子 成田  
梶谷昌子 成田  
神田よし子 成田  
多田きみ子 成田  
葛生和子 成田  
倉波照子 中津  
山崎き江子 遠山  
山本ちか子 安食  
山本宜世子 安食  
山本富久枝子 成田  
藤崎知子 成田  
藤崎恭子 成田  
藤崎光以子 成田  
藤崎光以子 成田

第三學年(五十一名)

藤崎久富里  
福田美代子 大森  
榎田トク子 成田  
河波崎たみ子 久住  
麻生よし子 遠山  
秋葉歌子 成田  
齋藤文子 成田  
齋藤博子 成田  
澤田正子 布下  
坂本晶子 成田

笹川稱枝 山代郡  
三品あや子 山代郡  
清水範子 千代郡  
檜垣朝江子 成田  
日暮コウ子 久住  
日暮美知子 中郷  
菅澤たつ子 成田  
鈴木正枝子 遠山  
鈴木みよ子 富里  
鈴木みよ子 安食

主任

岩澤良子 遠山  
伊藤智子 木下  
伊藤久榮子 成田  
伊藤久榮子 成田  
稻垣タカ子 成田  
飯田千鶴子 木下  
飯田和子 遠山  
飯倉喜久江子 成田  
服部福子 成田  
長谷川悦子 成田

伊藤と倉三志 成田  
大友恭子 成田  
大友恭子 成田  
小川五子 千代郡  
小川五子 成田  
岡田喜美子 成田  
土肥きみ子 本郷  
土井初子 成田  
鳥居ふく子 成田  
細矢静子 成田  
細矢静子 成田

第四學年(五十六名)

大見川タケ 中郷  
大野智恵子 安食  
渡部節子 大森  
若松てる子 茨城  
川村禮子 山代郡  
梶谷みち子 遠山  
梶谷みち子 安食  
吉岡貞子 本郷  
高橋俊江子 成田  
高岡みね子 成田  
多田明子 遠山  
武内牧子 遠山  
永井恒子 安食  
中島暢子 富里  
武藤徳子 永治  
黒川治子 成田  
黒川治子 成田  
山田美子 成田

主任

山田くに 八生  
山田昭子 八生  
後藤晃子 八生  
山柳美代子 成田  
浅野まづ子 成田  
會田富佐子 成田  
櫻田久子 成田  
櫻田久子 成田  
君塚照子 成田  
湯淺直子 成田  
三橋鳩世子 成田  
三橋鳩世子 成田  
森田美英枝子 永治  
清宮くみ子 成田  
諏訪原ゆき子 成田  
須藤誓子 成田  
鈴木瑞枝子 成田  
石橋康枝子 成田  
石橋康枝子 成田







中島喜一(校務主監) (明治四十四年四月—大正二年九月)  
 菅野皆可(同) (大正二年十月—大正六年十一月)  
 中村安之助(同) (大正六年十一月—大正八年十月)  
 矢野太郎(同) (大正八年十二月—大正十二年)

笹川種郎(校長) (大正十三年二月—大正十四年十二月)  
 佐藤國二(校務主監) (大正十三年五月—大正十四年三月)  
 笹川種(郎顧問) (大正十四年四月—現在)  
 佐藤國二(校長) (大正十四年三月—現在)

### 第五職 員 (昭和十六年四月現在)

受持學科	職名	氏名	原籍	就職年月日
修身 國語・歴史 英語・公民・教育・歴史 圖畫・習字 數學・物理 裁縫	校長 顧問 文學博士 校長兼教諭 教諭 教諭 教諭 教諭	荒木照定 笹川種郎 佐藤國二 平野太 三野重雄 齋藤好雄 伊藤倉三 大木と志	千葉縣 東京府 新潟縣 千葉縣 群馬縣 千葉縣 千葉縣 千葉縣	大正十三年二月 大正十三年二月 大正十三年五月 昭和十三年六月 昭和十三年四月 昭和十三年四月 昭和十三年四月 昭和十一年四月
裁縫・作法 國語・歴史 家事・化學 體操 地理 博物・地理 音樂 插花・茶道 按摩 弓道	教諭 教諭 教諭 兼教諭心得 兼教諭心得 囑託教師 同 同 同 同 學校醫(齒科)	小倉治子 圓城悅子 石井津枝 麻生百合子 神尾純 海寶愛次郎 岡崎政子 櫻井文吉 櫻井文吉 酒井泰作 布施明治郎 山內平治郎 三須重五郎	千葉縣 千葉縣 千葉縣 千葉縣 千葉縣 千葉縣 千葉縣 千葉縣 千葉縣 千葉縣 千葉縣 千葉縣 千葉縣	昭和十三年十二月 昭和十六年四月 昭和十四年四月 昭和十五年四月 昭和十五年四月 昭和十五年四月 昭和十五年四月 昭和十五年四月 昭和十五年四月 昭和十五年四月 昭和十五年四月 昭和十五年四月 昭和十五年四月

### 經費

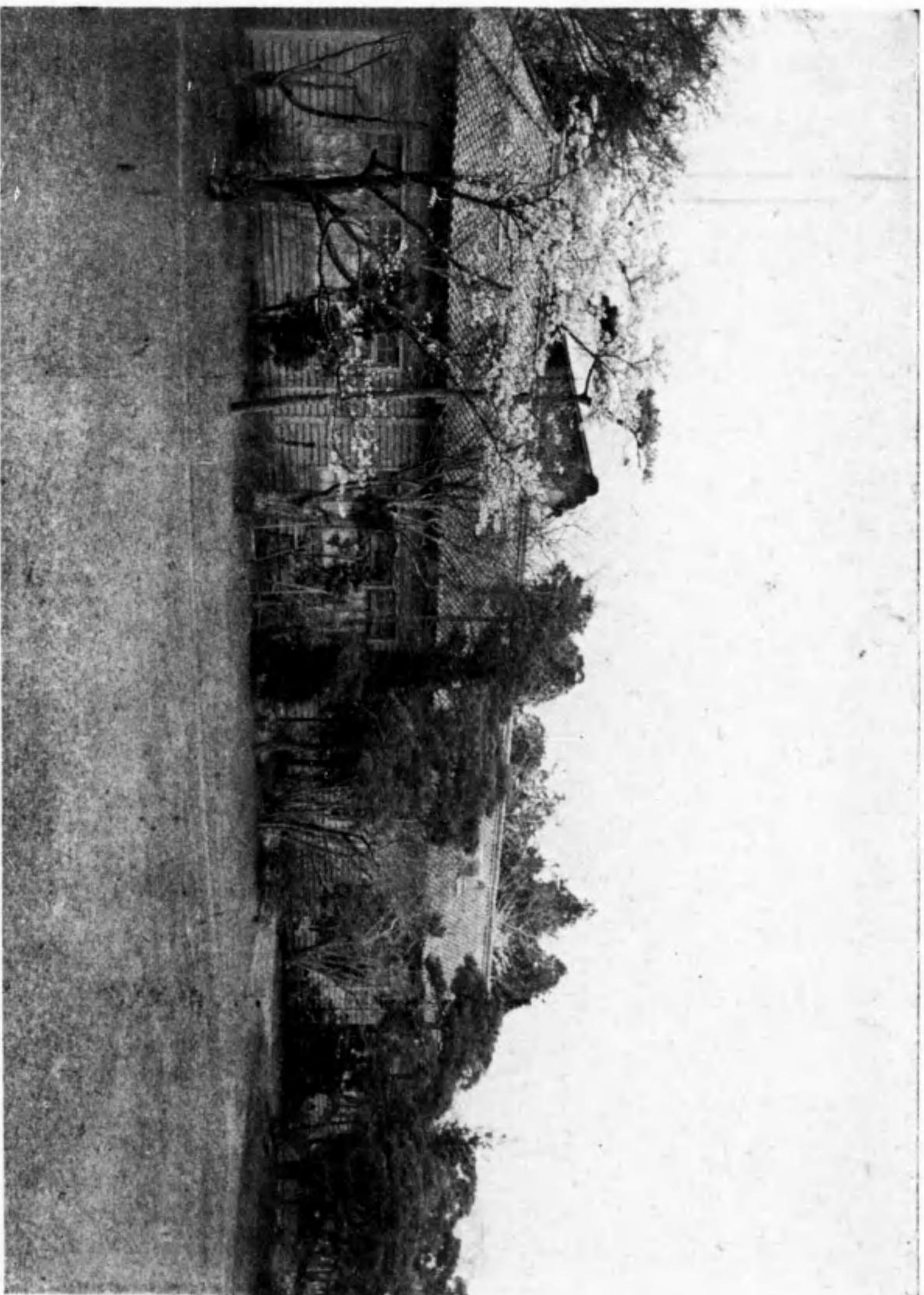
本校に於ける昭和十五年度經費決算は次の通りである。

昭和十五年度決算	俸給	雑給	校費	修繕費	退職給與金 死亡贈金	計
一五、四六〇・〇	六、〇七〇・〇	六、三三三・三	三、〇六六・元	九、九七〇・元	二、三七八・三	



成田幼稚園





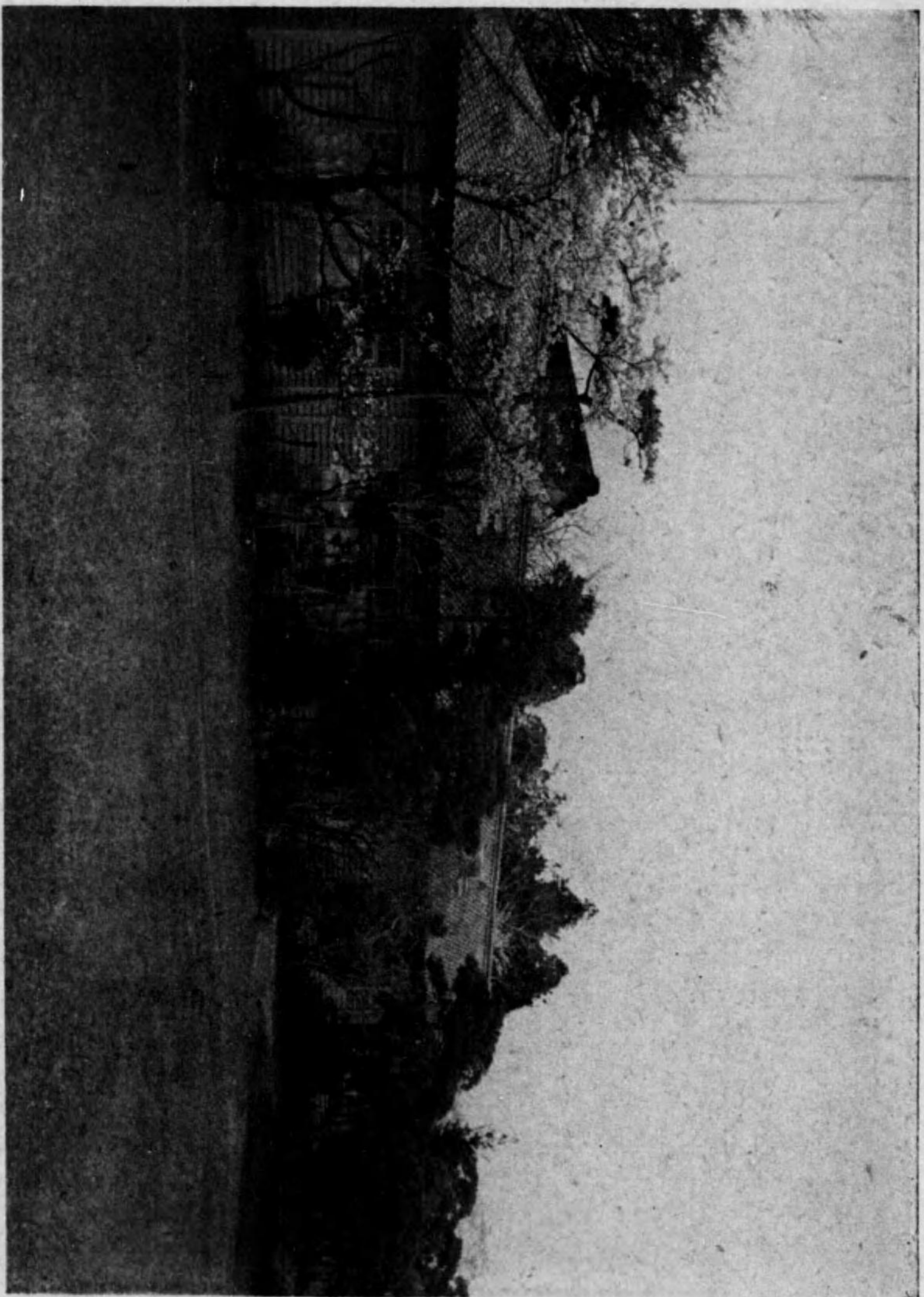
成田幼稚園

寫眞  
成田幼稚園々歌  
昭和十五年成田幼稚園一覽

第壹 位置並びに沿革	六三頁
一 位置	六三
二 沿革	六三
第貳 設備並びに保育	六四
一 設備	六四
二 保育方針	六四
三 園則	六四
四 保護心得	六六
五 年中行事	六七
六 保育の状況	六七
七 保育の施設	六八
第參 園児状況	六九
一 年度別終了兒數	六九
二 本年度入退園調	七一
三 本年度修了兒氏名	七一
四 各組別園児氏名と保護者	七二
第肆 歴代園主・園長・主任	七四
第伍 職員	七五
第陸 經費	七五



園 稚 幼 田 成

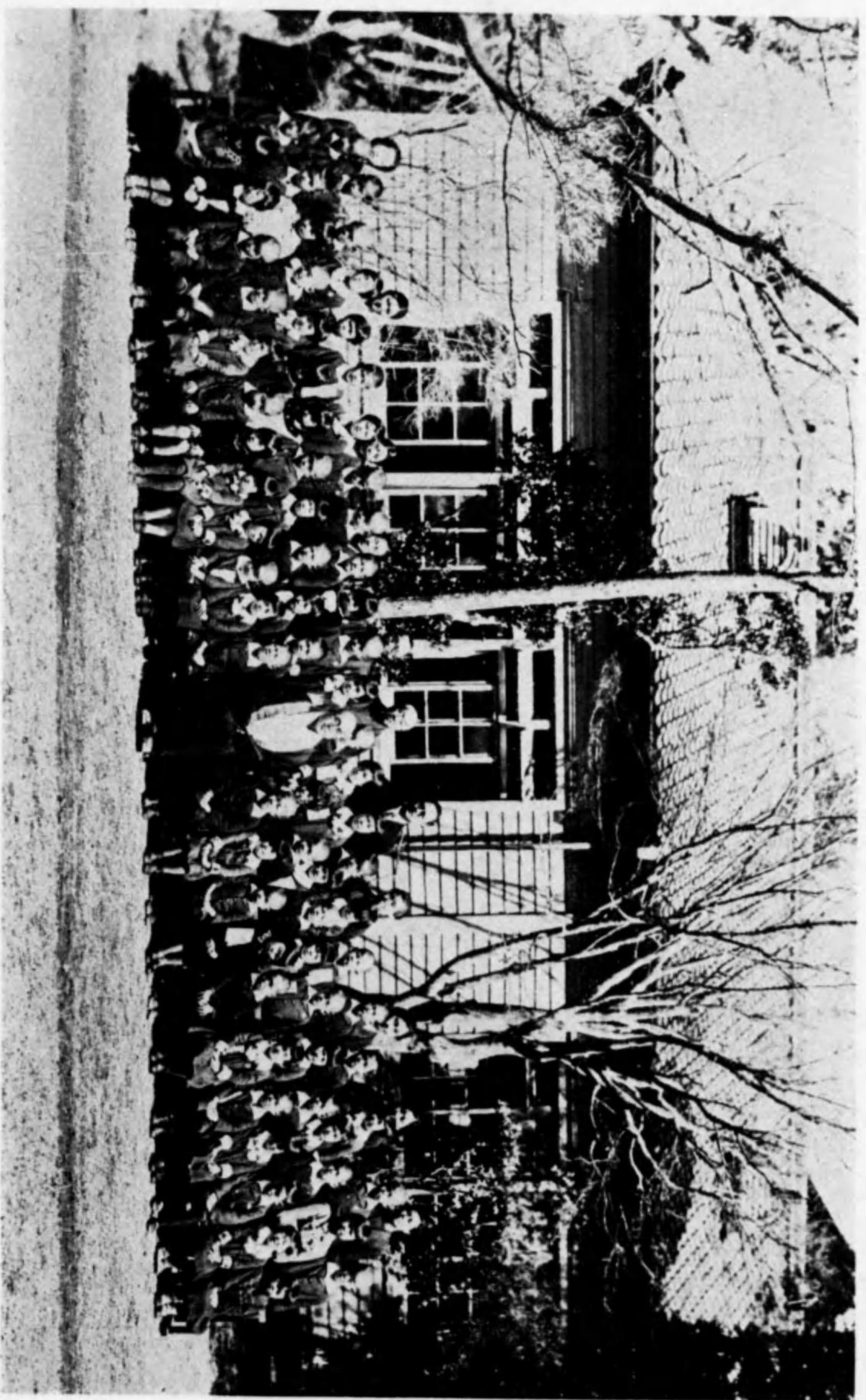


寫 眞  
成田幼稚園々歌  
昭和十五年成田幼稚園一覽

目 次

第一 位置並びに沿革	六三頁
第二 沿革	六三頁
第三 設備並びに保育	六四頁
第四 保育方針	六四頁
第五 園 則	六四頁
第六 保護心得	六六頁
第七 年中行事	六七頁
第八 保育の状況	六七頁
第九 保育の施設	六八頁
第十 園児状況	六九頁
第十一 年度別終了児數	六九頁
第十二 本年度入退園調	七一頁
第十三 本年度修了児氏名	七一頁
第十四 各組別園児氏名と保護者	七二頁
第十五 歴代園主・園長・主任	七三頁
第十六 職員	七三頁
第十七 經費	七五頁





(月三年六十和昭) 生丁修回六十三第

## 成田幼稚園々歌

大和田建樹氏作歌  
小山作之助氏作曲

御寺の山をあげ暮に

見わたす成田の幼稚園

園に生ひたつ撫子の

花にめぐみの露しげし

我等も日々に集りて

雲雀となりて謠はまし

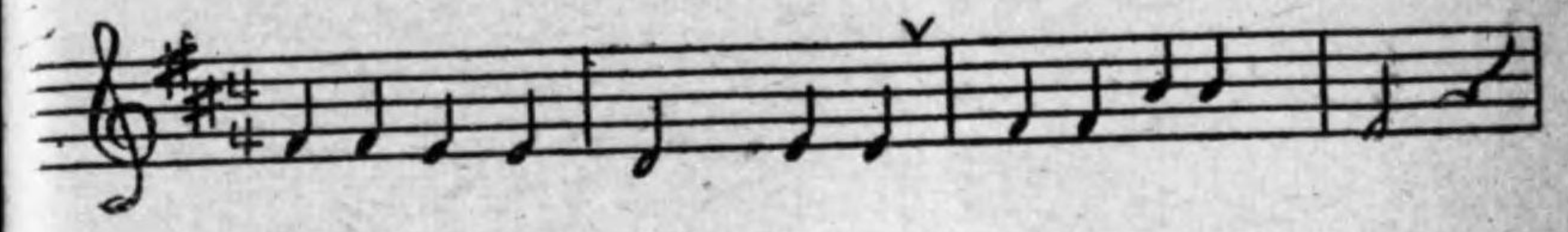
その、恵の嬉しさを

御世の恵のたのしさを



# 昭和十五年成田幼稚園一覽

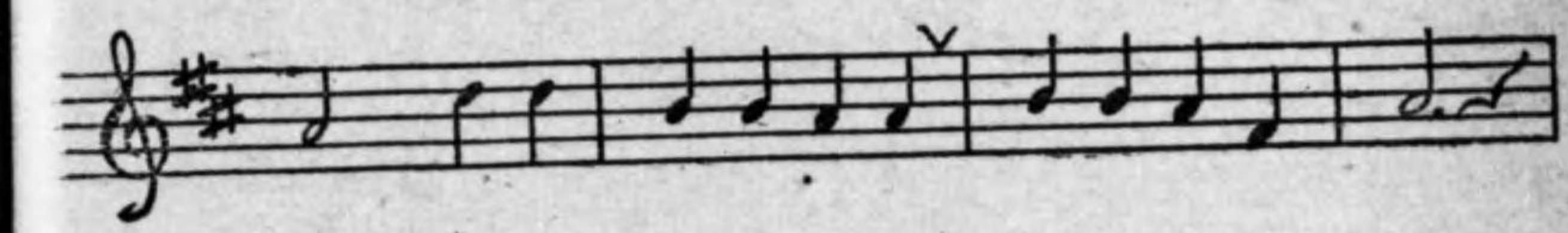
位置	沿革	設備	目的	入園	保育	施設
千葉縣印旛郡成田町成田六百四十七番地、省線並京成成田驛ヨリ凡ソ三町ノ距離ニ在ル高燥閑雅ノ地 (電話成田五九番)	本園ハ成田山ノ經營ニ屬スル幼兒保育ノ教育事業ニシテ明治三十八年六月成田尋常小學校内ニ開園、同時ニ前貫首故石川僧正園主並ビニ園長トナル、同三十九年六月現地ニ園舎新築移轉、大正十三年一月園主並ビニ園長示寂、同年二月現貫首荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ園主並ビニ園長トナル、創立以來修了兒ヲ出スコト三十六回、此間主任ノ交迭三名	敷地 三、一八九坪、遊園一、九三〇坪、園舎ハ木造平屋ニシテ保育室四、遊嬉室一、玩具室一、靜養室一、其他各室四アリ、此坪數二五〇坪、外ニ職員住宅並ビニ附屬建物アリ	幼兒ニ對スル心身ノ發達ニ留意シ善良ナル性情ト良習慣トヲ養フヲ主眼トス	滿三歳ヨリ學齡ニ至ル迄ノ幼兒	保育課目ニ唱歌、遊嬉、談話、手技、觀察 訓練的保育 自治心ノ養成 清潔整頓勤勞ノ習慣養成 團體的生活ノ馴致 體育運動ニ自由運動ニ五個聯絡運動具、庭園各種類 自動車、タンク等 情操陶冶ニラジオ、蓄音器、紙芝居、人形芝居等ニ依ル	衛生的施設 園内外ノ清掃、共有具ノ消毒使用 手洗用トシテ藥水使用勵行
修了並 修了了 保育料 保育料	修了了 了了了 了了了 了了了	修了了 了了了 了了了 了了了	修了了 了了了 了了了 了了了	修了了 了了了 了了了 了了了	修了了 了了了 了了了 了了了	修了了 了了了 了了了 了了了
昭 和 十 五 年 度 決 算 額 九、四 四 九、八 七	昭 和 十 五 年 度 決 算 額 九、四 四 九、八 七	昭 和 十 五 年 度 決 算 額 九、四 四 九、八 七	昭 和 十 五 年 度 決 算 額 九、四 四 九、八 七	昭 和 十 五 年 度 決 算 額 九、四 四 九、八 七	昭 和 十 五 年 度 決 算 額 九、四 四 九、八 七	昭 和 十 五 年 度 決 算 額 九、四 四 九、八 七
成田山貫首大僧正 荒木照定 山口政子	成田山貫首大僧正 荒木照定 山口政子	成田山貫首大僧正 荒木照定 山口政子	成田山貫首大僧正 荒木照定 山口政子	成田山貫首大僧正 荒木照定 山口政子	成田山貫首大僧正 荒木照定 山口政子	成田山貫首大僧正 荒木照定 山口政子
現 在 園 數	現 在 園 數	現 在 園 數	現 在 園 數	現 在 園 數	現 在 園 數	現 在 園 數
昭 和 十 五 年 六 月 現 在 組 數 四	昭 和 十 五 年 六 月 現 在 組 數 四	昭 和 十 五 年 六 月 現 在 組 數 四	昭 和 十 五 年 六 月 現 在 組 數 四	昭 和 十 五 年 六 月 現 在 組 數 四	昭 和 十 五 年 六 月 現 在 組 數 四	昭 和 十 五 年 六 月 現 在 組 數 四
女 男 計	女 男 計	女 男 計	女 男 計	女 男 計	女 男 計	女 男 計
三 三 六 計	三 三 六 計	三 三 六 計	三 三 六 計	三 三 六 計	三 三 六 計	三 三 六 計
四 四 八 計	四 四 八 計	四 四 八 計	四 四 八 計	四 四 八 計	四 四 八 計	四 四 八 計
七 七 九 計	七 七 九 計	七 七 九 計	七 七 九 計	七 七 九 計	七 七 九 計	七 七 九 計
一 三 八 七 計	一 三 八 七 計	一 三 八 七 計	一 三 八 七 計	一 三 八 七 計	一 三 八 七 計	一 三 八 七 計



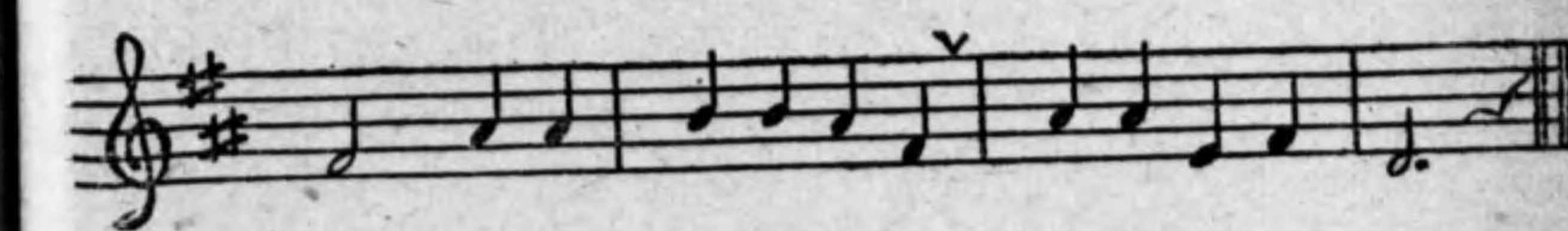
ミテラノ ヤ マヲ アケクレ ニ  
われらも ひ びに あつまり て



ミワダス ナリタノ ヨーチエ ン  
ひばりと なーりて うたはま し



ソ ノ ニ オヒタツ ナデシコ ノ  
そ の めぐみの うれしさを



ハ ナ ニ メグミノ ツユシゲ シ  
み よの めぐみの たのしさを



# 成田幼稚園

## 第壹 位置並びに沿革

### 一 位置

本園は、成田驛を距ること約三町、成田町成田六百四十七番地の高燥なる地に在り、翠巒滴る森に包まれ、人家を離れた閑靜廣潤なる地域を占め、南西北の三面は成田市街に臨み成宗電車を崖下に瞰下し、東部は田圃が廣々と開けて清澄の氣漂ひ、夏は涼しく冬は暖かく、幼児保育の地としては最適の場所である。

### 二 沿革

本園は成田山の經營に係る幼児保育の教育事業であつて、前貫首故石川僧正の慈愛により、明治三十八年六月一日成田尋常小學校に於て開催され、同時に同師本園の園主兼園長となり經營の任に當られた。次いで明治三十八年十月地を向臺に卜し、參千百八十九坪といふ廣潤なる地域を敷地と爲し、

文部省技手服部市太郎氏設計、同川田初太郎氏工事監督の任に當りて同月二十九日新築工事に着手、翌三十九年二月二十八日竣工六月一日移轉、此の日を以て本園の記念日と定め、六月三日盛大なる落成式を舉行した。當日來賓として臨席せられたのは、貴族院議員子爵本莊壽巨閣下、同子爵板倉勝達閣下其他二百七拾餘名であつた。大正十三年一月三十一日石川僧正示寂せらるるや、荒木現貫首代つて園主兼園長に就任した。

而して當時の入園兒は、其の數七十名、木村良主任としてこれが保育の任に當つたが、其の後明治四十年四月より猪狩ゑい、大正三年十月より山口政子主任として保育の任に當りて今日に至つてゐるが、園兒の數も年と共に増加して、現在（昭和十六年四月）は百六十九名となり、創立以來年を重ねること三十六年、明治三十九年三月第一回の修了式を行つて以來、昭和十六年三月第三十六回の修了式までに其の修了兒數は實に壹千參百八拾七名の多きに達してゐる。

又創立以來理事として、石川甚兵衛、三橋重郎兵衛（幹事兼任、大正十四年病氣の爲め辭職）關川博道（園醫兼任昭和五年十二月逝去）の三氏の外、會計主任として、淺井儀助氏



(昭和十年三月病氣の爲辭職、同十三年一月逝去)囑託を受けて就任、園長を補佐されて来たのであるが、昭和十三年四月石川理事は逝去された、今は理事制を廢し六和會に移る。

### 第貳 設備

#### 一 設備

本園は成田町向臺と稱する、緑の森に包まれた三千餘坪の高燥の地に設置された、全國稀に見る幼稚園の稱あり、保育室は南面して、冬期と雖も日光室内に滿つ。北に廊下を控へたれは冬の寒さを防ぎ、夏は涼風を送る。全國みどりの芝生にして、夏季日光の直射を少なくす。數へきれぬ樹木は創立第三十六年を迎へて空高く繁茂して夏のあつさを忘る、又塵も揚らず往來の雑音にも遠ざかり、極めて靜か、春の花に續いて、藤、つじ、美を添へ新緑の頃は全國の眺め又一入、庭一面には雜草の花、秋は園内の樹木紅葉して花にもまさる趣を呈す。幼兒は人工を加へないこの廣大な自然の庭に、求めずして鳥の聲をきく、餘念もなく花を摘みて自然を觀察、幼兒は能ふ限り天恵の庭に或は屋内に固定せるもの、移動するもの種々の遊びの材料に依つて恵まれた日常を送る。

敷地 三、一八九坪  
園舎建坪 二五〇坪  
遊園 二、九三〇坪  
園舎は木造平屋で其の内譯は次の通りである。

保育室	四	(五四坪)
玩具室	一	(二・五坪)
遊戯室	一	(四八坪)
園長室兼圖書室	一	(三坪)
職員室	一	(九坪)
靜養室	一	(四坪)
應接室	一	(四坪)
小使室附屬建物	一	(七坪)
職員住宅	二	(六三坪)
昇降口・電話室・廊下其他		

#### 二 保育方針

本園は幼稚園令に則り、幼兒の健康を第一とし、之に伴ひ將來の爲め幼兒時代よりの正しい用意を以て、善良なる性情と、良習慣を養ふを以て主眼としてゐる。

#### 三 園則

本園は満三歳より學齡まで滿一年以上在園の者に入園を許し、其の心身の發達及び善良なる情操を涵養す。

入園期は四月、九月の兩度とす。

入園志願者には園所定の入園願書を交付し、簡易なる方法

#### 入園證書

原籍 出生地 現住所 族籍 職業 幼兒氏名 生年月日

右は今般貴園に入園御許可相成候に就ては本人に關する一切の事件拙者引受可申候也

右保護者 千葉縣印旛郡成田町何番地

昭和 年 月 日 何 某甲

私立成田幼稚園長荒木照定殿

にて審査をなし選擇の上、三月末許可の通知をなし入園を決定す。收容人員は其の年度保育終了者と同數を選定し、四月入園後事故退園等の爲め人員に異動あるも臨時の補充を爲さず、九月の新學期に於て同様考査の上入園を許す。

#### 經歷書項目

一 生父健否 年齢

一 生母健否 年齢

一 兄弟姉妹

一 生母ノ乳 乳母ノ乳

一 牛乳 里子

一 生來重病ニカ、リタルコトノ有無

一 性質習慣ノ著シキモノ

右報告申上候也

昭和 年 月 日 幼兒保護者 何 某甲

私立成田幼稚園御中



保育料は月額金壹圓とす。

休園日

(大祭祝日以外)

夏季休園 自七月二十一日至八月三十一日

冬季休園 自十二月二十五日至翌年一月七日

學年末休園 自三月二十一日至四月三日

法會式日 七月八日

氏神祭 七月十七日

### 四 保護者心得

家庭と幼稚園の連絡に關する事

家庭と幼児保育の連絡に就いては、相互に協力するにあらざれば効果を得る事はざるはいふまでもなき事なるべし、されば家庭と幼稚園とは常に氣脈を通じ、内外相應して保育の効を全くせざるべからず。

今彼此の連絡に關し當園の翼望を掲ぐ。

一 家庭より當園の事に關し疑問あるか、又は幼児の事に關して擔任保母に問合せ協議せられたき事あらば、遠慮なく口頭又は書面にて申出でられたし。

一 父母兄弟並びに直接幼児の保育に關係ある人は、時々來

園して當園の實況を視察し、これを家庭保育の參考にせられんこと本園の最も翼望する所なり。

又春秋の頃子供會を開き、保護者諸君の來會を請ふを例とせり、これ一は實地保育の模様を諸君に示し、又一は諸君より家庭の狀況を聞き、幼児の保育に關し相互に懇話せんが爲めなり、日時は其の都度通知すべければ成るべく來會ありたし。

一 幼児付添人に關する事

本園に於ては付添を斷る。

但し往復の送迎は隨意たるべし。

一 幼児の遊嬉に關する事

遊嬉は實に幼児の仕事にして、心身の發達はこれによるものなれば、最も自由快活にこれを爲さしむること必要なれども、野鄙亂暴に涉るものはこれを制せざるべからざるは勿論玩具等に就きて亦よく其の良否を選定し、繪本の如きは色彩の良否、説明せる字の如何により幼児を害する事は恐るべき事なれば、其の内容を充分に取調べられて、幼児に與へられる様注意せられたし。

一 幼児の服装に關する事

服装は園制定のものを着用すること。

一 幼児の携帯品に關する事

幼児在園中に用ふべき器具其の他は總て園のものを使用す

ることなれば、手拭鼻紙等必要なるもの、外は幼児に携帯せしめざる様致されたし。

帽子辨當携帯品、マント靴等にも必ず氏名を記されたし、

一 幼児の往復に關する事

幼児の往復は、近來自動車其の他の爲めに事故生じ易ければ、風雨其の他には注意保護せられたし、格別の事情なき限り必ず徒歩せしめられたし。

一 幼児の缺席並びに家族の疾病に關する事

幼児の缺席一週間を超ゆるときは、口頭又は書面にて詳に其の事由を届出でらるべし。凡て多人數の集る所は充分注意を爲すにあらざれば、或は悪疾傳染の媒をなす虞あるを以て幼児の家族に傳染病者ある時は、直ちに其の病名を記して届出でられたし。

但し茲に傳染病と稱するは、痘瘡及び假痘、猩紅熱、腸窒扶斯、發疹窒扶斯、虎列刺、赤痢、チフテリア、ペスト等をいふ。

一 保護者の異動に關する事

保護者の變更は勿論、其の轉任改氏名等異動ありたる時は直ちに届出でられたし。

### 五 年中行事

一月八日 新年始業式

二月十一日	紀元節(梅の節句)
三月六日	地久節
三月二十日	保育修了式
四月七日	入園式
四月八日	花祭り
四月二十九日	天長節
五月五日	端午節句と幼児愛護日
六月一日	創立記念日
七月七日	七夕祭
十一月三日	明治節

### 六 保育の狀況

昭和十五年度全國兒百四十五名中七十名修了、昭和十六年入園増加の爲四月末百六十九名となつた。

園兒は年齢別に三組に編成、更に一組編成に困難な年長組を二組とし、計四組とす、且之を八名の保母にて擔任す。

保育の時間は季節に依り一樣でなく、長きは五時間短きは夏季の二時間とす。

保育は幼稚園令施行規則第二條に依り、唱歌、遊嬉、談話、手技、觀察等各項目に涉り聯絡を取りつゝ之を施行す。

昭和十六年度より小學校は國民學校と改稱され、且其内容



に於ても最も躰を尊重するに對應して、就學前の正しき躰の用意を必要とするため、幼稚園に於ける日常幼児の生活上この躰を強調し、國民學校入學後も永く良習慣の持續し得る等注意を拂ふ。

又登園下園に於ける種々の心得身の廻り品の始末より、庭の落葉の清掃、花壇の手入保育室内の幼児相當の整頓、保育用品の取扱注意等、將來の基礎となるべき徳性の涵養より、團體生活に慣れしむるやう指導に重きを置く。

體育運動としては、空氣清き緑の森に包まれた三千餘坪の廣大な地域を、西に東に鳥を追ひ花を尋ねて遊ぶのみにても、既に充分な運動であるが、更に園内の此處彼處に、數多き運動具に依り、又は季節的運動及精神訓練として、秋の頃には幼児用熊手を手にして、庭の落葉掃掃を行ひ、勤勞を樂しむ運動に伴ふ精神上的の美點を養ふ。

衛生的方面としては、傳染病豫防上よりも又幼児に清淨に對する感覺練習等目を重ねて、習慣となる衛生的美風を養ふために、登園の際のハタキの使用、薬水の手洗ひ、食鹽應用の口嗽ぎ、頻繁に使用する積木の如き薬水にて洗ふ事、強烈な太陽に消毒する外黒板の如きも庭園用小黑板を庭園に使用して、可成保育室内の使用を避け、以て室内の清潔を保つ。尙情操方面としては、十六年度より施行さるゝ國民學校の教科に依り、幼稚園に於ても音楽的に意を用ひ、ラジオ、蓄

音機レコードの鑑賞遊嬉及唱歌に伴ふピアノ、オルガン等の音程の練習にも意を注ぎ、國民學校に於ける音感教育を參考として幼児を導く。

### 七 保育の施設

本園の保育は各種の恩物 玩具、運動具其他の諸施設に依つて之を用ふ。

昭和十一年度以來本園に於て考案せる、五個聯絡の運動具を始め十一年度より、紙芝居、兼人形芝居舞臺又は其動きに伴ひ、音を發する新式タンク及富士山と鐵橋等終了生の奇贈に付き考案せるものは、園備へつけの自動車土臺と共に三千餘坪の庭園を體育に伴ふ興味ある活動に依り、自然に富む天與のそのふに、多大の効果を收めて幼児は幸福な日常を送る。更に十五年度四月八日は例年の如く、女學校及び小學校の生徒さん方と種々の催しものに、意義深くこの佳き日を樂しく送つた。

又五月九日は年長幼児七十名、リュックサツクに水筒姿も愛らしく、京成電車に送られて谷津遊園へ遠足した。幼児を始め保護者の方もあさり掘りに、小蟹を友にお花畑に又は動物に、各種の樂しさを重ね午後四時頃、樂しい會食に輕くな

つたリュックサツクを背に、京成成田驛着保護者と共に家路についた。

昭和十五年十一月十八日成田幼稚園及河合バンド聯合にて佐倉陸軍病院へ慰問に出かけた。午前九時幼稚園へ集合、園兒一同は河合バンド及幼児用樂隊により園を出發、成田町大通りを行進成田驛より京成電車に乗車、佐倉驛よりは樂隊の音律に合せ、行進も勇ましく病院へ、折柄東京から慰問の方もあつて、時間も少なく、やつと一二お遊嬉と河合バンドの面白き合奏をしてこの慰問を終つたが、幼兒より慰問品として金二十圓を贈呈した。

この日練兵場通過の爲、往復歩行の時間も長く年少四五歳の幼兒の往復も心がよりであつたが、一人の弱いものもなく皆元氣に成田驛に歸着、樂隊に送られて各自家路についたであつた。

昭和十五年は肇國二千六百年の佳き年に當り、公の行事の數々を重ねた。幼稚園は丁度この佳き年と同ふして、創立三十五周年を迎ふる喜びを記念するため、三十五周年の記念式並に第四回そのふ會の總會を併せ舉行する事となり、荒木園長親下を初め、三橋町長、檀徒總代、六事業關係の方々、小學校々長の御來臨を辱ふし、且創立以來園の爲に、終始御盡力頂いた 故理事四氏の御遺族を御招待申上げ、百と數ふるそのふ會の會員、百數十名の園兒達も此席に列なりました廣

い遊嬉室も埋めつくした。數々の式の順序を進め、遺族の方には感謝狀及記念品を贈呈した。

園長親下を始め、三橋町長、諸岡そのふ會々長より數々ありがたきお言葉を頂き、常々親下のお言葉を伺ふ事の稀な園兒達は又一入の喜であつた。

和氣堂に満ちた此日の記念式も芽出度式を終了、引續き庭園の小山には、河合バンドの樂の音勇ましく、そのふ會會員の工夫された豫想外の催しもの、數々、園兒の戰爭ごっこ、南京光華門に揚がる日章旗の萬歳の聲も勇壯に、園長親下には午後の御用の時を特にお喜びの内にお過し頂き無上の喜びと共に來賓の方々も、種々の餘興に御参加庭園に満つる笑ひの聲、初冬には珍らしい小春日和の暖かさに恵まれて、一同夕暮近き頃この記念すべき佳き日を終つた。

### 第參 園兒狀況

#### 一 年度別修了兒數

明治三十八年度	男 一三	女 九	計 二二
明治三十九年度	男 二二	女 一五	計 三八



明治四十年	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年	明治四十四年	明治四十五年	大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年
女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二	〇二
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
四二	二七	三九	三七	四〇	三八	三五	二九	二五	四〇	四一	四五	三七		
大正十年	大正十一年	大正十二年	大正十三年	大正十四年	大正十五年	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年
女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男	女男
一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
〇三	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三	〇三
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
四二	三二	三五	五〇	四二	三七	三七	四一	三〇	三四	三一	二一	二五	二三	二三

七〇

二 本年度入退園及年度末現員調

昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年
女男	女男	女男	女男	女男	女男
一一	一一	一一	一一	一一	一一
〇一	〇一	〇一	〇一	〇一	〇一
計	計	計	計	計	計
三八	三一	四八	六〇	七〇	七〇

性別	入園	卒業	退半園途	死亡	年度末現員
男	三八	三六	三		三二
女	四七	三四	六		四三
計	八二	七〇	九		七五

三 本年度保育修了幼兒數

信田揚子	關川克己	字井佐知子	渡邊正生	小川靜子	三須秀男	庄司友次	新居義生	高須賀伊藏	日暮芳正	石井清	豐田千惠子	清宮澄子	淺井純子	大澤靜枝	高田敦生	古矢純奈	諸岡智惠子	關和子	小川厚太郎	
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
青野き上	山中秀雄	前林弘一	伊原輝夫	山田輝夫	林中義一	田中義一	諸岡迪夫	金井美智子	鈴木菊江	大竹永一	伊藤禮和	稻岡禮和	高橋洋子	粕川昭夫	川島常示	田中久江	小林智樹	小田垣國孝	加瀬靜子	
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計
四二	三二	三五	五〇	四二	三七	三七	四一	三〇	三四	三一	二一	二五	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三

七一







### 第四 歴代園主・園長・主任

園主・園長	石川照勤	自明治三十八年四月至大正十三年一月
主任	荒木照定	自大正十三年二月 現在
主任	木村良	自明治三十八年五月至同九月
主任	猪狩ゑい	自明治四十年四月至大正十三年三月
主任	山口政子	自大正十三年十月至現在

勝又理恵子	三橋基臣	加勢京子	増田薫	小倉義	夏海和子	京須愛子	佐藤公久	萩原正司	大屋和子	鈴木和子	寺内君江	平山恵以子	大木敦子	上原明	鈴木俊夫	川口敏子	小川チヨ子	磯山公子	萬來咲子	京須壽子	鶴岡穹子	
勝又坦治	三橋醇	加勢野	増田義男	小倉格司	夏海千尋	京須忠雄	佐藤寅吉	萩原竹三郎	大屋高次郎	鈴木勇助	寺内政義	平山清	大木安治	上原健吉	鈴木幸一	川口清太郎	小川房吉	磯山茂	萬來親	京須雄	鶴岡秋藏	
稲岡常三	出口進一	田中咲子	小田垣文代	信田敏雄	田中秀子	三村カウ	(以上五歳)	橋美也子	中里美津子	押尾静江	山田富美子	浅野利昭	小坂稀一	森岡克子	小田垣勝隆	中込當美子						
稲岡小二郎	出口友雄	田中盈之助	小田垣松三郎	信田繁	田中真	川村幹	計二三	橋昌夫	中里雪	石井なか	山田正治	浅野利一		森岡實英	小田垣利郎	中込滋						

### 第五 職員

職名	氏名	原籍	就職年月
園主	荒山口木	千葉縣	大正十三年二月
主任	山喜政	千葉縣	大正十三年三月
主任	命上	千葉縣	大正十三年五月
主任	澤上	千葉縣	大正十三年五月
主任	田利	千葉縣	大正十三年五月
主任	岡利	千葉縣	大正十三年五月
主任	倉利	千葉縣	大正十三年五月
主任	田文	千葉縣	大正十三年五月
主任	崎文	千葉縣	大正十三年五月
主任	村秀	千葉縣	大正十三年五月
主任	竹村	千葉縣	大正十三年五月
主任	齒科	千葉縣	大正十三年五月

### 第六 經費

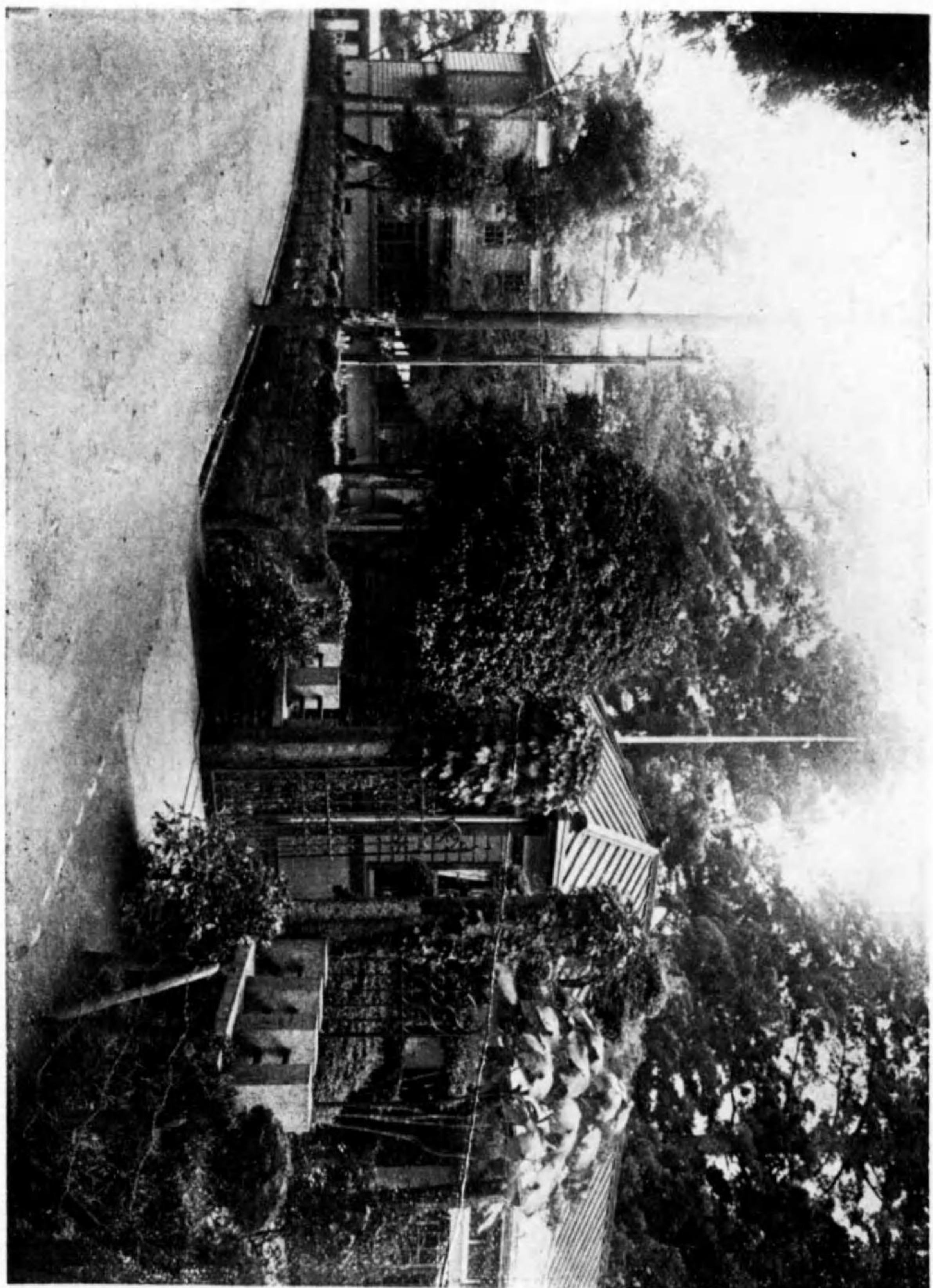
本園には豫算なるものがない、従つて年により其の金額は一樣でないが、臨時の支出なき限りは、毎年大體左記決算額の金額によつて經營してゐる。

昭和十五年度決算額  
九、四四九、八七



成  
田  
學  
園





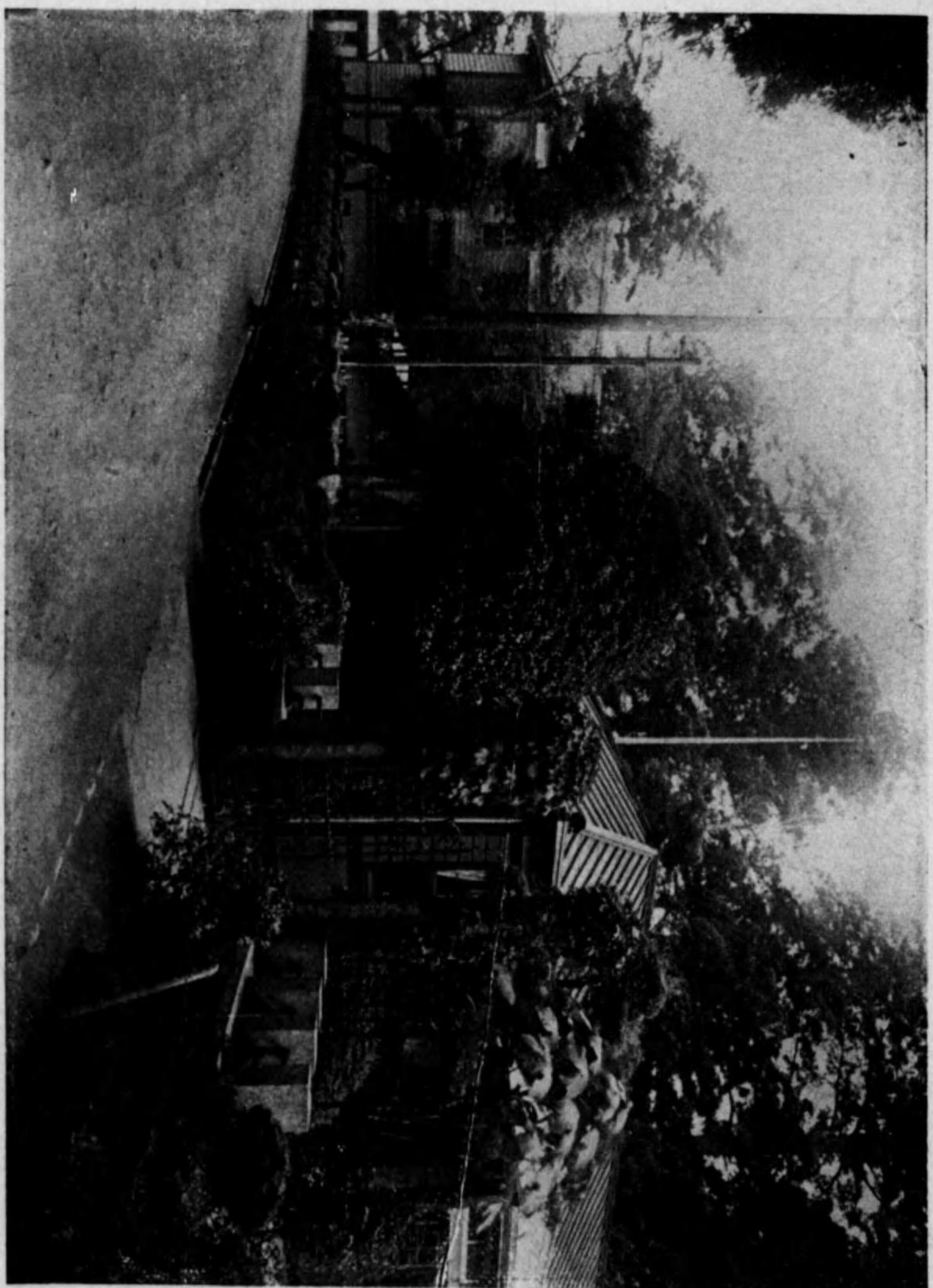
成田學園

寫眞  
成田學園々歌 成田學園平面圖  
昭和十五年成田學園一覽

目次

第壹	位置並びに沿革	七七頁
一	位置	七七
二	沿革・本年度感謝録・年表	七七
第貳	設備並びに教護	八〇
一	設備	八〇
二	目的	八〇
三	入退園に關する内規	八〇
四	園内教護の狀況	八一
五	時局對應施設	八一
第參	教護の成績	八五
第肆	生徒狀況	八六
一	本年度入退園狀況	八六
二	入園時に於ける調査	八六
三	思成會	八七
四	退園生よりの通信	八七
第五	歴代園長並びに主任	九〇
第六	職員	九一
第七	經費並びに基本金蓄積	九二
一	昭和十五年度決算	九二
二	基本金の蓄積	九三





成田學園園

寫眞  
成田學園々歌 成田學園平面圖  
昭和十五年成田學園一覽

目次

第一	位置並びに沿革	七七頁
第二	沿革・本年度感謝錄・年表	七七
第三	設備並びに教養	七八
第四	一 設備	七八
	二 目的	七八
	三 入退園に關する内規	七八
	四 園内教養の狀況	七八
	五 時局對應施設	七八
第五	教養の成績	七八
第六	生徒狀況	七八
	一 本年度入退園狀況	七八
	二 入園時に於ける調査	七八
	三 思成會	七八
	四 退園生よりの通信	七八
	五 歴代園長並びに主任	七八
	六 職員	七八
第七	經費並びに基本金蓄積	七八
	一 昭和十五年度決算	七八
	二 基本金の蓄積	七八



成田學園々歌

一

天地の恵みを籠めて  
濁りなき心をいだき  
教の道の嬉しさよ

二

仰ぎ見る御姿尊く  
我が胸に正しく映し  
教の園の明るさよ

三

法燈のかゞやき絶えぬ  
聳え立つ杉の林に  
教の窓の尊さよ

大友惟誠  
弘田龍太郎  
作曲

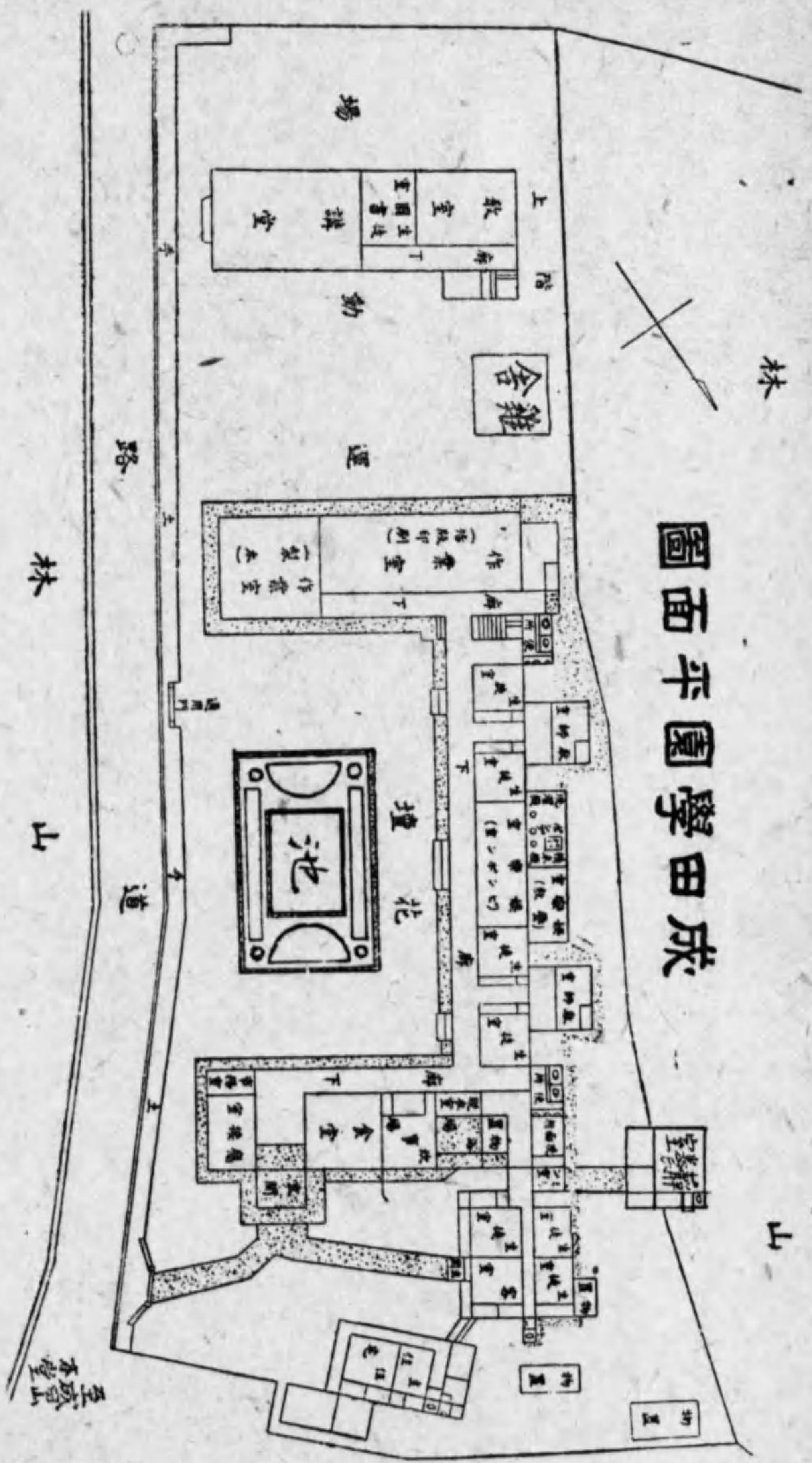
鳴り出づるみ寺の鐘に  
真直なる希望に生さん

さゝぐるは降魔の劔  
曇りなき叡智磨かん

靈境は淨くすがしく  
剛毅き性いよゝ鍛へん



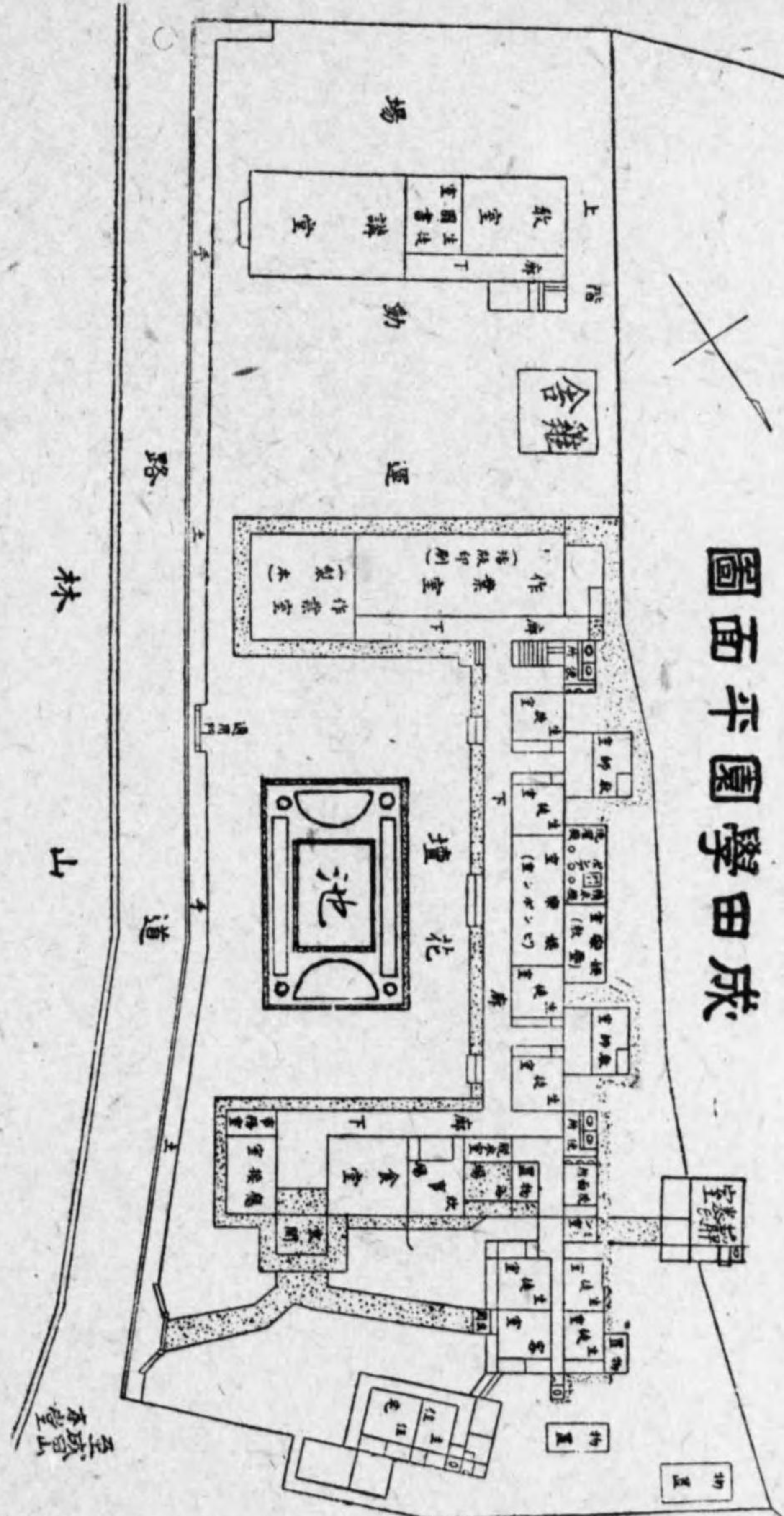
# 成田學園平面圖





# 昭和十五年成田學園一覽

園生狀況				教護設施		退入園	目的	設備	沿革	位置		
昭和十六年三月末現在	入園生數 二九四	退園生數 一六四	在園生數 一三〇	最近九年於 九四	最近九年於 一六	最近九年於 三〇	最近九年於 九四	最近九年於 一六	最近九年於 三〇	最近九年於 九四		
<p>成績良好ノモノ 成績良好ナルモ死亡ノモノ 成績未定或ハ不明ノモノ</p>				<p>自午後一時至同四時 自午後八時至正午 自午前八時至正午</p>		<p>午前五時 同六時 同六時卅分 同七時</p>	<p>起床・掃除 ラジオ體操 御拜ニ宮城・大廟・不動 訓話ニ御拜前行フ 朝食(職員兒童共食) 學科ニ個人指導</p>	<p>實科(農業實習・活版印刷・簡易製本・手工) 心身鍛鍊(勤勞性ノ養) 夕食(同前) 學科ニ個人指導 禮拜・訓話・就床(年長者ハ九時)</p>	<p>畫食(同前) 實科(農業實習・活版印刷・簡易製本・手工) 心身鍛鍊(勤勞性ノ養) 夕食(同前) 學科ニ個人指導 禮拜・訓話・就床(年長者ハ九時)</p>	<p>在園費用 一月金拾五圓 但シ家計ノ都合ニ依リ一部又ハ全部ヲ減免ス</p>	<p>土地總坪數三、一三五坪。此ノ内譯建物敷地九七二坪、運動場三五〇坪、耕作地(農業實習地)六七五坪 其他一、一三八坪、建物ハ木造平屋建並ニ木造二階建ニシテ其數八棟二九六坪、園生宿舍、講堂、教室 作業場、靜養室、職員室、其他各室ニ分レ外ニ職員住宅アリ。</p>	<p>千葉縣印旛郡成田町成田四〇二番地、成田山新勝寺境内ノ西北部 (電話成田一〇三番)</p>
<p>園長主任 成田山貫首大僧正 荒木照定 職員 大友惟誠</p>				<p>時局對應 施設 說話・寫眞・揭示 不動尊・埴生神社ニ參拜 武運長久・國威宣揚ノ祈願 出征將兵ノ歡送迎 戰死者町葬ニ參列燒香 慰問文及慰問品ノ發送 獻金 其他 娛樂運動ニ庭球・野球・ピンポン・遠足 角力・其他 自學自習ニ圖書室ニテ圖書閱覽 おやつニなるべく毎日實施 奉仕作業 劍道ニ每週一回</p>		<p>基本金 御下賜金・助成獎勵金・寄附金等ヲ基本金ニ蓄積 現在蓄積高ニ現金 一七、二八五・〇〇 有價證券 一、九三〇・〇〇</p>		<p>昭和十五年度 決算額 一七五四二・五二</p>		<p>林道</p>		



成田學園平面圖



# 成田學園

## 第壹 位置並びに沿革

### 一 位置

本園は成田町成田四〇二番地（電話成田百三番）成田山境内西北に位する裏山に在り、東部は出世稻荷を経て、奥之院光明堂・本堂並びに公園に通じてゐる。西部は成田町幸町、南部は裏参道を隔て、境内山林に面し、北部は同町土屋の街衢を丘上より眺め得る所の高地で、古木鬱蒼閑雅幽靜の地城を占めてゐる。

### 一 沿革

本園は成田山の經營に屬する少年教護事業にして其の沿革左の如し。

- 一 設 置 明治十九年五月二十四日千葉感化院と稱し、本縣内佛教各宗寺院共同事業として千葉町に設置。
- 一 開院式 明治十九年十一月二十八日。

維持經營の變更 明治二十一年四月以降成田山新勝寺一手に本園を維持經營することに變更。

創立當時の奔走者 服部元良師・石井實禪師・金山堯範師・白井知三郎氏・坪井善四郎氏。

新築並びに移轉 明治四十一年三月二十五日現在地に園舎を新築してこれに移轉。

御膳本下附 明治四十三年九月七日、教育勅語謄本並びに戊申詔書謄本各一通下附。

大正十三年四月五日 國民精神作興に關する詔書謄本一通下附。

昭和十四年十一月二十日 青少年學徒に賜りたる勅語謄本一通下附。

皇族御來園 明治四十四年十月十七日 山階宮芳麿王殿下・久邇宮朝融王殿下・華頂宮博忠王殿下・久邇宮邦久王殿下・山階宮藤麿王殿下・本園へ御成り遊ばされた。尙ほ同月二十二日、更に 山階宮大妃殿下には、御姫君 安子女王殿下を御伴ひ、本園へ御成り遊ばせられ、生徒一同へ御菓子料を下賜せられた。



- 一 宮内省より御下賜金 本園事業御獎勵の思召を以て、大正十一年以降殆ど毎年紀元の佳節に當り御下賜金一封宛を拜受したが、これは今や本園基本金の首位を占めてゐる。
- 一 内務大臣・厚生大臣より下附金品 本園に於ける事業の功績を認め、且つ事業獎勵の趣旨により、明治四十二年二月十一日以降殆ど毎年金品御下附の光榮に浴してゐるが、夫等は總て基本金中に蓄積して多額に上つてゐる。外に花瓶一對(市岡紫雲作青銅)がある
- 一 司法大臣より下附金 少年保護事業も併せ行ふ故を以て昭和十二年以降毎年下附金を拜受。
- 一 本縣知事より獎勵金 大正十一年以降毎年金圓を下附せられ、前と同様基本金中に蓄積してゐる。
- 一 平和記念東京博覽會より銅牌受領 大正十一年七月十日巽に出陳した本園一覽に對し、賞狀並びに銅牌を贈られた。
- 一 名稱變更 明治四十一年三月廿五日成田山感化院と改稱昭和三年三月二十五日成田學園と改稱。
- 一 恩賜財團慶福會より助成金 本園講堂改増築助成金として昭和九年二月十一日、金五百圓の交付があつた。
- 一 記念祝典舉行 昭和十一年十一月二十八日、創立五十週年記念祝典を舉行。其の際記念事業の一として「成田學園五十年史」を編纂刊行した。
- 一 本年度光榮 十一月十日、十一日宮城外苑に於て舉行せ

られたる、皇紀二千六百年式典並に同祝典に際し、園長並びに主任の二名が參列の光榮に浴した。尙十月十日全國社會事業大會に於て主任は金光厚生大臣及大會々長清浦伯より、夫々の表彰狀と記念品並に高松宮殿下の御允許による社會事業功勞章を拜受した。

一 本年度感謝録 昭和十五年度に於て各官衙より交付された獎勵金補助金並びに、一般寄附金品は次の通である。

- 宮内省 御下賜金 壹封
- 厚生省 補助金 壹千貳拾圓
- 司法省 獎勵金 貳百五拾圓
- 千葉縣 補助金 五拾圓
- 金五圓也 須田ひろ子殿(成田)
- 金五圓也 宮内秀一殿(成田)
- 金五圓也 久保田潔殿(成田)
- 金貳百圓也 岩崎 家殿(東京)
- 金五圓也 則武文雄殿(成田)
- 御菓子澤山 若松分店殿(成田)
- 理髮(毎月一回) 平澤 光殿(成田)

尙ほ本園の沿革を年表にて示せば次の通りである。

成田學園沿革年表 (昭和十六年迄)

(一) 千葉縣各下宗寺立時代(二年間)		(二) 成田山新勝寺經營時代(三十五年間)	
前	中	後	後
代時院化感業千 (間年十二)	代時園學成及院化感山田成 (過經年三十三)	代時園學成 (過經年三十)	代時園學成 (過經年三十)
寺宗各下縣業千 代時立共院	期前(い) 代時營經山田成	期中(ろ) 代時院化感山田成	期後(は) 代時園學成
間年二	間年十二	間年十二	間年三十
院總 三解石服 渡藤船 池良井部 邊島越 照教實元 正 鳳俊禪良 暢健衛	(A)三池僧正時代 (此ノ一部ハ(一)中ニ加 ハルモ便宜ココニ加フ) (B)石川僧正時代 (御歸朝迄) (C)石川僧正時代 (御歸朝ヨリ成田 院會新築移轉迄)	(A)石川僧正時代 (B)荒木現山主時代	(C)荒木現山主時代
二年間	六年間 六年間 八年間	十六年間 (十五年) 四年間 (二月)	經十三ヶ 過年
自 明治十九年五月二十四日 至 同二十一年四月	自 同二十一年五月 至 同二十七年五月 自 同二十七年六月 至 同三十三年四月 自 同三十三年三月 至 同三十三年四月 自 同三十三年四月 至 同四十一年三月二十四日	自 明治四十一年三月二十五日 至 同四十一年三月三十一日 自 同四十一年三月 至 同四十一年三月二十四日	自 同三十三年三月二十五日 至 同三十三年三月二十五日 自 同三十三年三月 至 同三十三年三月二十四日
(二五四八)	(二五四八) (二五五四) (二五五四) (二五六〇) (二五六〇) (二五六八)	(二五六八) (二五八四) (二五八四)	(二五八八) (二六〇一)



### 第貳 設備並びに教護

#### 一 設備

土地總坪數	三、〇三五坪
内譯	
建物敷地	九七二坪
運動場	三五〇坪
耕作地(農業實習地)	六七五坪
其他	一、一三八坪
建物	八棟 二九六坪
内譯	
園生宿舍	七五坪
講堂及び教室	五一坪
作業場(活版印刷並びに製本室)	四八坪
職員室並びに職員住宅	三〇坪
静養室	九坪
其他	八三坪

大部分は明治四十一年の竣工に係る木造平屋であるが、内作業室、教室、講堂は、昭和八、九兩年度の増改築に係り木造二階建である。

詳細は別紙平面圖の通り。

#### 二 目的

本園は不良行爲を爲し、又は爲す虞ある兒童を收容し、少年教護法に準據して之を保護教養し、其の資質の改善向上を圖るを以て目的としてゐる。

#### 三 入退園に關する内規

##### 入園に關する内規

年齢 満七歳以上十六歳未満(何れの地何れの家庭より依頼せらるゝも差支なし)  
 謝絶 白痴、不具者、病者、不良程度のあまりに深き者  
 手續 本園の教育を依頼せんとするときは學校の通信簿を携へ保護者來園のこと。但し遠隔の地に在る方は郵送相談せらるゝも差支なし、而して愈々入園の節は本園所定の書式(別に印刷せる用紙ありそれに記入のこと)による書類と戸籍謄本を差出さるべし。  
 在園費 在園中は在園費として金拾五圓を毎月三日までに前納するを要す。但し家計の都合により其の一部若しくは全部を減免す。

備考 入園の手續は前記の如く何等面倒なく極めて簡單なり。

又前記の書類と雖も依頼人の希望によりては本園に於て代書するも差支なし。

入園の際は書籍文具衣類夜具等現に所有するものを持参のこと。

保證人は戸主にして身元確實なるものを選定せられたし。

新に入園生ある時は、先づ入園前の非行に對して、懇々と訓戒を加へたる後、本園生活の要領を知らしめ、不動明王の御恵みによつて、全く生れ更つた人となり、善良に進むべきことを諭し、講堂に於て入園式を行ひ、本園の人とならしめる。

##### 退園に關する内規

生徒の改善を認め、退園を許すまでには、種々の階段を附ける。第一に不動尊を信仰する態度、第二に園外へ使に出し時々金錢を携帯せしめ、毫も不都合なき時、及び日常操行の良好右半年以上乃至一ケ年間、同様に持續した時を以て、改良生と認め、退園せしめる。若し不良の原因が、其の家庭にある時は、成るべく直ちに家庭に歸さないことを以て適當とし、父母の同意を得て、本園より直ちに本人の性行に適當する職業を選び、其の家へ紹介し、就職せしめることにして居る。此の場合に於ても、其の家庭及び周圍に十分注意を拂ひ、

選擇することは勿論である。

本園の最も心勞するのは、實に此の退園後の成績効果である。何となれば在園中全く改善の成績を挙げ得たと確信せらるゝ生徒であつても、退園後には環境其の他によつて、動もすれば逆戻りをなし、其の効果が破壊せられる虞あるからである。故に本園に於ては、退園後の成績効果に對し、周到な注意をすると共に、油断なく左記の保護視察を行つてゐる。

第一、本園職員の視察。第二、本園と書面の往復。

就中書面の往復は、本園の努めて勵行する所で、これは甚だ平凡なやうであるが、最も有力な効果がある。尙ほ事情の許す限り、退園者とは親戚同様の關係を持續して行くことに努めてゐる。(別項退園生の手紙参照)

#### 四 園内教護の狀況

本園の生活は、普通一般の家庭生活と毫も異なる所はない尤も普通教育とは違ひ、ある一定の時間を限つて、教育するのではなくして、普通教育の時間以外に家庭教育として一般の躰をなすと共に、信仰の觀念を生ぜしめるのが、實に本園生活の精神であるから、此の根本精神に基いて、總ての施設方法を實現して居る。其の生徒待遇の方法に至りては、慈悲仁愛の情を以て、これに當るは勿論、一面には又整然たる規



律生活をなさしめ、亂雑放肆に流れない様注意してゐる。然し乍ら本園は、悉く豫て定めたる成文によつて行動せしめ、監督するといふが如き方法ではなく、常に便宜を主とし、温き家風、自然の慣例によつてこれを訓練し、力めて愉快な朗な生活をなさしめるを以て主眼としてゐる。約言すれば本園の生活は、信仰ある、規律正しい明朗な家庭生活といふことが出来る。

日課及び其の説明を擧ぐれば、左の如くである。

- 午前五時起床 直ちに掃除
  - 午前六時 ラヂオ体操
  - 午前六時三十分 御 拜
  - 一、皇室の萬歳を奉祝す 二、大廟遙拜
  - 三、成田山不動尊禮拜 四、各自先祖敬拜
  - 午前七時 朝 食
  - 自午前八時至正午 學 科
  - 正 午 晝 食
  - 自午後一時至四時 實科(年長者は五時迄)
  - 午後六時 夕 食
  - 自午後六時半至同八時 學科(年長者は九時迄)
  - 午後八時 禮拜後就床
- 以上の如く定めてあつても、時季によつて時々變更するは勿論、便宜上臨時變更することもある。

を用ひてゐる。而して職員生徒は皆一堂に集つて、食を共にしてゐる。

單に食事のみでなく、本園の生活は總てに於て「共に」といふことに最も留意し、學ぶにも、遊ぶにも、常に職員生徒が其の行動を共にし、美しい圓滿な家庭を作ることと努力してゐる。此の「共に主義」は、特に兩者の親しみを深めるばかりでなく、教育上最も大切な、兒童の個性観察といふことが、種々なる場面に於て、なし得る便宜が多いのである。

**學 科** 概ね少年教護法施行令に據る教科目にて、午前中三時間乃至四時間(但し雨天又は冬期は午後及びぶことがある。夜間は二時間、殆ど個人的に教授をなし、特に重きを實用方面に置いてゐる。而して向上の見込ある兒童であつて、品行も差支ないと認められた時は、國民學校又は上級の學校へ通學せしめることもあり、現在數名のものが通學中である。

**實 科** 農業・活版印刷及簡單な製本・手工等を課してゐる。但し冬期は農業を行はない。耕地は目下二段二畝餘歩を有してゐる。印刷部は未だ完備の域に達しないが、普通の設備を有し、専ら新勝寺關係の印刷物を、其の實習材料に充て生徒中嗜好性能これに適する者を選んで習得せしめてゐる。

園内に於ける實科に對しては、生産的職業的技能を與へ、實社會に出でて、直ちにそれによつて自活し得るものを選び

**起 床** 朝起は新勝寺の曉鐘に警醒せられ、蹶起せざるを得ないと云ふ習慣を作つてゐる。

**清 潔** 清潔は本園の最も努めてゐる所で、毎朝掃除の外日に數回これをなし、時々大掃除及び各室の清潔整頓を檢査してゐる。

**衣 類** 普通の衣類、主として洋服を用ひてゐる。會ては制服を用いたこともあつたが、今はこれを行つてゐない。

**御 拜** 毎朝講堂に於てこれを行つてゐる。兒童に敬虔の心を養成せしめる爲め、職員は特に敬虔的態度で、之に臨んでゐる。本園修身教育の大本としては教育勅語の御聖旨を奉戴することは勿論であるが、これが實踐躬行の實を擧ぐるには信仰の力を喚起しなければならぬと信じてゐる。本園の特徴として、成田山不動尊を信仰せしめる所以も、即ちこれである。

**訓 話** 一般に對する訓話は、毎朝先祖敬拜の際、及び就褥前不動尊禮拜の時、これを行つてゐるが、平易簡單なもので、これが爲めに、多くの時間を費してゐない。何となれば職員は生徒と起臥を同うして、行住座臥の間、これが師たり父兄たるの心を持ち、實踐躬行所謂行を以て訓ふるの旨としてゐるからである。然し個人に對しては、機會を捕へこれに投じて、其の兒童に適切に徹底的に訓話をなしてゐる。

**食 事** 常に兒童の榮養状態を考慮し、食事には相當の意をななければならぬと論ずるものもあり、本園も固より考慮したことであつて、先年印刷部を創設したのも、其の一端であるが、二、三の業務を設備したからとて、到底全生徒の個性嗜好に悉く適せしむることは至難であり、強いて職業を狭い範圍に押込む嫌がある。殊に學園に適する授業者たる人物を得ることが至難で、施設の繁多な割合に好果を收められない憾みがある。よつて本園は教育終局の目的を主眼とし身體の鍛鍊、精神の訓練、特に勤勞性の養成を目的として、以上のものを施設してゐる。尤も年齢其の他の關係よりして、在園中に職業を與ふる必要ある者に對しては、當町内の家を選んでこれに委託し、本園より通勤して、其の職を見習はしめることもある。

**劍 道** 正科としてとりいれ劍道錬士加勢胖氏の篤志により一週一回一時間半宛教授して頂いてゐる。

**娛 樂** 兒童の性情を圓滿に發達せしめ、愉快の中に教化の目的を遂げしめるため、娛樂には相當の意を用ひてゐる。

一 庭球及び少年野球 娛樂に供する外、體力養成にも資する爲めに、これを設けたが、一同喜んでこれを遊び、晴天の日には殆どその遊び時間をこれに費してゐる。

一 娛樂室 疊敷九疊 板敷十二坪の二室より成る娛樂室を設け、ラヂオ(電氣蓄音機兼用)ピンポン・カラム・碁將棋等の娛樂具を此所に集めてゐる。



一 生徒圖書室 此所に有益なるお伽新雑誌・小國民新聞・寫眞・繪畫等を置き、兒童の閱覽に供してゐる。尙ほ圖書は備付以外、時々圖書館より貸出を受けることもある。

一 散歩遠足及び旅行 毎月一日・十五日・二十八日、及び日曜日の午後には不動尊に参拜し、終つて散歩せしめてゐる。又附近神社佛閣の参拜・水泳・船遊・魚釣・茸狩・栗拾ひ、或は單なる山遊等で、數々山野の跋涉、郊外の遠足をなし、以て娛樂を兼ねた體力の養成を圖つてゐる。尙ほ春秋二回には、汽車・電車・自動車等に乗つて、遠方へ修學旅行もしてゐる。

一 四大節及本園記念日 當日は祝賀式後に、種々なる餘興をなして、一日を祝はしめるので、兒童は頗る楽しみとしてゐる。

一 誕生祝 園長を始め、職員生徒の誕生日には、其の夜職員生徒一堂に團樂し、茶話會を行つてゐる。特に生徒の誕生日には、該兒童に一日の休暇を與へ、早朝不動尊に参詣、其の立身出世を祈らしめ、本園よりは祝意を表して、小遣を與へ、又は特に御馳走を供してゐる。

一 五月節句 柏餅にて茶話會を開いてゐる。

一 降誕會及義士祭 毎年四月八日・十二月十四日の日に祭祀を行つた後、園生希望の餘興を行つてゐる。

右の外、生徒各自が時節により、流行によつてする遊戲、

例へば輪廻し、獨樂・歌留多・雙六・陣取・鬼事・軍艦遊戯其他のものは、大抵自由に任せ、濫りに拘束を加へないばかりでなく、多くの場合職員も亦これに参加するのを常としてゐる。

賞 罰 總て普通の家庭と状態を同じくする希望で、賞罰の如きも固より格別の定めがない。毎年三月二十五日は本園の記念日で、當日は特に賞與を與へることを例としてゐるが平日は格別の善行ある場合の外は、賞與を與へない。

生徒の席順は一日より月末に至る一ヶ月間、各生徒の操行成績を調査し、右の結果により(日々)の成績表によるの外、更に職員の見解を附加す(翌月一日)席順を改めることを例としてゐるのであるが、又其の席順並びに勤勞振りによつて、更に優劣を付け、夫々手當を支給して貯金をさせてゐる。

おやつ 毎日の之を與へてゐる。尙ほ篤志の人々より、時々菓子等を生徒に寄附せられることもあり、園長手許より生徒を慰めよと、特に珍菓・水菓子等を贈らるゝことも屢々あり又園職員へ他より贈られたる菓子等も、大抵は生徒に分與するを常としてゐるので、實際に於ては間食の度數も割合に多くなり、是等の點も一般家庭とあまり變る處がないのである。

### 五 時局對應施設

今回の支那事變に就いては、園生にも時局の認識を深からしむることが最も緊要であることを痛感して、或は新聞にラジオに寫眞に、又は説話揭示等によつて其の徹底を期し、緊張の生活を送らしむることに努めてゐると同時に、一面には他と合同又は單獨にて、不動尊並びに埴生神社に参拜、國威宣揚武運長久の祈願をなし、更に出征將兵の歡送より、戦死者町葬参列、慰問文及慰問品を送つたりしてゐる。

従つて本年度は恒例の臨海生活を廢し、修學旅行等もなるべく控目とし、只僅に筑波山への武運長久の祈願旅行、及千葉海岸に海水浴をなさしめ近所への遠足を數回行つただけである。

### 第參 教護の成績

明治十九年開園以來、入園生は二百九十四人であつて、歴史の古い割合に、其の數甚だ少いかの感もあるが、これは此の教護思想の未だ普及しなかつたこと、又本園の所在が都會地でなかつた爲めに原因するのは勿論であるが、更により大なる原因は、本園が敢て在園生の多きを欲しないことである。

ある。

在園生の多數といふことは外見上極めて立派であるが此の教育の性質上からは、決して望ましいことではなく、教育本位にこれを考へるならば、寧ろ少數程効果的であることは明らかである。本園は幸に經營上に困難なく、専ら教育的効果を本位に考へ、敢て外見を飾るの必要がなかつた爲め、常に園生の多いことを欲しなかつたのである。

現在としても優に三四十名を收容するの設備はあるが、成るべく二十五名位より多くしないことも此の故である。

以上記載した如く、形式は兎も角實質に於ては、飽くまで子供本位にして居るから、其の成績は割合に良好である。

試に最近の成績をあぐれば、左の如くである。

退園生

一四〇名

内

時々文通等あり、成績良しきもの

九四名

成績良好なりしも、死亡したるもの

一六名

文通なく、成績不明憂慮中のもの

三〇名

現在生

二〇名



### 第四 生徒狀況

#### 一 本年度入退園狀況

本年度に於ける園生入退園狀況左の如し

前年度繰越生	二二名	本年度入園生	一四名
本年度退園生	一六名	現在園生	二〇名

#### 二 入園時に於ける調査

入園當時に於ける園生の「教育程度と年齢」、「保護者と年齢」、「保護者の職業」を示せば次の通りである。

入園時教育程度と年齢（明治三十四年以降）

教育程度	入園時年齢							計
	以下9歳	10	11	12	13	14	15	
不學	三	二	一	一	三	二	一	一三
尋常	一	四	二	一	三	三	二	一七
尋常	二	三	一	一	四	二	二	一五
尋常	四	七	三	二	五	四	二	二七
尋常	五	二	四	九	一	二	四	二五
尋常	六	二	三	四	一	二	五	二一
計	一三	二二	一五	一七	一七	一七	一七	一〇六

入園時年齢	保護者	
	以下9歳	10以上
以下9歳	二	一
10	一	八
11	一	六
12	一	三
13	四	三
14	三	三
15	三	八
16以上	四	一
計	二四	三三

入園時保護者の年齢（明治三十四年以降）

保護者	入園時年齢							計
	以下9歳	10	11	12	13	14	15	
實父	二	二	二	二	二	二	二	一四
實母	二	二	二	二	二	二	二	一四
實父・實母	二	二	二	二	二	二	二	一四
繼父・繼母	二	二	二	二	二	二	二	一四
實父・繼母	二	二	二	二	二	二	二	一四
實母・繼父	二	二	二	二	二	二	二	一四
祖父母	三	二	一	一	一	一	一	一〇
其ノ他親族保護者ナキ者	二	一	一	一	一	一	一	一〇
計	二一	一八	一六	一三	一三	一三	一三	一〇七

入園時保護者の職業（明治三十四年以降）

職業	以下9歳	10	11	12	13	14	15	16以上	計
農業者	三	一	一	一	一	一	一	一	一〇
社會社員	一	一	一	一	一	一	一	一	七
商職人	二	二	二	二	二	二	二	二	一四
諸職人	五	二	一	一	一	一	一	一	一三
計	一一	六	五	五	五	五	五	五	五七

職業	入園時年齢							計
	以下9歳	10	11	12	13	14	15	
被備人	三	二	一	一	三	二	一	一三
官公吏	一	四	二	一	三	三	二	一七
無職業	二	三	一	一	四	二	二	一五
飲食業	八	七	三	二	五	四	二	二九
古物商	七	三	一	一	三	三	二	二〇
車夫	三	三	一	一	二	二	二	一五
植木業	三	三	一	一	二	二	二	一五
荷馬車業	二	三	一	一	二	二	二	一四
計	二四	二二	一五	一七	一七	一七	一七	一〇六

### 三 思成會(退園生の會)

昨年呱呱の聲をあげた此の會も、發會當時非常に熱心に盡力した一人が、遠く蒙疆自治政府の官吏として赴任してつたので、本年は開催の運びには至るまいと、寂しく思つてゐたところ、昨年集つた者の中二三人が、折角の會を一回で終らせては残念だ、申譯ないといふので骨を折り、豫定の如く十月二十日に第二回が開かれた。出席通知の多かつた割に、當日實際に集つた者は多くなかつたが、(十二名)一同は非常に喜んで「やつぱり来てよかつた、やはり毎年集らう」などと話し合つてゐた。

集るのを待つて職員、現在生などと賑かな晝飯をすませ、一同打揃つて不動尊參拜、主任夫妻も共に在園當時の如く公

### 四 退園生よりの通信

園を散策、昔語り之餘念なく記念撮影などをした。夜に入つては會員のみで小宴を催し、和氣霽々の裡に九時閉會、主任に驛までおくられて楽しい一日を終つた。

當日幹事は自分等のみでなく、現在生をも楽しませ度といふことに苦心し、趣向を凝らしたことは嬉しい極みで、御蔭で現在生をも非常に喜ばせることが出来たのは、望外の幸であつた。

蒙疆に行つてゐる青年からは、しきりとその模様を知りたがり、來年の第三回には蒙疆から馳せ參するからといふ、熱心な手紙を何度もよこしてゐるのには感激させられる。

例によつて此の項を設け、違つた方面から多少とも御參考にならばと、一年間の子供達からの手紙の中から左のいくつかを掲げました。他のどこよりもむしろ此の項をよく御覽願ひ度く希望するものです。(原文のまま)

先生 先日は遠くよりおい出下さいまして、誠に有がとら御座居ました、其の夜はうれしくて、良くねむれませんでした。

拜啓 御返信の程有難く拜見致しました、實は先生の御便りと一



緒に、東京へも二通程發信致しました。其の返事が速に此方に着いて居りました。何より當てにして居りました先生の御返信が來なかつたので、若しかしたら妻を迎へた知らせが後れたので、水臭ひ奴と御氣に障つたかと思ひましたが、直ぐに思ひ返しました。

此の世の中で一番御慕ひ申して居る先生の事故、其の様な事は無い筈、之れは何かの事情が有つての事と思ひ居りました。矢張りそうで有つたので、とても安心致しました。それに今迄で此の様な嬉しい便りを頂いた事は何處からも有ませんでした。私し様の不徳者を自分の子だと思召されて、其の伴が嫁を貰つた事を喜び、早く立派な子供でも生れて呉れ、そうなればわたしに又孫が一人ふへるのだ——と申された其の御言葉が、どんなに私は嬉しかつたか知れません。又有難かつたか知れません。

私は此の事をずつと以前から心に掛けて居りました。只先生と生徒とのみでは物足り無く感じて居りました。せめて親と慕ひ、子と呼んで頂きたかつたのです。それを申上る事も十分存じて居りましたが、何分にも自分如きが其の様な事はとても許され様答は無いと今日迄で諦らめて居りました。突然此の喜ばしい御便りに泣きました。友達が、おい彼女の手に涙なんか出してお安く無いぞ何か寄れ、など、ひやかされたので、馬鹿な事を云ふなそんなけちな氣持を起さず此處のところをよく讀んで見て呉れと、先生からの手紙を見せてやりましたが、何んだ此のくらの手紙に泣くやつが有るものかと云はれて、私は餘りの事に腹立たしく思ひ君等におれの泣ける心裏がわかつてたまるものかと云つた程でした。何卒之からは御父さんとして慕はせて下さる様重て御願致します。(下略)

一月一杯で退院しまして、又しばらく淺川の方に行つて居りまして最近自宅に歸りました。歸つて見ますと先生からいつに變らぬ案じて居られる御葉書を受取して居りまして、全く恐縮致しますと共に御返事の遅れました事を衷心より御詫言致します。弟の入營、妹の嫁入等々段々に年を取つて來ると、行事も殖えて參ります。それで只今私の方がやつて居ります。やれますかどうか誠心やる心算りで居ります。會社の方はまだ休職です、それから去る十二日に男子を出生しました。母子共に健全です。愈々人の親と成つて責務の重大を感じられます。よい名でも御座りますでしょうか、一同名をつけるのに大童で御座ります。

謹啓 二月一ばいの餘寒と申して、まだ／＼寒いと云ひますが、梅がちらほらと咲き豆撒の聲などが聞こえますと、もうすつかり春に成つた様な氣が致します。それでもまだ戸外は木枯が吹いて春遠しを感じさせます。

去る三日は、御地もさぞ賑やかだつた事と存じます。其の節は二人してお伺ひ致し、色々御心配を掛け誠に申し譯ありません。私し達がお伺ひして、あれほど喜んで下さる先生や奥様に、長い間御無沙汰ばかりして御心配を掛けした事を、今になつて悔いております。あの時の先生の嬉しそうな顔、今も尙想ひ浮びます。尙又其の節文子さんのお喜び事のお話、私は嬉しくて嬉しくて、自分事の様心にはづんでなりません。しかし何時か此の日の來る事を待つて居ましたが、それがはつきりときましたとなんだか心淋びしさを思はしめます。

拜啓 先生にはまことにすみませんでした。先生に御守と五訓と、青少年學徒ニ賜ハリタル勸語三ツの物は、たしかに受取りました。

先生 奥の方々皆様にはおかはりありませんか、僕も元氣で一生懸命に仕事を働いてをりますから先生御安心して下さい。

それから先生に送つてもらつた五訓を守ります。至誠 誠なれ。良心にかへりみ、うわべをかざらず。正直を旨と致しませう。勤勞 よく學びよく勵め。難儀をこらへ仕事に精を出しませう。自治 人にたよるな。自分の事は自分でやり、自立自營の人となりませう。進取 人に負けるな。ぐ／＼せず元氣よくやり通しませう。公德 人に迷惑をかけるな。物を大切に扱ひ、人に親切をつくしませう。

先生がこんなに僕を心配してくれるのがわかります、この五訓を聞いてくれたので、兄さんもお父さんも喜んでをります。これからのこの五訓を工場にはつておけと言はれました。僕は嬉しくてたまりません。この五訓を守りますから御安心して下さい、まことにありがとうございました。僕も元氣よく仕事を一生懸命に働きますから御安心して下さい。

今年の夏は先生がこちらにくるのをおまちしてをります。ではさようなら

曇り寒さも彼岸までとかや。漸やく春めいて參りました。御無沙汰致しまして何とも申し譯御座りませんでした。千葉の病院は本年

床の間の掛軸、放鶴について先生よりお話を伺ひ、年月賣の様に育てられた文子さん。其の實つまり鶴を放つてやると云ひなされた先生、優しいお父さんお母さんの子に生れて來た文子さんは、本當に幸福だと思ひ、其の先生に自分も育てられたと思ふ時今までの如く、御心配を掛けした事を悔いられてなりません。

今まで幸福に育てられた文子さんです、これから先もきつと幸福になる事を願つておます。文子さんが嫁いで後、奥様にはなにかとお心淋びしき折もあるかと存じますが、私し其の想像以上に文子さんのお幸福を祈つてゐらつしやる事と存じ上げます。それに成彦君の入學試験と色々御心配事がかさなり、くれ／＼もお身體を大切にして下さい。

追伸 おそれ入りますが文子さんのお喜びの日は是非お知らせ下さいませ様に御願致します。成彦君にもあまり無理をせぬ様に、無事に御入學をお祈り申上げて居ます。皆様に宜敷く

二月五日

謹啓 早速の御返信有難く拜見致しました。種々のニュース遠く離れ居る私に取り胸が高なる思ひです。思成會の内よりかくも出世をなさる人物が出ると云ふ事は、之へに先生の切なる御教導の賜と同時に、我々一同の譽此上も有りませぬ。先生の御胸中の程遣い大阪より机に筆取り乍ら、嬉し涙に御察し申し上げます。自分も層一層の努力を以つて、前進して彼の人達に闘ひをいどんで行きます御安心下さい。私達の同期の人達で好學さんが嫁さんを今度貰つた由御喜び申上げますが、志道、賢哉、由道、博志、不違君等々此頃



如何ですか。  
 扱て此度女子さんには御目出度、早い物ですね、先生私が女子さんをオンブ第一番にして早二十年餘ですが、それだけ私の頭もハゲ上つて来たのですね。つく／＼鏡を見るとあいそがつかます。自分より年長者からオヂさんと云はれるも無理ないです。所で先生ツマラない品ですが、もう御仕度も立派に出来て居る處で、かような物をと想ひましたが、夫婦協議の結果なか／＼まともならず、長老の人に裁断を受け、結局何足でも先々入るからとの結論で、御祝ひの印に、ふだんばきに御受納下さる様御願ひ申し上げます。御氣に召すまいけれど、どうぞ女子さんにも御納めの程伏して御願ひ申し上げます。

先は取敢ず御祝ひの御書面迄  
 敬白  
 二白 先生若し彼地へ御付添にて御出の節は、露路必ず當地に御出を御待ち申し上げます  
 皆様に宜しく

〔左記は曾て手におひぬ村の厄介者なりし一少年を當園に世話したる當時の役場吏員なりし人よりの感激の書面なり〕  
 謹啓 其後の御無沙汰平に御ゆるし相成度時下春暖之砌皆様御變りもなき事と存じ御よろこび申上候小生も此頃はよく／＼老碌いたし申候へども幸に餘命を全ふいたし居り候へば乍憚御安心相成度候さて先日〇〇〇より〇〇市の某会社に勤務いたし居るから安心してもらひたいとの手紙に接しました私は實に嬉しかつたのです  
 〇〇が人並以上の人間になり得ない迄もせめて自活の出来得る人物になり得れば先生に對する謝恩の一部にもなり得るものと日頃忘却せし事無之にかゝわらず今日迄其所在も相分らず何等一回の通

知だに接したる事なきに突然今回の通知有之たる事は察するに先生の御差圖によるものなりと考へられ候も兎に角家内迄迎へたりとの事なれば大によろこぶべき事に御座候皆これ先生の賜にして未だ神に見捨てられざる〇〇の前途又祝すべきであります  
 彼にして先生の教訓なきに於ては悪黨の首領たらざるも一方の旗頭位は無論の事に御座候小生は日頃先生の教訓上に就て心から敬服致しつゝあるものに候へども今回の〇〇の件に就ては更に其思ひを深からしむるものに有之候實に何回となく失敗を重ね容易ならざる迷惑を掛け迎も救ひ得らるゝ人物と思はれぬにもかゝらず先生におかれましては救ひの綱を少しもゆるめず先方に於て少しなりとも氣付きたる様子の見ゆる場合は以前の失敗は悉く是れを棚にあげ飽く迄も其救ひの途を講ずる等迎も勘忍強き神様の再生にあらざれば出来得べきものにあらずと考へられ候も御要職柄とは申しながら屈せずたゆまず殆んど救ひの道なき迄の彼を御見捨て無之御善導下さる先生に對しては益々低頭平心感謝の言葉なき次第に御座候何卒學園の爲國家の爲御自愛專一に奉祈候  
 敬具

### 第五 歴代園長並びに主任

總長 (千葉感化院時代は總長を置く)  
 船越 衛、藤島 正健、渡邊 暢  
 院長 (昭和三年以前は院長と稱す)  
 各宗共立時代  
 服部 元良 自明治十九年五月至同二十年四月

石井 實禪 自明治二十年五月至同年十一月  
 解良 教俊 自明治二十年十一月至同二十一年四月  
 三池 照鳳 明治二十一年四月

#### 新勝寺經營時代

三池 照鳳 自明治二十一年四月至同二十七年五月  
 石川 照勤 自明治二十七年六月至大正十三年一月  
 荒木 照定 自大正十三年二月至現在  
 副院長 (副院長は後主任となる)  
 坪井善四郎 自創立至明治三十一年十二月  
 松田 宥禪 自明治三十三年八月至同年十一月  
 大友 秀松 自明治三十三年十一月至同三十五年二月  
 峯川 照和 自明治三十五年二月至同四十二年八月  
 主任  
 大友 秀松 自明治三十五年二月至大正十年一月  
 大友 惟誠 自大正十年一月至現在

### 第六 職員 (〇印は園内常住者)

園主兼園長 荒木 照定  
 會計主任 大友 惟誠  
 會計主任 淺井 照次  
 教師 勝田 野榮  
 教師 飛田 野榮  
 〇印は園内常住者

實料教師 押尾 清子  
 保 姆 〇大友 靜子

篤志園醫 醫學博士 藤崎 公道  
 篤志眼科園醫 醫學博士 山崎 一雄  
 篤志齒科園醫 新橋 利吉  
 篤志整骨園醫 小倉 桂  
 篤志劍道教師 加勢 胖

職員一同は、園長の指導監督を受くるは勿論、能く園長の精神と、本園職員たるの自覺とにより、職務に従ふの外、現在としては別に職員に對する成文の訓令はない、唯協同一致して圓滿に、且つ規律ある家庭を作るのを目的とし、而も此の範圍に於て、自由に活動を許し、濫りに牽制を加へない組織である。

藤崎公道氏は、嚴父關川博道氏(前篤志園醫)のあとを受けて其の職に在るが、其の經營に係る如春堂病院醫員を擧げて常に園生の保健に留意せられ、殊に疾病治療に際しては、熱心親切にこれに當られ、更に山崎眼科院長山崎一雄氏は眼科を、眞木齒科醫院新橋利吉氏は齒科を、小倉整骨醫院長小倉桂氏は整骨外科を、擔任せられてゐる爲め、入園し來る兒童は精神状態が薄弱で身體強健でないもの多に係らず、日を経るに従つて、健康状態良好となり、稀に疾病、負傷等あるも後害を遺した者の少いことは、本園の最も欣幸とし、



最も誇りとする所で、是等諸士の高情に對し深く謝意を表してゐる次第である。

### 第七 經費並びに基本金蓄積

#### 一 昭和十五年年度決算

本園には嚴密なる豫算はないと云ふ方が事實に近い、固より大體の豫算を定めて置き、右を標準として支出をなし、嚴に濫費を防ぐ事は申す迄もないが、實際には必要に重きを置き、必要なる以上は實費を支出するの躊躇しない、從て亦豫算内だからといつて必要もない費途に無理に消費するやうなことはないのは無論であり毎月定日本園經費の金額を新勝寺會計主幹から領收し、之を支出する慣例であるが會計上園長及主幹より未だ曾て一言の注意質問を受けたこともない、全く深い信頼を與へて、濫りに細小の監督を加ふるやうなことはないのである。此結果は自然、局に當る者に對し、自制心を與へ、求めないで總ての節約が行はれ、其効果は儘に豫算を限定する以上であつて更に頗る便利を極めて居る。左に記載するのは昭和十五年年度の決算である。

#### 昭和十五年年度決算

歳入	歳出	合	歳入	歳出	合
臨時部	臨時部	計	臨時部	臨時部	計
二一、六七四・五二	一七、五四二・五二	二、八八六・八三	二一、二二六・〇〇	一七、五四二・五二	二、八八六・八三
五三一・四八	二〇、四二九・三五	一、七九六・六五			
合	合	計	合	合	計
二一、六七四・五二	一七、五四二・五二	二、八八六・八三	二一、二二六・〇〇	一七、五四二・五二	二、八八六・八三
歳入	歳出	合	歳入	歳出	合
臨時部	臨時部	計	臨時部	臨時部	計
二一、六七四・五二	一七、五四二・五二	二、八八六・八三	二一、二二六・〇〇	一七、五四二・五二	二、八八六・八三
五三一・四八	二〇、四二九・三五	一、七九六・六五			
合	合	計	合	合	計
二一、六七四・五二	一七、五四二・五二	二、八八六・八三	二一、二二六・〇〇	一七、五四二・五二	二、八八六・八三

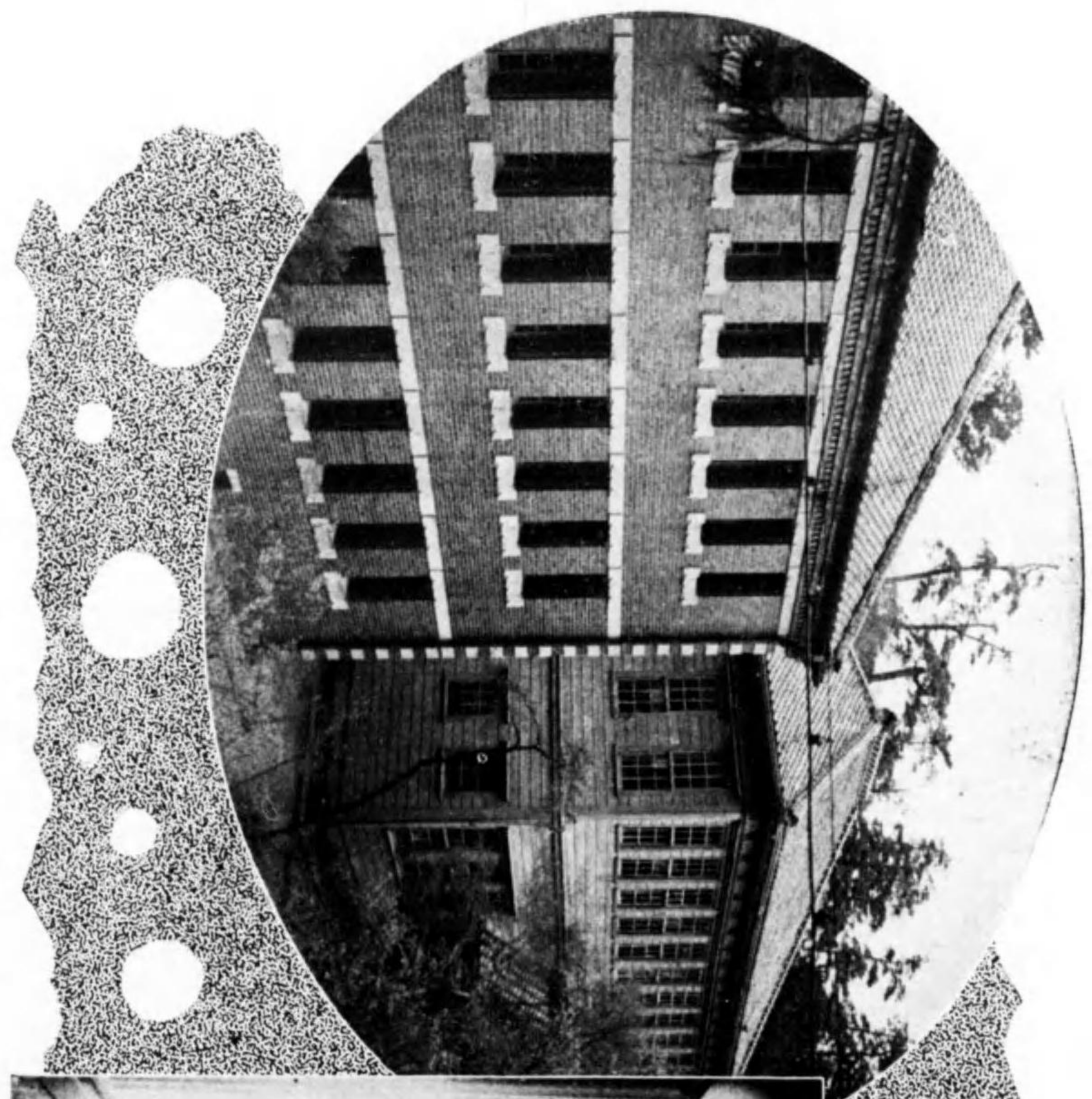
#### 二 基本金の蓄積

明治四十一年三月、本園を千葉町より成田町へ移轉して以來、前掲の如き官公衙の獎勵助成金及び各篤志家より本園へ寄附せられた金員を蓄積して、基本金を作るの方針を採り、目下着々實行中である。しかし本園は自ら進んで一般より寄附金を受けやうとするの方法はこれを探らず、専ら篤志家の同情、義捐に任せて來たのであるが、現在金貳萬七千二百八十五圓と、有價證券千九百參拾圓を蓄積するに至つてゐる。

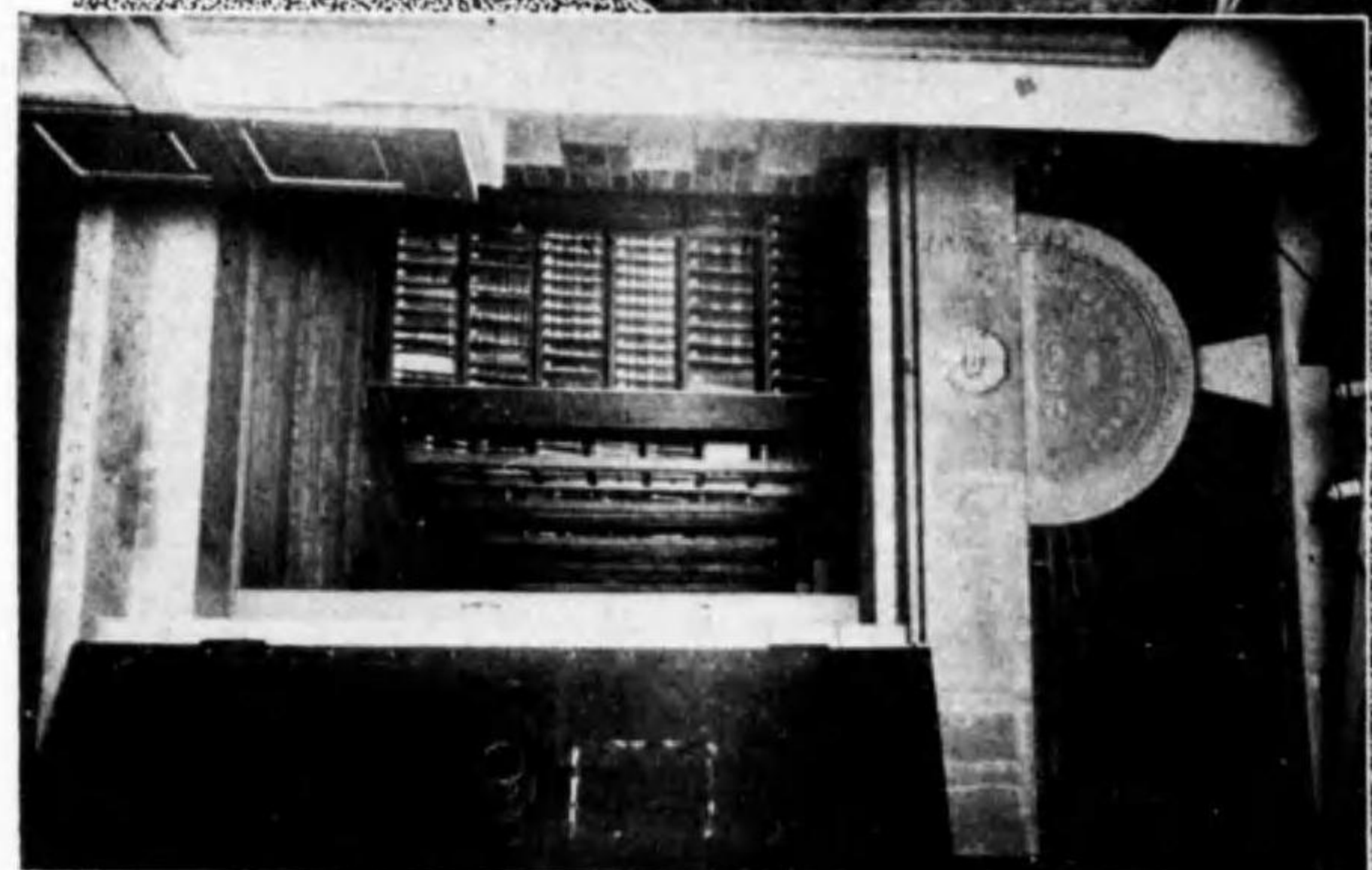
# 成田圖書館



館 書 圖 田 成



庫 書



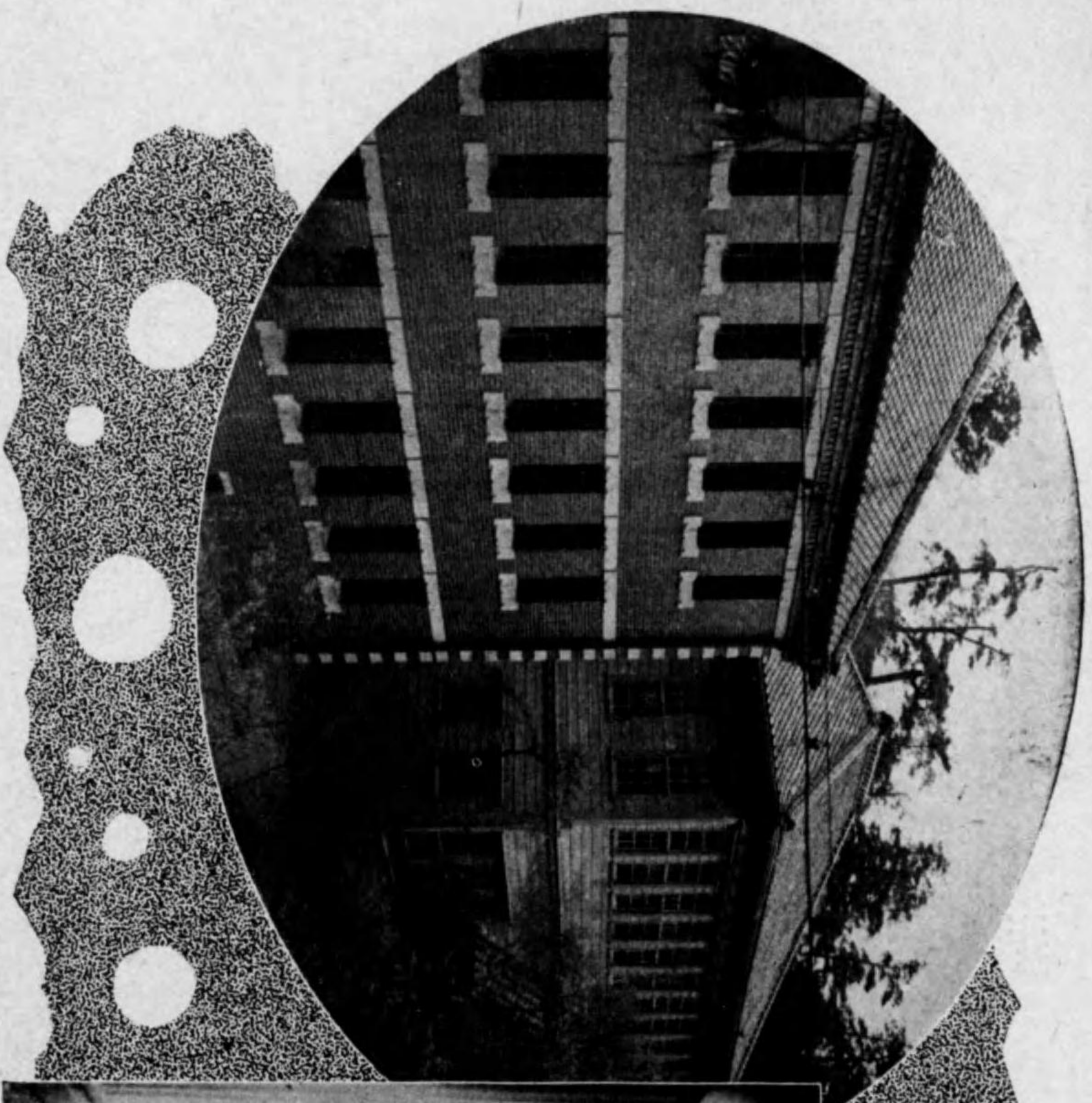
寫 眞  
昭和十五年成田圖書館一覽  
圖書館事務體系  
圖書分類要目表

目 次

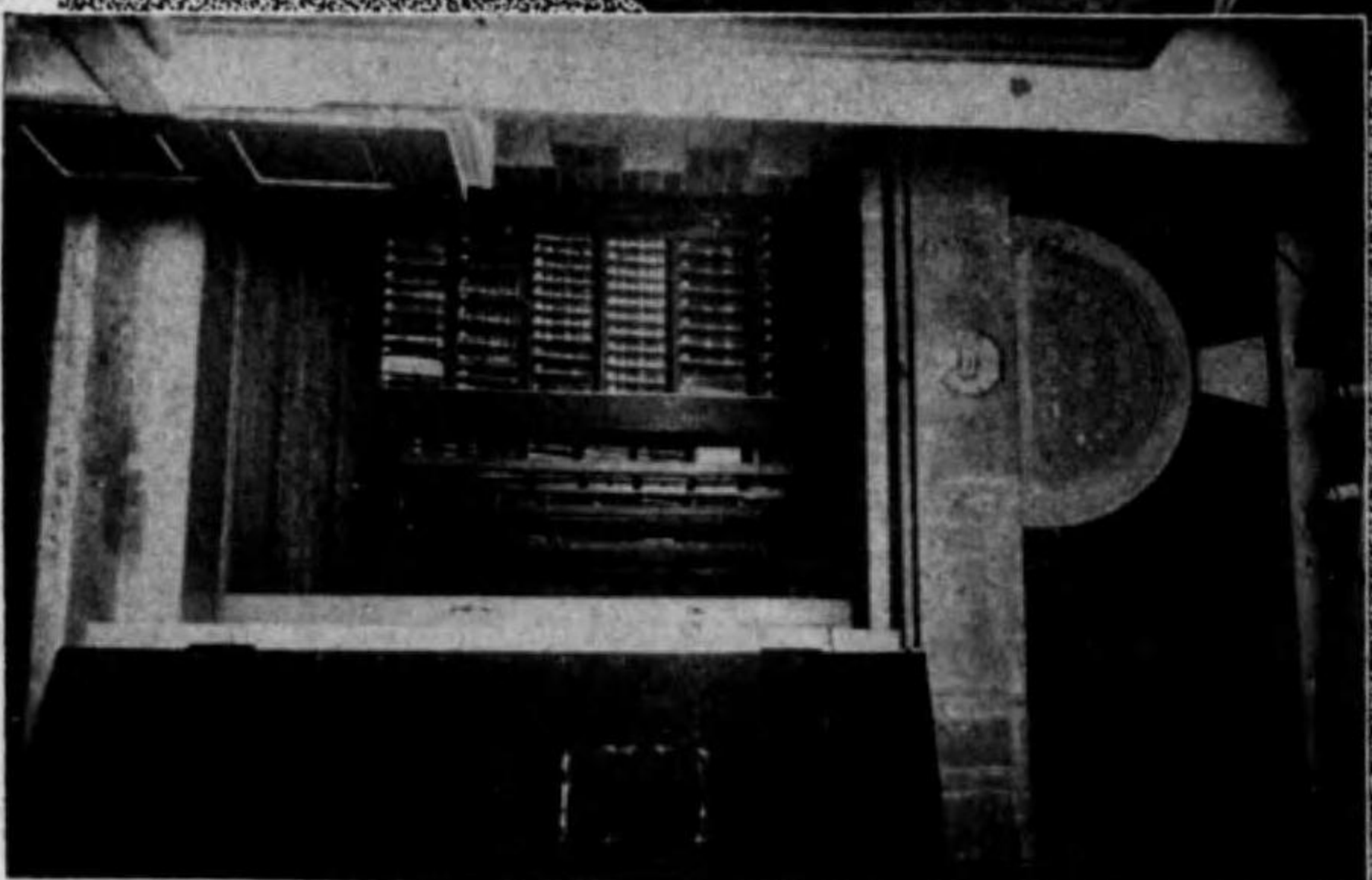
第壹 位置並びに沿革	九三頁
一 位 置	九三
二 沿 革	九三
第貳 設備並びに施設	九四
一 建物・設備	九四
二 館 則	九四
三 藏 書	九六
四 目 録	九七
五 施 設	九八
國民學校との連絡	九八
參籠堂文庫	九八
團體貸出	九八
婦人のための家庭配本	九八
佛教雜誌論文索引編纂	九九
刊 行 物	九九
第參 閱覽狀況	一〇〇
第四 歴代館長・顧問・主事	一〇一
第五 職 員	一〇一
第六 經 費	一〇一
第七 昭和十五年度録事	一〇三
第八 昭和十五年度圖書寄贈者芳名	一〇四
第九 昭和十五年度雜誌新聞寄贈者芳名	一〇八



成田圖書館



書庫



寫眞  
昭和十五年成田圖書館一覽  
圖書館事務體系  
圖書分類要目表

目次

第壹 位置並びに沿革	九三頁
一 位置	九三
二 沿革	九三
第貳 設備並びに施設	九四
一 建物・設備	九四
二 館則	九四
三 蔵書	九六
四 目錄	九七
五 施設	九八
國民學校との連絡	九八
參議堂文庫	九八
圖書貸出	九八
婦人のための家庭配本	九八
佛教雜誌論文索引編纂	九九
刊行物	九九
第參 閱覽狀況	一〇〇
第肆 歴代館長・顧問・主事	一〇一
第伍 職員	一〇一
第陸 經費	一〇一
第柒 昭和十五年度雜事	一〇一
第捌 昭和十五年度圖書寄贈者芳名	一〇四
第玖 昭和十五年度雜誌新聞寄贈者芳名	一〇八







## 圖書分類要目表

- |  |  |  |
|--|--|--|
| <p>0 總類</p> <p>00 鄉土資料</p> <p>01 圖書・圖書館</p> <p>02 事 業</p> <p>03 統 計</p> <p>04 叢書・全集</p> <p>05 新聞・雜誌</p> <p>06 協會・學會</p> <p>08 稀 觀 書</p> <p>09 隨筆・雜書</p> <p>1 宗教・哲學・教育</p> <p>10 宗 教</p> <p>11 神 道</p> <p>12 佛 教</p> <p>13 基 督 教</p> <p>14 哲 學</p> <p>15 論 理</p> <p>16 心 理</p> <p>17 倫 理</p> <p>18 支那哲學</p> <p>19 教 育</p> <p>2 文學・語學</p> <p>20 文 學</p> <p>21 日本文學</p> <p>22 支那文學</p> <p>23 歐米文學</p> <p>24 小說・戲曲・講談落語</p> <p>25 兒童文學</p> <p>26 論說・演說・式辭速記</p> <p>27 語 學</p> <p>28 國 語</p> <p>29 外 國 語</p> <p>3 藝術・演藝</p> <p>30 藝 術</p> <p>31 美 術</p> <p>32 書 畫</p> <p>33 書 道</p> | <p>34 繪 畫</p> <p>35 彫塑・骨董・美術工藝</p> <p>36 寫 真</p> <p>37 印 刷</p> <p>38 音 樂</p> <p>39 演 藝</p> <p>4 歷史・傳記・地理・紀行</p> <p>40 歷 史</p> <p>41 日 本 史</p> <p>42 東 洋 史</p> <p>43 西 洋 史</p> <p>44 傳 記</p> <p>45 地理・紀行</p> <p>46 日本地誌</p> <p>47 亞細亞地誌</p> <p>48 歐羅巴地誌</p> <p>49 亞米利加其他諸國誌</p> <p>5 政治・法律・經濟・軍事</p> <p>50 法 制</p> <p>51 政 治</p> <p>52 外交・國際</p> <p>53 植 民</p> <p>54 法 律</p> <p>55 經 濟</p> <p>56 財 政</p> <p>57 軍 事</p> <p>58 陸 軍</p> <p>59 海 軍</p> <p>6 社會・風俗・家庭・娛樂・運動</p> <p>60 社 會</p> <p>61 社會政策</p> <p>62 社會運動</p> <p>63 社會思想</p> <p>64 社會問題・社會事業</p> <p>65 家族及兩性問題</p> <p>66 風 俗</p> | <p>67 家庭及家政</p> <p>68 娛 樂</p> <p>69 運 動</p> <p>7 理學・數學・醫學</p> <p>70 理 學</p> <p>71 數 學</p> <p>72 物理・化學</p> <p>73 天文學・地文學</p> <p>74 博 物</p> <p>75 醫 學</p> <p>76 基礎醫學</p> <p>77 臨床醫學</p> <p>78 治 療 學</p> <p>79 保 健 法</p> <p>8 工學・交通・通信</p> <p>80 工 學</p> <p>81 土木工程學</p> <p>82 建 築</p> <p>83 機械工學</p> <p>84 電氣工學</p> <p>85 鑛 山 學</p> <p>86 造 船 學</p> <p>87 交 通</p> <p>88 通 信</p> <p>9 產 業</p> <p>90 產 業</p> <p>91 農 業</p> <p>92 園 藝</p> <p>93 林 業</p> <p>94 畜 產 業</p> <p>95 蠶 業</p> <p>96 水 產 業</p> <p>97 工業・工藝</p> <p>98 鑛 業</p> <p>99 商 業</p> |
|--|--|--|



# 昭和十五年成田圖書一覽

## 圖書分類要目表

備考	設備	沿革	目的	書藏		日開館數	前年度開館日數	施		設
				書集別特	藏書數			閱覽施設	施	
圖書館ノ附帶施設トシテ行フベキ社會教育の事業ハ新更會ニ於テ實施セラル、ニ付本館ニテハ只單ニ讀書獎勵ノ施設ノミヲ行フ	敷地一、〇二八坪、建物ハ木造二階建一棟、煉瓦造三階建書庫一棟、附屬建物木造平屋建六棟、此ノ坪數三三〇坪ニシテ閱覽室・事務室・目錄室・雜誌書庫・書庫其他各室並ニ便所・小使室・職員住宅等ニ分ル	本館ハ成田山ノ經營ニ屬スル圖書館事業ニシテ前貫首故石川僧正ノ發意ニ依リ明治三十四年一月設置同時ニ同師本館ノ館長トナリ同三十五年三月開館閱覽ヲ開始ス、同四十年三月書庫落成、大正十三年一月館長示寂、同年二月現貫首荒木僧正其ノ後ヲ承ケテ館長トナル、此間主事ノ更迭四名	圖書雜誌ヲ蒐集シテ廣ク公衆ノ閱覽ニ供ス	足立栗園文庫 一、三四冊 石川鴻齋文庫 五二冊 望洋文庫 三、〇〇冊 (前貫首石川僧正遺文庫)	一二一、七六七冊	三二二日	三二五日	館内閱覽 和洋裝書 二種十二冊 和洋共覽 二種十二冊 貸出 一週間乃至三週間 貸出文庫 新更會巡回文庫用トシテ貸出	讀書獎勵施設 小學校トノ連絡 講話 兒童生徒・青年團其他 刊行物配布 青年讀者百選 報	
				足立栗園文庫 一、三四冊 石川鴻齋文庫 五二冊 望洋文庫 三、〇〇冊 (前貫首石川僧正遺文庫)	一二一、七六七冊			三二二日	三二五日	館内閱覽 和洋裝書 二種十二冊 和洋共覽 二種十二冊 貸出 一週間乃至三週間 貸出文庫 新更會巡回文庫用トシテ貸出
昭十五年 年度決算 一八、九二六・九二二	成田山貫首大僧正 荒澤木善慈 照定海亮	成田山貫首大僧正 荒澤木善慈 照定海亮	職業種別 學生・生徒 諸職(本表以外) 兒童・職業 農・水産 商業 交通 教育 宗教 記者 家庭配本成績	職業種別 一日平均 七五・八 三八・九 一〇・三 九・七 四・七 三・二	職業種別 一日平均 六〇・五 五・七 五・八 五・五 五・五 三・九 三・五	職業種別 一日平均 七五・八 三八・九 一〇・三 九・七 四・七 三・二	職業種別 一日平均 七五・八 三八・九 一〇・三 九・七 四・七 三・二	職業種別 一日平均 七五・八 三八・九 一〇・三 九・七 四・七 三・二	職業種別 一日平均 七五・八 三八・九 一〇・三 九・七 四・七 三・二	職業種別 一日平均 七五・八 三八・九 一〇・三 九・七 四・七 三・二

0 總類	34 繪畫	67 家庭及家政
00 郷土資料	35 彫塑・骨董・美術工藝	68 娛樂
01 圖書・圖書館	36 寫真	69 運動
02 事彙	37 印刷樂藝	
03 統計	38 音樂	7 理學・數學
04 叢書・全集	39 演藝	70 理學
05 新聞・雜誌		71 數學
06 協會・學會	4 歷史・傳記・地理・紀行	72 物理・化學
08 稀觀・書畫	40 歷史	73 天文學・地理
09 隨筆・雜書	41 日本史	74 博物
	42 東洋史	75 醫學
1 宗教・哲學・教育	43 西洋史	76 基礎醫學
10 宗教	44 傳記	77 臨床醫學
11 神佛	45 地理・紀行	78 治療學
12 基督	46 日本地誌	79 保健法
13 哲學	47 亞細亞地誌	
14 倫理	48 歐羅巴地誌	8 工學・交通
15 倫理	49 亞米利加其他諸國誌	80 工學
16 倫理		81 土木工學
17 倫理	5 政治・法律・經濟・軍事	82 建築
18 支那哲學	50 法制	83 機械工學
19 教育	51 政治	84 電氣工學
	52 外交・國際	85 鑛山學
2 文學・語學	53 植民律	86 造船學
20 文學	54 法律	87 交通通信
21 日本文學	55 經濟	
22 支那文學	56 財政	9 產業
23 歐米文學	57 軍事	90 產業
24 小說・戲曲・講談落語	58 陸軍	91 農業
25 兒童文學	59 海軍	92 園藝
26 論說・演說・式辭速記		93 林業
27 語學	6 社會・風俗・家庭・娛樂・運動	94 畜產
28 國語	60 社會	95 蠶業
29 外國語	61 社會政策	96 水產
	62 社會運動	97 工業・工藝
3 藝術・演藝	63 社會思想	98 鑛業
30 美術	64 社會問題・社會事業	99 商業
31 美術	65 家族及兩性問題	
32 書畫	66 風俗	
33 書道		



# 成田圖書館

## 第壹 位置並びに沿革

### 一 位置

成田圖書館は、成田町成田三百十二番地に在りて、成田山の東南麓景勝地の中央に位し、東は成田高等女學校に、西は成田山本堂に隣し、南に成田町市街地を控へ、北は丘陵地帯の成田山公園に接し、翠滴る老樹を以て蔽はれ、冬は暖かに夏は涼しく、圖書館としては最好の位置である。

### 二 沿革

本館は成田山の經營に屬する圖書館事業であつて、明治卅四年一月十一日設置を開申し、翌卅五年一月一日を以て開館した。即ち前貫首故石川僧正が明治卅一年歐米視察の途に上り、同卅三年四月歸朝後直に列國の風潮に鑑み、積年の理想を實現する爲に設置せられたものであるが、館主は取り敢へ

ず現地に建築されてあつた一府三縣農水産物品評會々場の跡を、そのまゝ使用することになつたのである。

斯くて開館に際し、從來新勝寺に所藏せられてゐた佛書・漢籍約七千冊、是れに石川僧正所藏の宗教・哲學・教育・文學・語學・歴史・地理・傳記・紀行其の他の新刊書約七千冊と、洋書五百餘冊、合計約壹萬五千冊を藏書として開館し、尙ほ更に當町石川愛一郎氏・三橋金太郎氏・鳥居直哉氏・大野市平氏・小川淑應氏を始め、其の他の有志者より多數の圖書を寄贈され、同年五月までに其の數一千餘冊を増加したのである。然るに當時は書庫もなく、目錄も具備せず、只同建築物の四周に書架を列べ、只一人の事務員にて閱覽事務を取扱つてゐたが、其の後漸次閱覽人の増加と共に圖書も増加し職員も増加となり、同三十五年六月には和漢書分類假目録完成、次いで同三十八年二月より館外貸出を開始、爾來年を追つて藏書數も益々増加したので、書庫の必要を感じ、同三十九年三月書庫新築着手、同四十年六月九日之が落成式を舉行此の日を以て本館永遠の記念日と定めた。



蔵書數も同四十一年には四萬冊となり、愈々印刷目録の急務を告げたので、同四十四年十月には和漢書分類目録第壹編を刊行、更に大正三年には同第貳編を刊行し、又閱覽方面に於ても、同四十四年一月より夜間開館を実施して、一層閱覽者の便益を圖ることとなつた。

然るに大正十三年には、不幸にして館長石川僧正が物故せられたが、現貫主荒木僧正には直に其の後を襲ひて館長に就任、銳意館勢の發展に留意され、時代の趨勢に順應して圖書備付の充實・郷土資料の蒐集を始めとして、貸出文庫・團體貸出・參籠堂文庫並びに家庭配本の實施・印刷物の刊行・各種展覽會の開催等を行ひて從來の面目を一新し、蔵書數も十二萬餘を算し、閱覽人も頗る増加して一日平均百四十餘名を數ふるに至つた許りでなく、本館をして眞に積極的進出の現代的圖書館とせられたのである。

此の間事務主任たる主事の交迭は四名に及んでゐる。即ち初代の主事は高津親義で、其の功績も少くなかつたが、昭和二年十二月勇退して顧問（同十一年十一月卒去）となり、其の後小林力彌・高井觀海の兩主事を経て、同九年には司書成田善亮昇格して主事となり、以て今日に至つてゐる。

## 第貳 設備並びに施設

### 一 建物・設備

書庫を除く外の本館建物は、もとく舊物利用のものであるから、圖書館として遺憾の點多々あることは免れないが、從來之を適當に區分し、階上を一般閱覽席に、階下を婦人・新聞の各席に指定してゐる。即ち閱覽室其の他の建物設備を略記すれば次の通りである。

閱覽室（木造二階建）延七十七坪、目錄室（木造）六坪、事務室（同）九坪、宿直室（同）四坪、使丁室（同）三坪、休憩室（同）三坪、應接室（煉瓦造）六坪、書庫（煉瓦造三階建）延九十坪、雜誌書庫（木造）六坪、兒童室（木造）十四坪住宅其他附屬建物（木造）百二十六坪餘

就中書庫は明治四十年の新築に係るが、蔵書充満、増築の必要急なるものがある。

### 二 館 則

#### 成田圖書館貸出規則

第一條 本館ハ主トシテ一般圖書、雜誌等ヲ蒐集シテ廣ク公衆ノ閱

覽ニ供シ社會ノ智德啓發ニ裨益スルヲ以テ目的トス  
第二條 何人ニテモ滿十二歳以上ノ者ハ本館ニ來リテ圖書ノ借覽ヲナスコトヲ得

第三條 本館ハ左ノ時限ヲ以テ開閉ス  
開館時限 閉館時限

四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	九月
三月	十月
四月	十一月
五月	十二月
六月	一月
七月	二月
八月	三月
九月	四月
十月	五月
十一月	六月
十二月	七月
一月	八月
二月	



- 三 帶出料金壹圓ヲ豫納スベシ
- 四 成田中學校・成田高等女學校・成田學園・成田幼稚園・新更會ノ教職員ハ同校長・主任若クハ理事ノ保證ニ依リ帶出ヲ許可ス
- 五 新勝寺徒弟詰合員ニ限リ同寺執事ノ證明ニ依リ成田國民學校職員ニ限リ同學校長ノ保證ニ依リ帶出ヲ許可ス
- 六 四・五ノ場合ニハ帶出料ヲ要セズ
- 第二條 本館ハ前條ノ手續ヲ了シタル上ニテ帶出簿ヲ交附ス
- 第三條 帶出有効期間ハ一ケ年トス
- 第四條 貸出圖書ハ一回ニ付和裝書ハ三冊以内洋裝書ハ一冊トス
- 第五條 貸出期間ハ一週間以内ノ範圍ニ於テ本館ノ見込ヲ以テ其時々之ヲ定ム
- 第六條 期間ニ至リ尙續借セントスルモノハ一旦返納シ更ニ借受ケノ手續ヲナスベシ
- 但他ニ同書ノ借覽ヲ請フモノアル時ハ續借ヲ謝絶スルコトアルベシ
- 第七條 借受ノ圖書ト雖モ本館ニ於テ必要アル時ハ臨時返戻セシムルコトアルベシ
- 第八條 帶出券ヲ得クルモノニシテ他所へ轉居シタル場合又ハ改名シタル場合ハ其ノ都度届出ヅベシ
- 第九條 保證人死亡其他事故ニ依リ資格ヲ失ヒタル時ハ更ニ保證人ヲ定メ定式ノ證書ヲ差出スベシ
- 第十條 左記ニ該當スル圖書ハ帶出ヲ許サズ
- 一 大部ノ圖書

- 二 各學科ノ事案・辭書類・書目・新聞
- 三 館内閱覽ノ請求多キ圖書
- 四 新刊圖書ハ二ヶ月乃至三ヶ月後定期刊行書雜誌類ハ裝釘ノ上ニ非ザレバ貸出セズ
- 第十一條 借覽期限ヲ經過シ本館ノ注意ヲ受クルコト二回ニ及ビ尙返戻セザル時ハ本館ハ圖書帶出ノ效力ヲ取消シ其事情ニヨリ再ビコレヲ許可セザルベシ此ノ場合ニ於テハ帶出圖書ノ代金ハ保證人ニ辨償セシムベシ
- 第十二條 借受圖書ヲ紛失シ若クハ汚損シクル時ハ本人又ハ保證人辨償ノ責ニ任ズ
- 第十三條 圖書帶出ハ開館期間中ニ限ルモノトス
- 第十四條 圖書帶出ヲ中止セントスルトキハ其旨届出ヅベシ但帶出料ハ返戻セズ
- 第十五條 圖書帶出有効期間満期トナリ引續キ希望ノモノハ更ニ帶出願書ヲ差出スベシ

### 三 藏書

本館藏書は明治三十五年開館當時は、僅に壹萬五千冊に過ぎなかつたが、爾來年々三・三千冊を増加し、昭和十六年三月末現在では次の通りとなつた。

- 洋書 一一六、六四八冊
- 和漢書 五、一一九冊

### 計

一一一、七六七冊

藏書に就いては、取り立て、特色あるものとはないが、佛書の貳萬餘冊、就中密教關係書の豊富なことは特徴としてよい。又白鳥博士の厚意によつて得たる朝鮮本の一部等は、本館の稀觀書として聊か誇りとするものである。此の外康平弘安の古寫本・慶應以前の版本・古徳碩學の書入本・手澤本並びに洋書に於ては壹千五百年代の古刊本其の他多少の由緒歴史附のものもある。尙ほ所藏中の文庫としては、望洋文庫（石川僧正文庫）・依田文庫（依田學海文庫）・栗園文庫（足立栗園文庫）・石川文庫（石川鴻齋文庫）・木村文庫（木村泰賢博士文庫）・白鳥文庫（白鳥庫吉博士文庫）・池田文庫（池田僧正文庫）等があるが、これ等は特殊の關係で寄贈又は移讓されたものである。

藏書の増加率は、大體寄贈のものを合して年々貳千餘冊で現在約拾貳萬壹千餘冊を算するに至つた爲め、成田町の人口に對して、壹人當り平均拾壹冊強となり、又これを成田町現在戸數に割當れば、壹戸當り平均五十五冊強となるのであるから、都會中心に偏重し勝な今日眞に地方的貢獻をなしつつあるといつてよいのである。

尙ほ雜誌は新聞を合して、約貳百五拾餘種の備付けがあるが、此の中雜誌は年々合冊製本して一般圖書と同様の取扱をもなしてゐる。殊に佛教雜誌に至つては、明治後半期より蒐

集してゐるので、近時遙々東京より専門の學生の來館者日に多きを加ふるに至つたことは誠に喜ばしいことである。

### 四 目録

目録は大別して來館者の爲めのカード目録と、外部にある者に對する印刷目録との二種に分ける事が出来る。

本館備付のカード目録は「分類」と「書名」の二種であるが、實際上使用率の多いのは矢張り分類目録である。更にこれを時代別に見るときは、舊きものよりは新しきものが利用されてゐる。尤も昭和四年前の分類は多少杜撰であるのに加へて、其の後のものは從來の八門分類を廢し、新制の十進分類に改めたるを以て、無論組織も一變し、精密となつた爲め、檢索上の利便を増大したことに由る。

印刷目録は第二編までの刊行成り、大正三年初期までの藏書を發表し得たのであるが、其の後種々の關係上印刷の機会がなく、今日まで遷延してゐるけれども、事實其の内容は優に第四乃至第五編まで刊行し得る見込である。随つて他日續編上梓の曉は一段の貢獻をなし得ることと思ふ。

次に、新着圖書の紹介方法としては整理済の圖書を閱覽室の新刊書架に排列公開し、此の中主なるものは「成田圖書館報」に登載して希望者に頒布してゐる。



### 五 施設

本館は公共図書館であり、従つて圖書閲覧以外に、附帯施設として社會教育的事業をも行はなければならない筈であるが、當山に於ては斯の方面の施設として、別に新更會と稱する機關を設け、こゝで青年並びに一般成人の社會教育や修養を目的とする講演・講習その他種々の事業を實施し、更に青年團巡回文庫等をも行つてゐるので、本館の附帯事業とすべき社會教育的施設としては、専ら讀書獎勵に關する施設だけに止まつてゐる。今其の施設の主なるものを擧ぐれば次の通りである。

#### 國民學校との連絡

讀書の鼓吹と云ふことは、成人間に之を求むるよりも、寧ろ幼少年時代より書物に親しむの習慣を涵養するの要あることは、今更言を俟たない事柄である依つて本館にては國民學校と連絡し、常に各學級の兒童を適宜本館に收容して自由讀書をなさしめ、併せて圖書館利用の指導をなすつゝある。而して本年度に至り成田山六和會主催、新東亞建設博覽會期中使用したる假閱覽室を改造専用兒童室とし書架の兒童讀物圖書をこの室において公開式に自由に兒童をして閱覽せし

むることとした。

#### 參籠堂文庫

成田山に參籠する斷食者の信仰・修養の資として、昭和十一年七月五日より參籠堂内に貸出文庫を開設したが、參籠者より相當に利用され、良好な成績を收めてゐる。

#### 團體貸出

四隣町村青年團 又は其の他團體に對して、希望の圖書を一纏めにして貸出してゐる。

#### 婦人の「家庭配本」

#### 規定

- 一、家庭配本とは、御家庭にある主婦の方を始め、いろ／＼の事情で圖書館へ通ふことの出来ない御婦人の方の爲めに自宅に居ながらにして本を讀める様にお好みの本を圖書館からお届けすることです。
- 二、加入者の範圍は、成田町（當分のうち土屋、寺臺、郷部、園護臺不動ヶ岡を除く）に居住する方ならどなたでも差支ありません。但し場合により保證人を要することがあります。
- 三、加入御希望の方は「申込書」をお出し下さい。

「申込書」は本館から差上げますが、お申込の形式は口頭、電話、葉書何れでもかまひません。

- 四、申込は凡て月ギメとし、一族のうち何人でも差支ありませんが、一人一口として御申込下さい。
- 五、加入された方には、希望の本を選ぶべき「配本用圖書目録」をお貸し致し、又新刊書の目録を發行の都度差上げます。
- 六、目録によつて御希望の本がございましたら配本手が伺つた時、請求用紙（配本手持参）に記入の上お渡しになれば次回に配本致します。
- 七、毎回貸出期間は一週間とし、配本は月四回、冊数は一人一冊と致します。
- 八、配本料及雜費として一口一ヶ月金廿五錢の手續料を申受けます。
- 九、借りた本は必ず期日にお返し下さい。これを守らないとお互の迷惑になります。尙本をなくした場合はそれと同様の本、又は代價を頂きます。
- 十、「家庭配本」と「一般貸出」とは全然別に扱ひますから假に一家庭のうちで兩方御加入になつてゐても「一般貸出」の方は配本手に托すことを堅くお断り致します。

### 實施の成績

圖書館に於ける閱覽者中、婦人の閱覽者が男子に比して殊に少數であることは、一般的に見る傾向であるが、家庭教育の衝に當り、一家の主婦として將又母として立行くべき婦人が此の狀況に在ることは大に憂慮すべきことである。此の缺

陥を幾分にも匡救しやうとする目的を以て、昭和九年十月より「家庭配本」と稱し、前掲の如き規定によつて、積極的に各家庭の婦人に呼びかけ、希望の圖書を直接配達することに於て来たが、是に依つて婦人の讀書心を啓導し、年々其の效果の頗る多かつたことを認めるのである。而して其の讀書傾向は、大體小説類並に家庭に關するものが第一を占めてゐる。

#### 佛教雜誌論文索引編纂

本館に於ける佛教雜誌には、明治後半期時代より蒐集したものが多數あり、從來専門學徒研究の資料として相當に貢獻して來てゐるが、廣汎に涉るこの雜誌に索引のない爲め、調査上に不便とする所が少くない。依て本館にては此の缺陷を補ふため、目下一々該雜誌の内容を調査し、之が索引の編纂をなすべく努力中である。

#### 刊行物

##### 一 青年讀物百選

一般青年に對する讀書獎勵の目的にて、昭和十一年度圖書館週間に際し「青年讀物百選」第壹輯を刊行、遍く一般に頒布して讀書の便に供し、各方面より多大の歡迎を受けた効果に鑑み、その後も引續き刊行、本年度はその第五輯を發行、



過去一箇年間本館備付の圖書中より、特に青年に適する良書百餘冊を選定し、之に解題を付して一般に頒布した。

一 館報  
 新着圖書を一般に周知せしめる目的を以て發行頒布し來れる「増加書の知らせ」は昭和十四年三月を以て廢止し、同時に「成田圖書館報」と改題して隔月刊行、從來同様讀書層に便益を圖りつゝある。その内容は、増加書の案内はもとより新刊良書解題、讀書獎勵に關する記事を初め、本館所藏の佛教關係雜誌主要論文目錄等を掲載したものである。

### 第參 閱覽狀況

閱覽圖書の第一位が文藝物にあることは、何れの公開圖書館に於ても同様の現象ではあるが、讀書の階梯は先づ文藝物から入るのが通例であるから、これ等の大衆は寧ろ誘掖指導すべき讀者層として、大切なるお得意と見做すべきである。尙、堅實なる方面の特殊傾向は、近年佛教關係雜誌を研究する遠來の學徒が増加して來た事である。これは本館が比較的舊刊の佛教雜誌を收藏し居ること、一方都會に於ける有數圖書館は、其利用上地方のそれと異り、手續煩雜且つ不便なる點多々あるが爲である。

次に、一般入覽者の種別を見るに、從來男子に比して婦人は極めて劣勢であつたが、別掲の如き家庭配本を實施してより斷然面目を一新した傾きがあり、また帶出および館内に於ける婦人閱覽者も年を遂ひ増加しつつある。又、館外貸出は、個人としては現在四六四名を算し、而も累年増加の傾向にあり、團體としては、隣接町村青年團への貸出をなしてゐる。

昭和十五年度 閱覽統計 (開館日數三二一日)

種別	内館	外館	合計	百分比
總類	1,013	1,118	2,131	30.9
宗教・哲學・教育	2,086	1,193	3,279	50.8
文學・語學	10,369	23,613	33,982	60.5
藝術・演藝	1,323	524	1,847	30.3
歷史・傳記	1,764	1,304	3,068	50.5
地理・紀行	1,764	1,304	3,068	50.5
政治・法律	953	780	1,733	30.2
經濟・軍事	953	780	1,733	30.2
社會・風俗	1,371	618	1,989	30.5
娛樂・運動	1,371	618	1,989	30.5

閱覽圖書類別

### 第四 歷代館長・顧問・主事

本館の歷代館長・顧問・主事は左の通りである。

- 石川 照勤 (自明治三十四年一月十一日至大正十三年一月三十一日)
- 荒木 照定 (自大正十三年二月一日至現在)
- 高津 親義 (自昭和三年一月一日至同十一年十一月二日)
- 今澤 慈海 (自昭和十一年五月二十八日至現在)
- 高津 親義 (自明治三十五年六月一日至昭和二年十二月三十一日)
- 小林 力彌 (自昭和三年五月四日至同四年四月十七日)
- 高井 觀海 (自昭和五年五月五日至同六年四月十九日)
- 成田 善亮 (自昭和九年一月一日至現在)

### 第五 職員

昭和十六年三月末現在本館職員は左の通りである。

種別	内館	外館	合計	一日平均
理學・數學・醫學	2,993	428	3,421	5.5
工業・交通・通信	533	358	891	1.4
産業	605	360	965	1.7
兒童圖書	2,111	992	3,103	5.7
合計	2,808	3,196	5,004	100.0
一日平均	77.7	97.8	175.5	

閱覽人職業別

種別	内館	外館	合計	一日平均
農業・水産業	622	2,486	3,108	9.7
礦業・工業	20	340	360	1.1
商業・交通業	232	1,030	1,262	4.7
教育家・宗教家 新聞雜誌記者	104	828	932	3.3
官吏・軍人	7	117	124	0.4
學生・生徒	2,212	1,375	3,587	75.8
其他	2,184	10,314	12,498	38.9
兒童	1,218	1,778	2,996	10.0
合計	11,111	20,108	31,219	100.0



館主兼館長	荒木照定
顧問	今澤慈海
主事	成田善亮
司書	小川益藏
事務員	武士田文哉
同事	岩田實衛
同助	綿貫實
同手	木村莊太
同託	八木内
同寺	寺内

### 第六 經費

本館昭和十五年度決算は次の通りで、これを所在地成田町人口に割ると一人當金壹圓七拾錢強となる。

昭和十五年度決算額	一八、九二六、九二
職員給及雜給	八、五七三、六七
圖書費	六、六〇九、八〇
需用費其他	三、三〇二、三二
營繕費	四四一、一三

### 第七 昭和十五年度 主要録事

- 四月七日 館員綿貫實文部省圖書講習所へ入學のため上京。
- 四月八日 囑託本橋清退職。
- 五月五日 新勝寺より宗教團體法施行による公益事業調査の依頼あり。
- 五月廿五日 千葉縣圖書館協會總會を成田高女講堂に於て開催出席者四十名、終つて新東亞建設博覽會を見學解散。尙席上圖書館事業功勞者を表彰、本館員中高田、小川、武士田がその光榮に浴した。
- 五月三十一日 新東亞建設博覽會は盛會裡に本日をも以て閉會觀覽總人員二十四萬八千三百九十九人。
- 六月九日 創立記念日。東大教授橋本進吉博士及助教池田龜鑑氏引率のもとに學生十三名來館、貴重書等展覽に供す。
- 六月十六日 新設兒童室本日より開館す。
- 八月二日 千葉縣圖書館協會主催の圖書館講習會に館員出席。
- 八月十日 千葉縣主催成田小學校にて開催の拓務訓練所生六十餘名來館、今澤顧問講話。
- 九月五日 木村莊太(前成田中學校囑託)本館囑託となる。
- 九月廿八日 航空日制定記念小展覽會開催。
- 十月一日至十日 曝書及調査

第三次防空演習開始、青年館員は交替にて新勝寺自衛隊

に参加協力せり。

十月廿三日 文部省中央圖書館司書講習會は新更會にて開催中のところ都合により本館をも會場とし、爾後廿六日まで交互に開催さる。

十月廿九日 階上を成田山參光協會に貸與、成田町青年團商業部員試作「郷土物産展示即賣會」を三十日まで開催。

十一月二日 伊能忠敬日本實測輿地圖八枚入藏。

十一月十日 町主催紀元二千六百年奉祝式典に館員一同參列。

十二月二日 成田山事業年報(昭和十四年度)青年讀物百選(第五輯)館報を各圖書館其他へ寄贈。

十二月七日 成田主事教育勅語換發五十年に際し教育功勞者として文部省より表彰を受く。

十二月十九日 館員にて製本をなすため準備中のところ用具も取揃ひたれば第一回を開始。爾後毎月二日位づゝ作業をなすことに決定。

十二月廿三日 高田司書新勝寺へ轉勤。

二月一日 町主催の建國祭式典に館員一同參列。

二月廿三日 内閣情報局囑託桑原善作氏及寫眞班員來館「寫眞週報」に掲載するため本館家庭配本狀況を撮影。綿貫實文部省圖書館講習所卒業歸館



### 第八 圖書寄贈者芳名

昭十五年和

(五十音順)  
敬稱省略

高 松 宮 家	有栖川宮記念厚生資金選奨録(八)	岡野 小太郎	高橋 照空
姉 崎 正 治		岡部 榮 信	田 口 慎 二
荒 木 林 之 助		小 塚 省 治	竹 中 猛 壽
飯 島 仁 三 郎		乙 部 泉 三 郎	竹 村 義 正
猪 狩 好 晴		小 野 野 幸 次	田 中 義 正
池 上 幸 健		加 納 己 代 次	玉 井 久 次 郎
石 橋 俊 一		壁 瀨 修 藏	鶴 田 亮 郎
磯 谷 紫 江		北 里 關 藏	手 島 八 郎
市 川 億 次 郎		喜 多 實 關	中 井 克 比 古
伊 藤 東 一 郎		吉 川 正 己	中 西 武 雄
今 泉 四 郎		木 村 莊 太 己	西 村 安 次 郎
岩 館 衛 郎		久 保 田 榮 吉	野 依 秀 市 郎
内 田 彦 助		佐 藤 恒 二	長 谷 川 正 道
大 文 惟 誠		淨 法 寺 總 濟	長 谷 岩 正 吉
大 孟 羣 誠		菅 澤 重 雄	花 房 孝 太 郎
王 和 田 齋 眼		鈴 木 重 透	濱 野 知 三 郎
小 川 和 平		相 馬 愛 藏	林 壽 祐 郎
			林 竹 次 郎

東 鷹 女	伊 太 利 大 使 館 情 報 部	京 都 市 役 所 觀 光 課
福 地 久 衛 衛	一 千 年 祭 整 理 局	京 都 電 燈 株 式 會 社
藤 井 佐 兵 衛	井 上 會 社	慶 應 義 塾
藤 田 謙 一	宇 都 宮 德 藏 回 禮 店	慶 應 義 塾
ボース・ラスビハリ	榮 養 士 會 社	啓 明 會 社
星 野 進	大 倉 精 神 文 化 研 究 所	興 亞 院 華 北 連 絡 部 青 島 出 張 所
堀 口 龜 重	大 阪 商 船 株 式 會 社 文 書 課 圖 書 係	工 業 品 規 格 統 一 調 查 會
前 田 林 外	大 阪 每 日 新 聞 社	皇 國 農 民 自 治 聯 盟 出 版 部
牧 野 元 次 郎	王 子 製 紙 株 式 會 社	工 事 畫 報 社
三 上 義 夫	大 谷 派 本 願 寺 教 學 課	國 學 院 大 學
三 島 吉 太 郎	大 林 芳 五 郎 傳 編 纂 會	國 防 研 究 會
水 野 葉 舟	海 防 義 會	國 務 院 總 務 廳 官 房 文 書 課
陸 奥 廣 吉	花 王 石 鹼 株 式 會 社 長 瀨 商 會	五 尊 社
村 野 孝 顯	香 川 縣 教 育 會	金 刀 比 羅 宮 社 務 所
横 山 重 秋	鹿 兒 島 史 談 會	小 峰 研 究 所
吉 田 辰 秋	葉 子 研 究 會	四 條 暖 神 社 々 務 所
愛 應 會	華 中 鐵 道 株 式 會 社	四 條 誓 會
愛 育 會	香 取 神 宮	司 法 省 會
淺 野 セメント 株 式 會 社	華 北 事 情 案 內 所	昭 和 製 綱 所
朝 日 新 聞 大 阪 本 社 調 査 部	華 北 電 信 電 話 株 式 會 社	清 水 先 生 教 育 五 十 年 古 稀 記 念 會
天 野 屋 利 兵 衛 之 碑 建 設 會	樺 太 廳 長 官 々 房 文 書 課	市 立 山 形 商 業 學 校
青 德 財 團	巖 松 堂 古 典 部	新 義 眞 言 宗 智 山 派 宗 務 所
	木 村 コーヒー 店 東 京 支 店	新 更 會



眞宗大辭典刊行會  
 新勝寺  
 新勝寺收納方  
 新潮社  
 生產擴充研究會  
 生命保險會社協會  
 赤十字博物館  
 宜川會館圖書縱覽所  
 第一相互住宅株式會社  
 大日本忠靈顯彰會  
 臺北帝國大學  
 多田屋  
 千葉縣  
 茶業組合中央會議所  
 中央大學會員會  
 中華民國新民會東京連絡處  
 中朝會  
 朝鮮總督府  
 朝鮮總督府專賣局  
 朝鮮總督府中樞院  
 帝國水難救濟會  
 帝國農會經濟部  
 天理教總務部調查課

東亞研究所  
 東京海上火災保險株式會社  
 東京芝浦電氣株式會社芝浦支社  
 德島縣醫學會  
 名古屋商工會議所  
 奈良縣師範學校  
 成田高等女學校  
 成田中學校同窓會  
 南洋廳  
 ニコノ主義普及會  
 日伊協會  
 日本醫科大學  
 日本醫師會  
 日本學術振興會  
 日本機械學會  
 日本興業銀行調查課  
 日本鐵山協會  
 日本香料藥品株式會社  
 日本人網スヲ勞務聯合會東京出張所  
 日本赤十字社千葉支部  
 日本窒素肥料株式會社  
 日本圖書協會  
 日本文化中央聯盟

日本放送協會  
 日本棉花栽培協會  
 日本郵船株式會社  
 野田醬油株式會社  
 東葛飾郡農會  
 藤本ビルブローカー證券株式會社  
 北京大學醫學院  
 寶文館  
 北陸館  
 保險院簡易保險局  
 保險加入者協會  
 北海道帝國大學北方文化研究室  
 滿鐵東亞經濟調查局  
 滿鐵圖書館研究會  
 三越企業關係  
 文部省圖書講習所  
 安田銀行  
 山梨縣信用販賣購買利用組合聯合會  
 輸血法研究所  
 養鷄報國聯盟  
 橫濱市電氣局  
 米澤高等工業學校  
 東福寺

林業試驗場

石川縣立圖書館  
 今治市立明德圖書館  
 愛媛縣立圖書館  
 大坂市立圖書館  
 大谷大學圖書館  
 大橋圖書館  
 鹿兒島縣立圖書館  
 鎌田共濟會圖書館  
 九州帝國大學圖書館  
 協調會圖書館  
 興風會圖書館  
 國學院大學圖書館  
 國立中央圖書館籌備處  
 互尊文庫  
 神宮文庫  
 靜嘉堂文庫  
 臺南市立圖書館  
 臺灣總督府圖書館  
 高岡市立圖書館  
 千葉縣圖書館  
 朝鮮總督府圖書館

帝國圖書館  
 天理圖書館  
 東京帝國大學圖書館  
 東大寺圖書館  
 東洋文庫  
 栃木縣教育會圖書館  
 鳥取縣立圖書館  
 富山市立圖書館  
 長野縣立圖書館  
 名古屋市立圖書館  
 函館市立圖書館  
 哈爾濱圖書館  
 光丘文庫  
 深川圖書館  
 福岡縣立圖書館  
 滿鐵奉天圖書館  
 山口縣中央圖書館  
 山梨縣中央圖書館  
 早稻田大學圖書館







斯道文庫報	斯道文庫	彰化市立圖書館ニユース	彰化市立圖書館	香	滿鐵大連圖書館	北京近代科學圖書館	新着圖書案内	興風會圖書館	臺中洲立圖書館	臺南圖書館新着圖書目錄	臺南市立圖書館	臺灣總督府圖書館新着圖書目錄	臺灣總督府圖書館	寶塚文藝圖書館月報	寶塚文藝圖書館	千葉文	千葉縣圖書館	帝國圖書館報	帝國圖書館	讀書信	長野縣立圖書館	鳥取縣圖書館協會報	鳥取縣中央圖書館	瀨波圖書館協會報	中島圖書館	大橋圖書館	富山縣中央圖書館報	富山縣立圖書館	長崎縣中央圖書館報	長崎縣中央圖書館	奈良縣立圖書館月報	奈良縣立圖書館	函館圖書館多與利	函館市立圖書館	福岡縣立圖書館月報	福岡縣立圖書館	朝鮮總督府圖書館	光丘文庫
-------	------	-------------	---------	---	---------	-----------	--------	--------	---------	-------------	---------	----------------	----------	-----------	---------	-----	--------	--------	-------	-----	---------	-----------	----------	----------	-------	-------	-----------	---------	-----------	----------	-----------	---------	----------	---------	-----------	---------	----------	------

北	宮城縣中央圖書館月報	宮城縣中央圖書館
窗	山口圖書館增加書目錄	山口縣立圖書館
	山梨縣圖書館協會報	山梨縣圖書館協會
	橫濱市圖書館報	橫濱市立圖書館

新更會



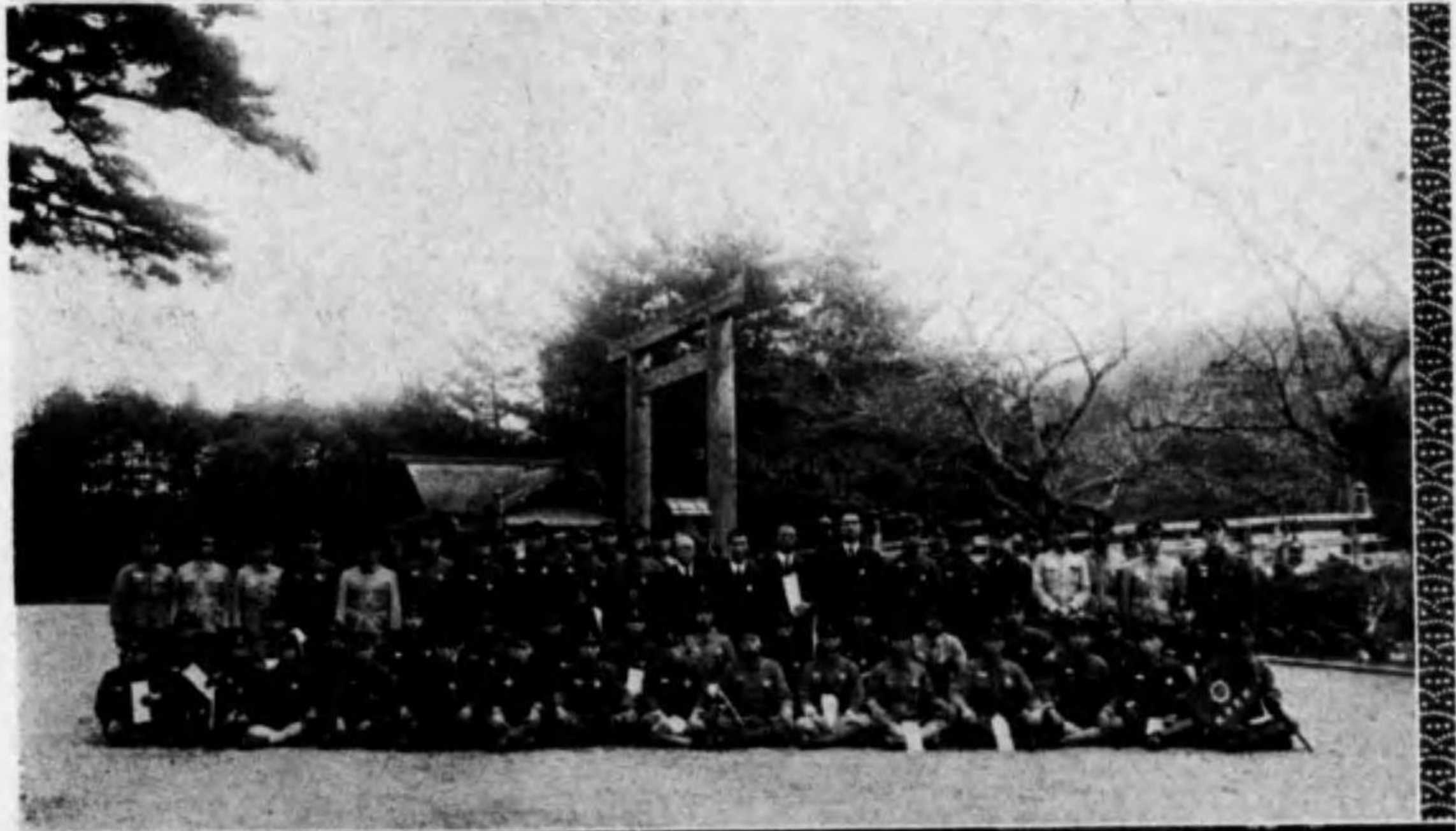






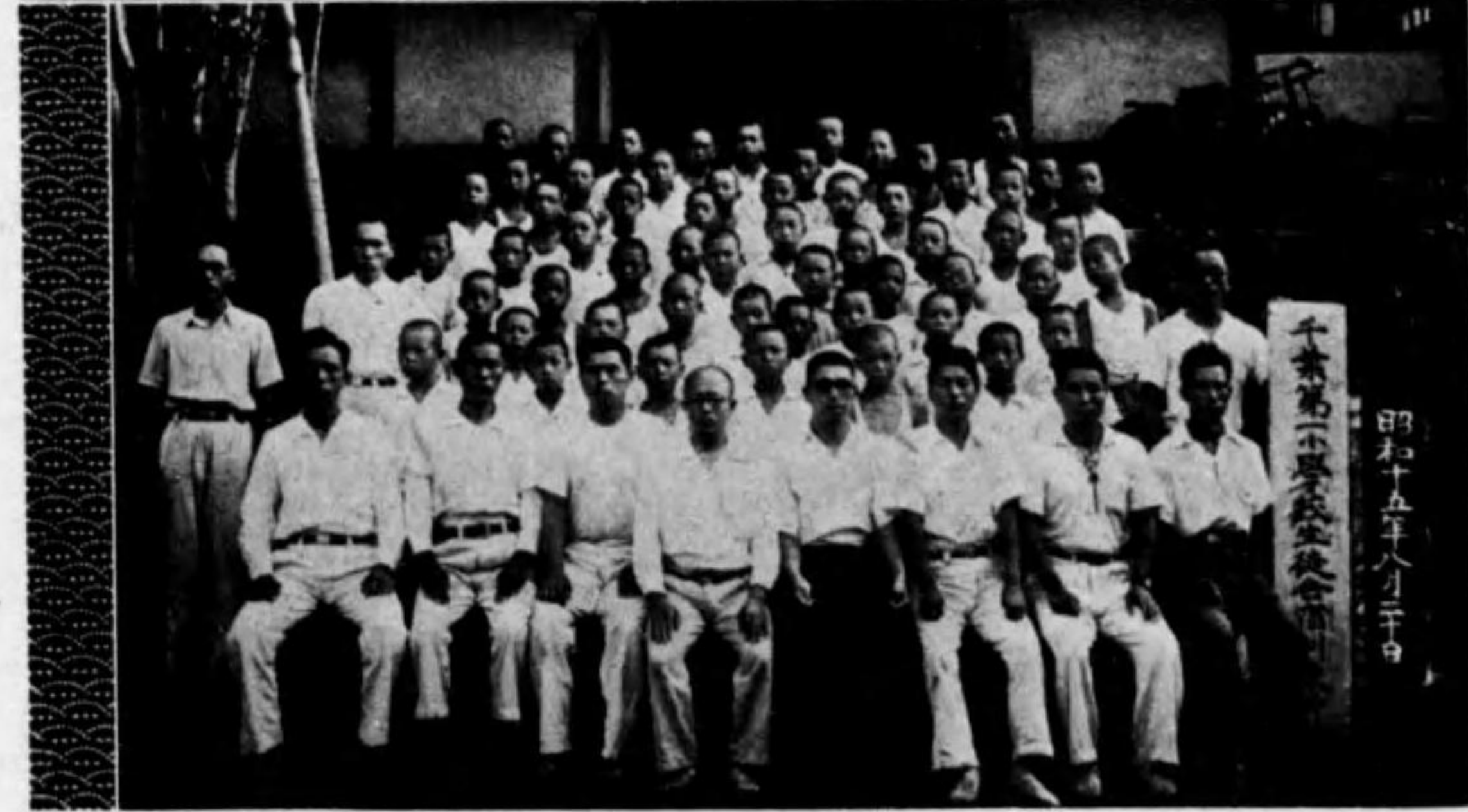


成田山全景チオラマ(本館内展覧)



新更學院參宮記念

小學生徒の合宿



### 新更會綱領

- 一、われ等の營みは日日創造に生きんが爲なり
  - 一、われ等の營みは大和歸一に生きんが爲なり
  - 一、われ等の營みは感謝報恩に生きんが爲なり
  - 一、われ等の營みは至誠勤勞に生きんが爲なり
  - 一、われ等の營みは不動信念に生きんが爲なり
- 右五條われ等は相共に歡喜奉行せん



天 業 翼 贊

新更會指導精神圖說

- 一、われ等の営みは日日創造に生きんが爲なり
- 一、われ等の営みは大和歸一に生きんが爲なり
- 一、われ等の営みは感謝報恩に生きんが爲なり
- 一、われ等の営みは至誠勤勞に生きんが爲なり
- 一、われ等の営みは不動信念に生きんが爲なり



# 昭 和 十 五 年 度 新 更 會 一 覽

主幹	設	施	組	目	設	沿	位
會長	院	一	職	的	備	革	置
裁	新	般	員	目	備	革	置
成田山貫主大僧正 三橋金太郎 澤田五郎	院學更新	一般的 講演會 本部講演會 展覽會 成田山縁起展覽會 刊行書 新更(月刊機關紙)ノ刊行 修養圖書・パンフレット・ポスター「リーフレット」ノ刊行 巡回 付 二三團體 文庫 閱覽人員 四、五九九人 閱覽冊數 七、七六一冊 其ノ他 建國祭・謡曲大會・奉仕團の活動	役員 總裁一名・會長一名・理事十人・評議員若干名・主幹一名・幹事三名(内一名常任)・司事若干名 職員 總裁一名・會長一名・理事十人・評議員若干名・主幹一名・幹事三名(内一名常任)・司事若干名	皇國傳統ノ健全ナル思想ト鞏固ナル宗教的の信念ノ下ニ國民精神ヲ作興スルヲ主眼トス	設備 敷地一、八〇〇・坪會館ハ木造二階建ニシテ階上ハ講堂階下ハ郷土資料陳列場並ビニ控室、此ノ坪數二四七・五坪・弘誓寮ハ木造二階立ニシテ階上ハ靜觀室・會議室・總裁室・應接室・講師室・宿直室・圖書室・醫務室・階下ハ合宿講習室・食堂・事務室・炊事室・小使室・洗面所・浴室等ニテ此ノ坪數三二八・五坪・新更學院教室ハ二二・五坪	沿革 本會ハ成田山經營ニ屬スル成人教育事業ニシテ現貫主荒木僧正ノ發意ニシテ昭和三年六月創立、現地ニ存置セラレタル舊千葉縣物産陳列館建物ヲ改造シテ會館トナシ同時ニ同院下本會ノ總裁ニ推戴セラレ、同八年五月新更學院設置、同十年七月弘誓寮新築落成今日ニ至ル	位置 千葉縣印旛郡成田町成田一番地成田山新勝寺境内ノ北部 (電話 二三四番)
	昭和六年六月創立 同八年十二月本縣知事ヨリ設置認可アリ 同十年十二月文部・陸軍兩省ヨリ青年學校ト同等以上ノ認定アリ						
總裁 成田山貫主大僧正 會長 三橋金太郎 主幹 澤田五郎	昭和十五年度決算額 四一、一四三・〇三三	經費 昭和十五年度決算額 四一、一四三・〇三三	主幹 澤田五郎	主幹 澤田五郎	主幹 澤田五郎	主幹 澤田五郎	主幹 澤田五郎

## 天 業 翼 贊

- ↑
- 一、われ等の營みは日日創造に生きんが爲なり
  - 一、われ等の營みは大和歸一に生きんが爲なり
  - 一、われ等の營みは感謝報恩に生きんが爲なり
  - 一、われ等の營みは至誠勤勞に生きんが爲なり
  - 一、われ等の營みは不動信念に生きんが爲なり

## 新更會指導精神圖說



新更會々歌

男子の部

石川富太郎 作曲  
弘田龍太郎 作歌

一 常磐の翠滴りて

曉淨き成嶺に

そり立ちたる會館の

薨に光り映えわたる

我等の團結 新更會

三 智徳の練磨重ねつゝ

道にいそしむ春秋の

行事に理想偲ばるゝ

奮き固めを結びたり

我等の團結 新更會

二 世に魁けし旗標

成人教育基礎固く

皇道精神高揚の

氣魄に満ちて搖ぎなし

我等の團結 新更會

四 杜に籠りし鐘韻の

清爽の氣を湛へたる

胸に誓し使命もて

世路の波濤を乗り切らむ

我等の團結 新更會